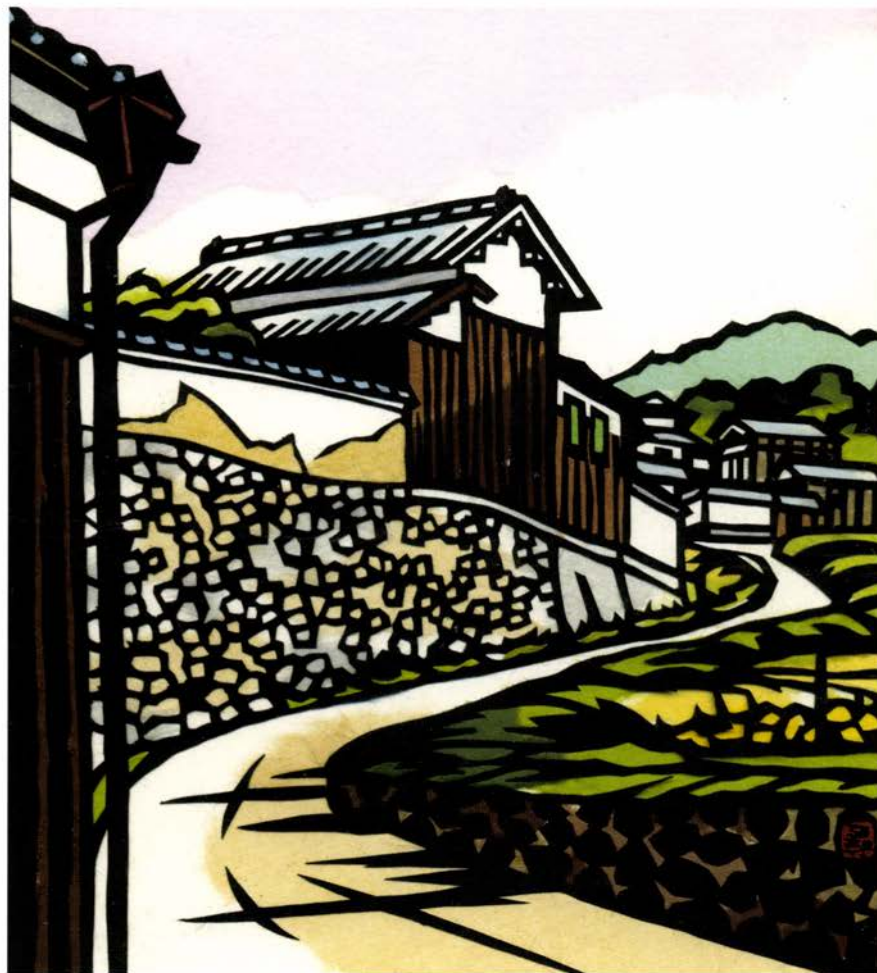


川柳塔

昭和四十一年一月九日発行
平成二十二年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九九六号

日川協加盟



No. 996

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアービュル及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ②2/3頁 一二、〇〇〇円

③1/2頁 九、〇〇〇円 ④1頁 一八、〇〇〇円

（例年、掲出願っている団体様には、別途ご案内を差し上げております。案内状に同封の台紙に原稿を貼付しお申込み下さい。）

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

一、〇〇〇〇号への道 その五

河内 天笑

川柳雑誌昭和36年3月号に「瞩目される戦後作家」として橋高薫風子さんと題し、清水白柳さんが特に心を惹かれた佳句を紹介されている。

女は魔物そして男も夜も魔物
檻の鶴又眼を閉するはかはなし
春愁の階段ゆるく螺をなせり
青雲のところに蜜柑まだ青く
或る時は海の晦さも持つ蚊帳よ
海女の墓陽は海に出て海に没る
これらの句は私の持つことの出来ないものを持っているので作家として羨望に堪えないのだが、こうした方向だけに進んでいたのではないかなと思っている。(紙面の都合理由は省くとある)

牛の背で笛吹く恋がしてみたり
庭石の一つにおいて爪を剪り
こうした心にくいまでの描写を感じさせたり、家庭人としてはどの皿も缺けていず子のない夫婦あかつきの光を得たり子と薔薇と熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り三輪車ポストへはまだ背が足らずそして落つき払ってこんな句も作って居られる二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅人形も器量の順に売れてゆき日銀は誰がはいって行くでなく

勲章の欲しい七才 七十才

昭和30年3月頃から川柳に入って31年には近作柳樽の巻頭を二回も飾られ現在は川柳編集局で活躍されている。

当時、毎号連載された「名句と難句」を紹介された路郎師の稿より薫風子の三句。

煙草のけむりも窓から出て行けり春

誰しもどつかへ出かけるうららかな春。煙草をくゆらすとユラユラ窓から出て行く。そうした一ト時を巧みにスナップしている。

棺の出たあとの夕焼見事なり

ざわめきのあと棺が出て行ったその虚脱状態へ、見事な夕焼が作者の眼を射た。亡き人をいつまでも偲ぶ詩情豊かな句として推奨したい。

地図と一緒に夢を畳めり

「一辺旅に出よう」とひろげる地図。でも何日もかかりそうでは無理、そして「地図と一緒に」夢を畳んだ。14字詩型が一句を引き締める。

4月24日の御命日へあと7日の今日、多岐に亘って導いていただきながら叱られつつ放しで何の恩返しも出来ない不肖の私。私が26才で脱サラ、天下茶屋の駅近くに事務所を開いた昭和36年が懐かしく、同じ年の川柳を覗いて薫風先生のご活躍ぶりを覗かせていただきました。

天笑

春一番つくしん坊を誘い出す
霧晴れて薔がぼつとひらく音
ポーズとる鎖骨へさくら舞い降りる
利き腕を首から吊って逢うている
おはようで今日の喜劇の蓋があき

ク

ク

ク

ク



座右の句

パツと目をひらくと好きなひとがいる

(惠美子)

私の句

一本の線で真昼を見てる猫

坂上のり子

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「山辺の道」

■巻頭言 一、〇〇〇号への道 その五……………河内 天笑 ……(1)

七人の侍……………恒松 町紅 ……(2)

川柳塔(同人吟)……………河内 天笑 ……(4)

川柳塔の川柳讃歌 (65)……………木津川 計 ……(48)

自選集……………(50)

温故知新……………(53)

水煙抄……………川上大輪選 ……(54)

檸檬抄「椅子」……………三宅保州・高田美代子共選 ……(74)

麻生路郎句抄……………(77)

愛染帖……………新家完司選 ……(78)

七人の侍

恒松 町紅

「町紅と号しいつつまでも壮 薫風」と書いた色紙が部屋に飾つてある。あれは十年ぐらい前だったか、いずも川柳大会のあとで薫風先生から頂いたもの。

今年米寿になった。無病息災ならぬ難病息災。腰をかけたり、座つたりは楽に出来るが歩行は長くは苦痛で両足がしびれて歩けなくなる。この病氣になつてからもう二年以上になった。市内の句会には出席しているが、他へは出席する自信がない。したがって各地や本社の大会も無沙汰してしまつた。

編集部から原稿を書いてほしいと、思いがけない依頼が来た。こんないい話を断る氣にはなれず、リハビリのつもりでペン持った。

表題の「七人の侍」とは昭和四十七年頃、川柳塔まつえの同人が丁度七人で、その頃のテレビなどで人氣のあつた時代劇ドラマ「七人の侍」に因んで名付けたものだった。

その七人は、岡崎祥月、中川晃男、柳楽鶴丸、吉岡通児、小林孤呂、舟木与根一、と恒松町紅の七名で、祥月、晃男、鶴丸、通児は既に故人、孤呂二は消息不明、与根一は認

一路集	「届く」	波多野五楽庵選	(82)
	「修正」	三島崧丘選	(84)
	「さまざま」	山本蛙城選	(85)
初歩教室	「虹」	鈴木公弘	(86)
秀句鑑賞	「同人吟」	高瀬霜石	(88)
	「水煙抄」	早川遡行	(90)
■エッセー	「錯覚の夜」	木本朱夏	(91)
四月本社句会			(92)
各地柳壇（佳句地十選／井伊東吉）			(96)
五月各地句会案内			(112)
柳界展望			(114)
■編集後記（ひとこと／原煩惱児）		尚士・朱夏	(116)

座右の句

物差しを替えるところが疲れたら

私の句

寄り添えば歩幅も同じ雪の道

三宅満子

（楓 楽）

知症になり市内の介護施設に入所している、といった状態である。

当時は皆若かったから、現役で働いていた頃のこと、句会も六、七人か十人ぐらいのささやかな会であった。皆が働いていたから大方が夜ではなかったろうか。会誌もB5版の手書きでお粗末なものをコピーしていたし、隔月発行も順調には発行されていなかったようだ。

そして、その頃新しい企画として、川柳塔の巻頭句を批評することをしてみようと思ふ。名も「巻頭句を斬る」などと、物騒な見出しを付けたものである。

座談会の形式で、最初の会は司会者が吉岡通児。通児は次のような挨拶をしている。

「前略」時にはいびるような格好になるかもしれないが、われわれの自己研鑽に併せて川柳というものを、今少し掘り下げて研究してみたいと思うし、また一面では、川柳の本質に触れる機会になれば、川柳人としては本望である。そうした考えで計画した勉強の会であるから、誰もが遠慮なく自分の思ったことを発表してもらいたい」と述べている。

この「巻頭句を斬る」という企画は五十一年頃まで続いたと、当時の会誌に記録が残っている。



河内天笑選

西宮市 秋 元 てる

先ず窓を開けよう風が呼んでいる

家風呂の変哲なさが一番だ

足るを知るではなく唯に不如意なり

二番煎じに気付き尻切蜻蛉ギヤグ

淋しさを気楽とほざき一人住む

ではまたと別れて来たが卒寿なり

弘前市 高 瀬 霜 石

空っぽの財布を風が駆け抜ける

いざという時に頼りになる美学

鉛筆しつかり握り寝る会議

沸点が低いまんまで黄昏る

正直な人だとわかる鼻の穴

食欲が敵とはなんと贅沢な

松山市 高 橋 宏 臣

会者定離風が命を裏返す

空っぽの両手で夕陽受け止める

風船の一つが高所恐怖症

Tシャツの赤いつまでも着ることに
失うことに慣れてしまった手を洗う
君の嘘私の嘘で中和する

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

電車道ホントに懐かしい言葉

これでいいのだ昨日と同じ歩幅だし

妻が手を差し出す時の静電気

じゃれあって後の人生楽しもう

嫌なこと明日あしたと避けている

モーニングの味がよろしく減らぬ客

大阪市 古今堂 蕉 子

待針で止めてただけの愛らしい

心の傷見えないだけに残る悔い

飛ぶ羽根はないけど今日も飛んでいる

十年一昔なんてついこのあいだ

掃除され川も血圧下ったよう

差し出されたハンカチに戸惑っている

鳥取県 佐伯やえ

よだれかけ春のにしましよ地蔵さま
陽が出ると畑の風が呼びにくる

暇さえあれば畑でおもしろい夢を画く

言つてわからぬ人に二度とは近づかぬ

齒の立たぬことには口も手も出さぬ

年より手当やるといふまで生きてやる

和歌山市 古久保 和子

行つたり来たりしながら春も私も

春らしくなつた目にゴミよくはいる

ふるさとはひらがなだけの綴り方

てにをはを入れ替えチャンス待つことに

都落ちして人情にふれてゐる

阿形から吽形へ満月が昇る

西宮市 西口 いわゑ

花器などは選ばぬばらの自負がある

回り回つて嘘が誠になつてゐる

もうひとつの扉開きたい欲がある

手を開く夢は十指にまだあふれ

花束の一輪ずつに笑みもらう

時という大きなものと根くらべ

犬山市 金子 美千代

湯たんぽの湯で顔洗うエコライフ

命綱のようにケイタイ離さない

にんにくと生姜で風邪を寄せつけぬ

せつかくの化粧誰にも会わぬ雨

お静かにメジロが庭で食事中

一斉に顔出すメダカ春を告げ

和歌山市 岩本 美智子

手作りの金屏風立て紀州雛

流し雛厄を背負つて海に果つ

暖かい啓蟄蟻が浮かれたす

みかん出来年 柑皮症にもなりました

家出した時計みつめて連れもどす

御無沙汰を母にお詫びの墓参り

羽曳野市 安芸田 泰子

もの忘れの達人となり春おぼろ

杉花粉美女を泣かせた春の風

余命など問わず桜のいさぎよし

ブランドをまとい女は武装する

考えて考え抜いてあきらめる

納得をしてない音でドア閉め

羽曳野市 吉村 久仁雄

灯を消して明日の風の匂い嗅ぐ

登り道しかない谷に覇気もらう

一日ずつ重ねて生きる母に添う

びつたりと意見があつても足らず

月に吠えたまに詩人の顔になる

迂回路に僕のベンチが置いてある

池田市 栗田久子

がんばっただけの結果はきつと出る
いつからか人間くさくなつた猿
美しい人と呼ばれてみたいもの
休止符があつて安らいでる蛹
まっすぐに伸びた菖蒲が雨を呼ぶ
生きていることで誰かを助けてる

鳥取市 近藤佳子

我が儘を神に許され生き延びる
譲られた席暖かい暖かい
彼岸ざくらひと足先に部屋は春
カサブランカ鶴の群舞のように揺れ
つくしんぼ今年も元氣もらえそう
診察日気合をかけて床を出る

尼崎市 山田耕治

よく喋る運転手にも草臥れる
是非やるといふ公約に入れた票
運悪く道を知らない運転手
血圧を好きなナースに計られる
完熟のわたしを誰も食べに来ぬ
相談をしたいと長い長い愚痴

大阪市 升成好

うんざりの雪はしゃぐのはツアー客
山肌の白い魔物が消えて春
座つてはおれない春のエネルギ―

聞く耳を持つから愚痴が長くなり

帰らないだから昔のままの里
ご破算に願いたいのは歳の蒿

堺市 大久保のん子

牙むいて地球が怒りはじめたぞ
人間の驕りを神は見逃さぬ

ほけぬよう脳にしごきをかけてやる
知らなくてよかつたことに悩まされ

ほとばしる気合目の色までちがう

山積みの本に手垢の影もなし

橿原市 安土理恵

ぜいたくなくしゃみは梅にくすぐられ

逃げたつてすぐに見付かる沈丁花

達観の雛も謀反を企てる

古人形の末路とわたくしの老後

老いの樹海いつかは迷い込むだろう

冷やなら二合それから先は数えない

松山市 古手川

ワクチンマスク造る会社の当て外れ

花に酔い酒に人人人に酔い

どっと来る花見迷惑するさくら

大金を持つたら金に使われる

未だ逝けぬ身辺整理できてない

友達はできたか飯は食つてるか

光

堺市宮本かりん

久々に母を偲んだ夕ごはん

体ぐったり気分さっぱり汗を拭き

耳遠くなった夫の背にノック

ご自由にと言われブレーキがかかる

制限をされると羽目をはずしそう

差し引いてみれば人生プラスだな

河内長野市 山岡 富美子

電器屋にわたし使えぬものが増え

メカニズム脳に入らぬ経済欄

カラオケでアップテンポが歌えない

たんぼの綿毛婚活中らしい

刃こぼれが続いています住所録

キャンパスの巣立ち名残の雪が舞う

枚方市 寺川 弘一

シャボン玉命と末路よく似てる

嬉しい日には生命線が延びている

努力をしてもDNAの壁がある

晩酌と居酒屋違う酔い心地

幸福に悪酔いをすることもある

蹟いた石を拾った人が勝ち

大阪市 谷口 義

夜桜から帰り鬼平犯科帳

恙無く爪だけ伸びてさくら咲く

桜見に行けただけでも御の字だ

サクラサクラ外反母趾の靴履いて

ご存じですか桜が咲いていたことを

振り向いて何度でも見るさくらかな

堺市 奥 時 雄

死ぬまでに売れそうもない高値株

欠損が続く会社にいるスリル

継ぐ人も絶え地図にだけ残る里

無遠慮な祝詞酸っぱい顔で聞く

同席の妻が祝詞に涙ぐむ

神様が多くてこの世治まらず

大阪市 森 田 明 子

カタカナが並ぶ話は信じない

私の中身を本棚に晒す

親切な人を避けたい時がある

熱計り急にしんどくなってくる

私を残して春が発車する

イメージを変えたい帽子屋の鏡

吹田市 穴 吹 尚 士

軽々と妻抱き上げたのは昔

うっとりとして妻に見惚れていた昔

いっぱしの男めざしてなり損ね

憂国の志士が息巻く縄のれん

真つすぐのつもりで男立っている

傷ついた方は一生忘れない

出雲市 岸 桂子

風格のある墓石に花がない
宝くじよりも実の成る苗木買う
法に触れないデパートのつまみ食い
バックミラーに映る古里遠くなる
疲れたら昴の歌を口ずさむ
くじ引きで決まる順番なら妥協

富田林市 中崎 深雪

またかいな病の神に愛される
気がつけば新型ウツに羽交い締め
食べれない眠られないともがく日々
元氣な人が羨ましきこと限りなし
闘病は自分一人と違うやろ
闘病の中で咲かせる花もある

鳥取市 土橋 はるお

年金を二で割りうまく暮らして
割り切れぬ話に割って入ってる
カラオケはベルトゆるめてから歌う
茶畑がなびく茶摘女待っている
出し抜けた事を喋って座を奪う
若者の頭はローンだらけなり

倉吉市 野口 節子

リハーサル過剰本番穴を開け
間違いを正してからの空の青
正客に座りたつぷり汗をかく

正装を解いてお茶漬流し込む

強がりには言っても悔いの二つ三つ
八起き目に確かなものを握りしめ

東かがわ市 清川 玲子

補聴器が宝と思う古希半ば
職ひいて自由時間という重荷
食べている時のお顔は本物だ
うどん煮込んで二人ぼっちの昼にする
雨の日の二人あくびの移し合い
結び直せばまだ繕える出直せる

大阪市 小泉 ひさ乃

好き勝手私ひとりの上機嫌
生き甲斐の趣味で心はほっかほか
まだ見えぬ世界のドアを開ける春
苦難越え楽天力を身につける
ボタンかけ違いで実らない努力
苦手な人に学べる事がたんとある

鳥取市 倉益 一瑠

わたくしが女神になれるチョコを買う
晩学に消化不良をして困る
面倒な人の頭を撫でておく
時が過ぎればそんなに怒ることでない
起こさないで下さい夢を見ています
愛憎がいつばい盛ってある日記

鳥取市 岸 本 孝 子

咲くまでが華だと桜心得る

近頃は育てた孫に嫉まれ

体格はそれぞれメタボ氣にしない

逆らわぬ嫁に見習うことばかり

お彼岸のおかげおはぎにありつける

亡き父母にはっこり逢える墓参り

鳥取市 福 西 茶 子

保護色のまんま蛙が日向ほこ

月一度老人会でリフレッシュ

少子化が雀の世界にもあった

ドクターが禁止しました白髪染め

日の丸に合わぬ腰バン鼻ピアス

プライドは捨てます今日のかくし芸

宇部市 平 田 実 男

株価にも僕にも欲しい浮袋

嬉しさと淋しさ孫が赴任地へ

道草の所どころに生きる知恵

美帆ちゃん的笑顔金メダルに勝る

もみ手する男へ油断など出来ぬ

お裾分けするたび低くなる垣根

三田市 堀 正 和

定番になってしまった湿布薬

ジイちゃんは何になりたいかと聞かれ

またひとつ趣味を増やした浮気性

メンバーが足らないらしい声掛かる

自分史のところどころへ色を塗る

ギター弾き青春してるオジイさん

尼崎市 長 浜 美 籠

慎重に花芽ふくらむ雛の春

しなやかに私を生きたる黄水仙

今更と思うが風水に頼る

シングルライフ二十四色を使い分け

苦も楽も重ねどっこい生きている

あと少し弥陀の手招きにはのらぬ

箕面市 出 口 セツ子

明日だけに常に向けてる羅針盤

生きている証のように来る試練

今日の無事感謝で終える夕ご飯

淋しくも嬉しくもあり子の自立

夫唱婦隨心清めに行くお寺

深く考えないでかゝるく生きてます

美作市 大 石 あすなろ

囁み合わぬ不協和音が波になる

ひと花を咲かす野心が目覚ます

原点に戻る勇気をほめてやる

腹八分加減を知らぬバイキング

日溜りに座り呆けたくない話

お疲れの脳にブラックコーヒーなど

大阪市 川原章久

子無し夫婦番の犬を買うて飼う
米寿ですあつけらかんのツーショット
観光バス止めて明石の釘煮買う
ウツを捨て余白を埋める老いの日日
安物を競うて買うて積んだまま
長生きをして幸せな飯の味

鳥取市 岩崎みさ江

よく眠る永代供養決めてから
執着を捨てた身軽な旅衣
糸切歯まだ現役の音をたて
三猿を手懐けるのは難かしい
魂の軋む日に聴く愛燦燦
愚かさを晒す一句を産み落とす

倉敷市 撰 喜子

食べて寝て末はメタボになる予感
借金と鞭うちに首きたえられ
鈍色の雲のかくしてくれた嘘
女子社員年の順にはいかぬ恋
不況風禁酒禁煙強いられる
のせられて深みにはまるお人好し

美作市 福原悦子

明日開く蕾静かに天を向く
手話が急ピッチに弾む恋だろう
決断の朝を踏みだす薄化粧

空気のようなほの生きる夫婦愛
損得にこだわり狭くなる世間
骨拾う箸の疼きが身に沁みる

大阪府 米澤俣子

もう一回車検に出そうまだ乗る気
ひと様の財布は不況知らぬ顔
五色豆春のいろから減っていく
仲良しがいつからだろう疎遠なり
物忘れ笑いごとではもう済まぬ
あるがままもう喝入れることもなし

岸和田市 米富淳風

新芽吹く春到来のファンファーレ
どう咲こう夢を孕んで待つ蕾
鉢植えが競い合ってる街散歩
この陽気恋の花でも咲かせよか
御無沙汰が続ききっかけ作れない
デジタル化あたふたしつつ追いかける

西宮市 緒方美津子

大阪のうどんに外せないきつね
右膝を庇うと左おこり出し
わからんなあメガネをかけて寝てる父
人の世に無視ほど酷なものはない
角砂糖いつも二つの人という
おこっているかと聞かれる面構え

加西市 金川宣子

エステする魔法の指に期待する

家族間無料で母娘無駄話

大都会マスク美人に夜叉もすみ

鈍くなる体内時計ネジを巻く

マニキュアを施す妻に春が来る

低迷期マグマの噴火期待する

京都市 榎本宏子

本読んで眠くなるのを待つ枕

手直して私好みにした夫

城壁にペンペン草が伸びて冬

まだ未熟と言う棟梁のカンナクズ

ふる里の森を思うと出る元氣

だんだんと職人の技消す日本

大阪市 神夏磯典子

今日もまた総理言い訳しています

車椅子の渋滞出来るアーケード

錯覚を起こしてしまふ誉め言葉

背凭れはないが回転ずし十皿

かす汁がうまいと紙おむつ

エネルギーすみれたんぼから貰う

大阪市 熊代菜月

イケメンが威張っていますウチの猫

思ひ出をたどるしかない人になる

春浅く夫の逝きし朝の雨

足腰が萎えておくちが衰えず

川柳が一人ぼっちを慰める

義理チョコが本命になり妻になる

堺市 矢倉五月

ご好意に好みでないと言い出せず

不器用で的はしっかりひとつだけ

ビル街に民家ポツンとマイペース

スランプに看護疲れは隠れ糞

物忘れもう真剣に悩まない

出る間際やつぱり慣れた靴に決め

西予市 黒田茂代

春の香のほのかなひととすれ違ふ

海岸線漂着物の百貨店

生きたとは次々ものが増えてゆく

里芋の子育て上手見習おう

春が逝く悲喜こもごもを引きずって

原点はわたし育ててくれた里

愛知県 早川遯行

二三日隣の雨戸気に掛かり

神様の意地悪ボクに孫がない

どんなことにも耐えてきた七十二

トイレより煙草へ走るドライブイン

天気予報見て植え替える花の苗

路の臺ほろつと苦いとこが好き

京都市 高島 啓子

玉砂利をふむと神さま目を覚ます
誤解とけるまでは石になつておく
尖つてゐる石はそのまま武器になる
一年にひとつ石積む持久戦
胃の中で丸くなるまで磨く石

京都市 三宅 満子

三寒四温春一番が戸を叩く
雪解けて木々がハミング春の歌
目鼻立ち爪の形まで親譲り
言外に温い空気をくれる人
内外からトヨタが浴びるバッシンク

京都市 坪井 孝一

ありがとうその一言で楽になる
乾杯の裏に潜んでいる謀反
真実はじつと抱いてる余裕ない
人間を磨くになんと永い日々
顔で笑い悩み打消すその辛さ

京都市 西村 益子

そこそこに我慢してると夫言う
小袋でエコした気分ゴミの朝
喜寿なのにハンドルさばきだけは派手
付添いに病氣みつかるハプニング
出来ちゃった婚びつくりしたがおめでと

亀岡市 井上 森生

闇照らす春の炎が二月堂
そこそこに達者と思う果報者
金メダルには子つくりと国つくり
春秋をしかと重ねて老いを練る
繁栄のかたち五人目の孫誕生

長岡京市 山田 葉子

古代の謎マヤの遺跡が語り出す
ポケットに鮎をいっぱいいれておく
対象外の歳です紛れこんでます
肩の荷をそつとおろして逃げたい日
予想外の展開君が近くなる

大阪市 川端 一步

影法師お前も背中丸くなり
入院用リュックが役に立たぬよう
酒の量静い続け五十年
一晚を寝ると元気になるベンだ
忘れものの妻とシーソーしています

大阪市 吉内 タカ子

お水取り歴史の冷えが矢張りくる
趣味多彩好きで入り込む仏みち
生き下手で正直過ぎて楽天家
ライバルに花を添えます真央ドラマ
合格の孫に無理する熨斗袋

大阪市 板東 倫子

樹齡千年雪に倒れた大銀杏
啓蟄や春告げ鳥が出番待つ
駄々っ子のような横綱持て余す
太平洋はるばる越えて大津波
平あやまり大臣トヨタ日教組

大阪市 津村 志華子

春だからこそ味わえる土筆ん坊
真つすぐに延びる律儀な葱坊主
取れ立ての野菜が膳にある至福
草食系ポパイの子孫かも知れぬ
コロッケを引き立てている春キャベツ

大阪市 大川 桃花

自分史に山菜ほどの苦みある
津波警報無視した報いきつと来る
サボテンのようなビル建つ都市砂漠
通るたびお屋敷の犬吠えなざる
また来てほしい目白に蜜柑吊しとく

大阪市 岩崎 公誠

拳骨に息吹きかけて気を締める
賞味期限過ぎたスリルを食べている
豪放に生きる人間光り出す
パチンコ屋出玉を見よと山と積み
電池切れ何の字も出ぬ電子辞書

大阪市 江島谷 勝弘

あつちに揺れこつちに揺れて生きていく
いつみても笑顔の人にあこがれる
忘れてる橋を渡したこの俺を
手前ミン判っているが自慢する
背後には僕をあやつる妻がいる

大阪市 中村 叡子

あの戦後粗食に耐えて来た長寿
先行の心配許り高齢者
贅沢は言わぬこのまま今少し
真央キムが国を背負って舞つてみせ
ローソンが百円也で品揃え

大阪市 奥村 五月

羽目はずし盛り上ります飲み仲間
介護などいらぬ八十路でまだ飲める
三叉路で運を思案の別れ道
客減つて拗ねた顔する招き猫
昼お経夜はカラオケお坊さん

大阪市 小谷 集一

満ち足りて人の情を見失う
意地捨てて見ればライバルいい男
虐待へ子供は親を選べない
人生を悟つてからは惚けた振り
ダイエットしたら目尻に皺が増え

大阪市 伊藤博仁

忌があけるもういいだろうハーモニカ
お寺からお盆と数珠が寄付の札
これからの要る酒代を貯めておく
食べ過ぎた言いながらに三杯目
おみくじの水難これか服に酒

大阪市 平嶋美智子

古里にあった洋洋天の川
美しい正座の文化滅びそう
古ノート捲れば青い愛の詩
整形外科何時もよく会う人ばかり
洗濯物泣かせて通り雨が去り

大阪市 吉村一風

春の虹逃がすうっかりメール中
古い下駄昔話をしゃべり出す
子を叱る己れを叱咤するように
ドラマ観て泣けた己れにホッとする
雪だけで香りも彩も甦り

大阪市 榎本舞夢

木洩れ日がさして春風透き通る
いい事が続くと恐い予感する
すばらしい出会い信じて出かけてる
招待券無理をしても出かけます
どろどろの作業服には自負がある

大阪市 津守なぎさ

観梅にふきのとうのみ探す足
血圧を脅す構えの春一番
友の顔逢えばどちらも旅ごころ
北南青春キップ使う幸
ニュースでは桜前線雪情報

大阪市 榎本日の出

熟年だゆつくり行こう好きな道
何ごとも一歩控えて穏便に
待合わせ愉快に見せるハグでした
薄味で歩け歩けと医者がいう
子が離れ自分の彩を作り出す

大阪市 原田すみ子

責めないが視線に見える石つぶて
宝石もなすび一個も選びます
漬物石わが家の歴史傍観者
靴の中小石ひとつが謀叛する
耳あてて石垣に聞くものがたり

大阪市 萩原大朔

この星に生まれて老いて消えていく
どうしても嘘がつけない損な質
親のあと継いだとたんにこの不況
白け切り話の継ぎ穂見当らず
大穴を狙い財布の底が抜け

大阪市 福岡末吉

ひらめいて人生パズル一つ解け
気配りが昂じ思わぬ粗相する
友なればこそその苦言と握手する
老妻の切り盛り冴えて躍らされ
永らえてなお新たな道探る

大阪市 鶴田遠野

逢うだけで言葉は要らぬ二人酒
初恋は消さず種火で抱いている
願い事増えて柏手強くなり
開幕に商談前の虎話
愚痴消えて優しい妻に持つ不安

大阪市 伏見雅明

自尊心捨てて初めて分かり合い
焦点を少し外して生き延びる
いも掘りに大はしゃぎする都会の子
じいちゃんはいつも孫の名呼び違え
追伸で初めて本音顔を出す

大阪市 近藤正

彬の碑うしろで芽吹く百日紅
一億ドル無利子でどうぞ思いやり
憲法を足蹴に安保五十年
日米の密約やっとな顔を出す
天引きが増えて年金先細り

大阪市 中村れんげ

若葉どき旅売る店の賑やかさ
本当は三途の川で話します
声美人コーラスの友百近し
マニフェスト背伸びしすぎた腰砕け
適当に忘れて次をつめ込もう

大阪市 松尾柳右子

買い置き玉ねぎ根が出芽もひそむ
小春日に布団干してる満足度
響き合う友がいるから若返る
童謡を聞く笑顔です仏様
しあわせの左側には犬が居る

大阪市 小糸昭子

ハイチから連れ出されゆく小さき子
質問に真央ちゃんニッコリそうです
ハイチにはヤットPKO自衛隊
チリ地震地球の裏まで来る津波
国会は見ずにフィギアに張り付けた

大阪市 岩崎玲子

底冷えが京の気質を強くする
古都巡りぎょうさんあるわ知らん寺
少しずつ一三〇〇年触れてみる
可愛いと引く手数多のせんとくん
お水とり寒から暖のお松明

大阪市 坂 裕之

一步引くことで話が進み出す
一日の締めはビールと笑い声
立ち飲みへ一日の憂さ捨てに行く
チケットに楽屋見舞を促され
首位の座に驕りが見えて灸をすえ

大阪市 井 丸 昌 紀

内緒話聞かされ耳が疼きだす
背景を探ればみんな横を向く
値段の割にやけに余白の多い本
結論を先延ばしする処世術
小さい嘘重ねようやく生き延びる

大阪市 田 浦 實

手掴みが一番うまいにぎり飯
一番よりオンリーワンの時代かも
茶柱に背中押されて籤を買う
老人会若手と言われ役貰う
極楽門二人一緒はぐれない

和泉市 西 岡 洛 醉

心拍の高鳴りを聞く寒い朝
心地良い朝太陽に感謝する
喜びを感じて生きる日を数え
コツコツと生きて八十路の坂登る
怒りっぱくなる愛妻も老いの坂

和泉市 横 山 捷 也

ライバルが秘密を知ってそんな顔
孫が来てもつれた糸がほぐれだす
プライドを持つて孤独に耐えている
大声で王手王手のヘボ将棋
つながらぬ電話ふるさと母一人

泉佐野市 山 本 蛙 城

献立に困るとお豆腐顔を出す
ポリフェノール思いワインの食前酒
鉛筆を削り残り火起ち上げる
医者軽く心臓カテーテルでもと
毎日が連休だけど要る手帖

茨木市 藤 井 正 雄

ご近所へ配れとリング箱で着く
街角で会い横丁へ誘う酒
おしほりに眼鏡はずした別な顔
思惑に予感を足して買う馬券
転勤が里の近くではしゃぐ妻

交野市 森 本 弘 風

真央ちゃんが号外を呼ぶ銀メダル
二階級特進招く銀と銅
蓋開けて困難さ知るマニフェスト
寒い朝酒を抜きたい万歩計
我が家での仕分け小遣いやり玉に

河内長野市 井上喜醉

権力が政治と金に病んでいる

激流を避け人生の川下り

ストリートな言葉をぶつけ打ち込まれ

えび煎が好きな港の百合かもめ

開幕へ今年も懲りず虎ファン

河内長野市 坂上淳司

ぱりぱりとお新香砕きたい入れ歯

ぱりぱりと仕事熟した力瘤

手洗いを目指して延ばす歩行距離

芋蔓もいながら食べて生き延びた

焼夷弾の雨もくぐって生き延びた

河内長野市 村上直樹

ぱりぱりと稼いだ飲んだ恋もした

洪ちんの親で総理になり損ね

居座ってまた暴れだす癪の種

固め撃ち口鉄砲にまたやられ

延命の是非を仏に問われてる

河内長野市 植村喜代

新聞にチラシ挟んだまま読まず

楽しい日みんな忘れて暮れました

あの頃は何かないけど若かった

まだ二月どうなってるの汗が出る

年金も信じていてもいいのかな

河内長野市 水谷正子

今頃になって核々騒いでも

部下使う事にも馴れて青葉風

腰痛を忘れて花見予約する

朝青龍気合に勝って札に負け

デイケアで九十七に気を貰う

河内長野市 黒岩靖博

今もまだ臉に浮ぶ母の笑み

商圏が拡がり手薄な危機管理

七名の同期の桜いま二人

耳栓で妻の軋をかわししてる

いにしえのロマンを秘めた出土品

岸和田市 雪本珠子

立話波長が合って弾みだす

ポケットの中に不満を入れたまま

引出しの中で昔が生きている

焦らずに時代の波に乗ってゆく

足早に過ぎ去ってゆく福の神

岸和田市 森元ふみよ

友の背に老いを感じて我身知る

夫婦共感謝のこころ育ててる

酷使した脚腰詫びて貼る湿布

ベランダで挨拶交す爺と婆

リハビリのイケメン医師で今日も行き

岸和田市 井伊東吉

岸和田市 堤 檀代

白梅がバツと明るくさせた庭
歓迎をされぬ雑草目を寛ます

安い物順に売れゆくデフレの世

買え買えとエコポイントに踊らされ

仕分け人本腰入れよ第2弾

岸和田市 土橋房枝

小春日に猫の背丸く陽を追いぬ

布団干し挨拶交わす小春かな

ハープの名カタカナばかり園小春

はおり物腰に巻き行く山小春

小雀の声はばかり日溜りに

岸和田市 岩佐ダン吉

反省を迫るでっかい海がある

大勢にこびた私を叱咤する

核密約やはりそうかと皆が言う

身じろぎもせずに被爆の話聞く

ゴキブリが地球の最後見とどける

岸和田市 原 さよ子

無理しなやその一言に滲む愛

本人も思い出せないメモ記号

階段は近道ですが苦手です

おしゃれしてもすこし若くならうかな

若返り法かも知れぬ習いごと

この歳でやつぱりお肌気になるの

申告も印が不要なことになり

こみあげる怒りはボケてない証拠

わからない事はばかりですネットの世

私も何かで金をとりたいな

堺市 西村りつえ

平凡な日日よ続けとお賽銭

裏方で女優の角度知るカメラ

好きなのに言い出せなくて乗つとられ

道を聞くにもパワフルな人を選び

鬱憤を飛ばしてくれた花吹雪

堺市 齋藤 さくら

もうそんなお歳ですかと聞き返し

ひと言がなければ好きな人だった

意地を張る若さあるのも羨まし

雨止まずとめて本を読んでる

これでいい人生なんてありえない

堺市 志田 千代

生きるとはブザマな姿見せること

女房に逆らうこともボケ防止

おせっかいでもいい人でありまして

疑ってゴメンわたしの早とちり

救急車近所の人に見送られ

堺市山本半錢

壊れそうな私をつなぐ話の輪
繋ぎ手ばかりでない円い卓
切り札を片手にかくし手をつなぐ
初物ではないが苺を仏前に
男の爪が美し過ぎて頼りない

堺市柿花和夫

職人の技に鯨鯨観念す
津軽三味の冴えに思わず端座する
子の部屋にノックせよとの大書あり
新人の度胸を試す無礼講
永久齒の残り数だけ恋をする

堺市大隅克博

もう寒さ忘れたように御水取り
言訳はせずに逃げ道こさえとく
下四桁めったに当らない賀状
わたくしの右に出るやつばかりだ
折れてみて勝ちに繋がる負けを知る

堺市萩野像山

年以上頑張り腰が泣かされる
飲んだかな迷えば切りがない薬
多すぎてチエックリストがいる薬
頻尿へ出ぬよりましやお医者
ここまでやるのかトイレの自動ふた

堺市村上玄也

奢られた酒で転んだのは不覚
酒飲みだけれど嫌いな酔っ払い
虎になる酒なら飲ませたくはない
酔わないと普通に喋れない御仁
酒とろり途方ない夢描いてる

堺市源田八千代

胎動する物の始まりみな堺
蛙の子は蛙赤門シャットアウト
はみ出しは許すがずりズボンは嫌
骨太の米寿10キロ走り抜き
御代の春金婚式の内祝

堺市加島由一

問題の気圧の谷は台所
花だよりふるさとは今三分咲き
花を見る人を横目に作業服
居酒屋のメンバーを見て通り過ぎ
いい返事するなど妻の目が合図

四條畷市吉岡修

いつ時は主役になった古時計
辞書にない知恵をいつぱいくれた母
ありがたや純米食べている平和
赤鉛筆折って競馬はもうやめる
増えたのは薬の数と顔の皺

吹田市 瀬戸 まさよ

自分でもまるくなつたと思う歳
エンピツも削るとさらの顔になる
悪滅ぶストリー好き単細胞
付加価値のついたケーキはよく売れる
嫌いです頑張りますの常套語

吹田市 大谷 篤子

母の椅子で大あくびする昼の猫
さまざまな弱点さらし生きている
ほっこりとしんみりつかる野天風呂
生きている自分に嘘を混ぜながら
さまざまな敵にも元氣もらつて

吹田市 野下 之男

銀メダル悔し涙に明日を見る
お互いに御免で済ます老い二人
よく見れば傘寿の顔に見えてくる
カラス来て素直なスズメ道を開け
鸚鵡には誰が教えたコノヤロー

吹田市 太田 昭

つるし柿の苦労話を聞かされる
ミキサーで喜怒哀楽を掻き交ぜる
ネーミング変えて銀行生き残り
真つ暗な格差社会を吠えてみる
今日の嘘明日の嘘を太らせる

吹田市 山本 希久子

春の一日是も非もなく暮れる
春の嵐ただ過ぎ去るを見るのみ
政治家へ民の眼力あなどれぬ
最後のあがき遊びばかりの予定表
友情は本物偽証などしない

吹田市 須磨 活恵

今日も無事生きてるだけで儲けもの
贅沢な話はしない夫婦箸
手のひらで掬うただけの糧で生き
裏表人間だから多少なり
夫婦箸酸いも辛いも舐め尽す

吹田市 木下 敏子

生と死の話を若い僧に聞く
雑草のように育つて優しい子
また来るといつも笑顔を置いてゆく
むつかしい事は孫子に聞いて生き
平凡な暮しに感謝して閉じる

高石市 浅野 房子

人間の業の深さを知る痛み
腰痛に期待は出来ぬ医者くすり
溜息は深くなつたり跡切れたり
病院は馴染めば縁の切れぬとこ
配食という年寄りにくる食事

高槻市 井上 照子

0・002秒時は金なりメダルなり
オリンピック国の重さを背に荷なう
銀盤でクイーン華麗な独楽になる
バスが来た走っちゃだめよまた転ぶ
辛酸を舐めた上司の温み知る

高槻市 杉本 義昭

ごつごつと不器用な指父に似る
母さんはさすが神の手持っている
きっかけは音楽でした私達
人生の裏に溜っている涙
髪だけは老いを知らずによく伸びる

高槻市 乙倉 武史

生きているうちが花だと酌ぎにくる
招かざる黄砂ニイハオでかい面
好奇心燃やして脳は休ませず
薔薇林檎漢字特訓脳に活
小遣の仕分けをばやく大不況

高槻市 峯村 勲弘

地下にあるわけじゃなかった埋蔵金
限界で頑張っている血糖値
動悸する息切れもする老いの坂
非常口確かめ合ってツアー旅
椰子の実も津波も渡る太平洋

高槻市 生田 義一
鬼の面かぶり豆まき孫キヤツキヤ

日本中酔いしびれたね真央の舞
三大臣遅刻野党にどなられる
普天間を飛び越えられぬ鳩の群
お互いに耐えて来たねと古い二人

高槻市 執行 稲子

潰されたプライド歳のせいにする
お目当の回転寿司の遅すぎる
にこにこプリンで孫を吊るじいじ
煮えたぎる想い老いても女です
ほかほかのベッドありがたく眠る

高槻市 富田 美義

テント村恥も誇りもない素顔
和む日々心の癒える趣味に生き
本心の脆さ誰もが知っている
良心の柱リフォーム急がねば
野仏に心の垢を覗かれる

高槻市 左右田 泰雄

気配りが行き届いてる出来た人
気い付けやうまい話にや裏がある
夕暮れにムードを添える鐘の音
あけすけのあけつ広げてお人好し
あくせくと夢中で通り過ぎた過去

高槻市 佐 甲 昭 二

豊中市 水 野 黒 兔

相槌を打って世間を丸く生き
言い訳を夢中で探す終電車

駅裏にリストラの愚痴捨てに行く

ひと時の旅情に浸る時刻表

もの言わぬ父の背中が怖かった

高槻市 安 田 忠 子

好奇心いっぱい持って夢掴む

はっきりと浮かんだ雲を掴みたい

猫の首こわごわ掴む猫嫌い

新聞も略語が多くなってきた

背の丸い人見て背筋ピンと張る

豊中市 江 見 見 清

どの四季も近づく時は喜ばず

妹へ姉は多い目のおすそ分け

失敗を堂堂話する子供

気骨ある男は勝とうとはしない

近い事だけが取り柄で寄るお店

豊中市 安 藤 寿美子

来た人を床暖房に招き入れ

戦時下に育ち何でも平らげる

じわじわと私の居場所狭くなる

ひとり子というハンデを背負っている

政治家が出るとチャンネルを変える

雑草と呼ばれて繁ると根性

失敗をプラスに変える持続力

尿酸値未練を残すウニクラ

袴でもモダンに見える宝塚

遮断機の脇タンポポは黄を主張

豊中市 藤 井 則 彦

賞味期限切れて生き生きする夫婦

ニアミスをした自転車に怒鳴られる

反骨の眼に滲む志

近づいてきた美人には目を逸らし

ずぼらだなと思う人ほど親しめる

豊中市 松 尾 美智代

三十年庭に忘れず福寿草

オリンピック終りくぎ煮の春がくる

配る人の顔を浮かべて煮ています

泣きそうな時は奥歯をかみしめる

来し方と行く末思い寝付かれず

富田林市 片 岡 智恵子

地球の裏の氣象異変が恐ろしい

いかようにも取れる女のひとり言

お医者さんいらつしゃいませとは言わず

新党も貧乏ゆすり止まらない

休み明け混む銀行で払う税

富田林市 中井アキ

カレンダーに詰め込む残された時間

裏方を演じて明日へと繋ぐ

淋しくて乙な刺激を待っている

ご先祖は天平美人だったのに

骨董の椅子は優しさ待っている

寝屋川市 籠島恵子

振りむけばあんなこんなにかまれる

歳とった木々と対話をしてしまう

冗談がわからなかったのは私

記憶ふらふら足もふらふらして帰る

先発隊のように咲いてる四季ざくら

寝屋川市 森田麗

日溜りに国訛り溶く寝息あり

旅案内の桜に酔ってみるつもり

この春はうれし涙の仕舞風呂

この春も釘煮送って御挨拶

窓開いているのはちゃんと生きてはる

寝屋川市 富山ルイ子

美味しい美味しいパン屋さん開業

買った日の夕食スープリキッシュパン

海外へ行った気分でご話聞く

吉兆に予約しようか傘寿です

老友の便り転んだ怪我もした

寝屋川市 森茜

新しい私へ芽吹きたい緑

それからの私はなんなり咲いてます

いいこともよく聞いている耳ピアス

深い息マスク外して吐く外科医

孫の見立ての赤い帽子でエアポート

寝屋川市 太田とし子

堪えること教えてくれた冬木立

はっきりと宙に浮いてる母の椅子

一斉に芽吹いて笑う春の花

幼子殺し呆れ果てたる戦中派

さくらさくら まだかまだかと待つ卒寿

寝屋川市 平松かすみ

戴いた命右左を見て歩く

餓死という幼い命惜しまれる

日課です金柑一個一個ずつ

ばあちゃんの勿体ないが受け継がれ

お元気でソチの真央ちゃん楽しみに

羽曳野市 徳山みつこ

わたくしの鼻よるこばす沈丁花

看護師がほんとに骨を折っちゃった

消すのなら指一本の削除キ―

補聴器よりも妻の通訳いらしい

風下へどうか埃をたてないで

羽曳野市 永田章司

出番まで酒を控える披露宴
損得は眼中に無い名譽職
損切りが株で儲ける骨と知る
親しいが心許さぬ友がいる
ほのぼのとさせる話題に事欠き

羽曳野市 酒井一壺

剣が峰祈るかたちで深呼吸
ライバルの呼吸を探る車間距離
板塀の隣はなぜか仲悪い
筋書きにない勢いが暴れ出す
真心をいっぱいもらい生かされる

羽曳野市 三好專平

回転木馬くるくるまわるビルの底
焼け跡が消えて基地だけまだ残り
節分のタダの巻き鮎待つ天満
八百長が利かぬ地球の温暖化
歩く人どうでもよいという道路

羽曳野市 福田悦子

第二ボタンくれたあの日の恋心
卒業式同窓会でまた会おう
ありがとう心にしみるいい言葉
ランドセル遠い昔が蘇る
百までは生きたい医者へ今日も行く

羽曳野市 吉川寿美

傘たたむ潮時見失うまいぞ
辻褄を合せるための喋りすぎ
いつの間に妻が握った主導権
嘘少し混じえて話盛り上げる
いつの日か芽を出す種を播いておく

阪南市 山本柳昌

手を繋ぐほこほここと春の詩
病む母へ優しい言葉積んでいる
母が逝き母の昔を子が語り
昔むかし素敵な恋に泣きました
わが里は住む人もなく森に帰す

阪南市 森村美花

自然体の貴方を好きになりました
ワインをどうぞ少しジョークも入れながら
口出しは許しませんと顔が言う
五体満足まだしなやかに生きている
息のあう人身体がすぐに感じとる

東大阪市 佐々木満作

エプロンが似合うと妻に煽てられ
雪どけの水滔滔と川下る
カーテンを模様替えして春うらら
三世代暖簾見守る鯉のぼり
鯉のぼり五月の風は旨かろう

東大阪市 久米 奈良子

往診の医師へ感謝の日がめぐる

ひな添えて見舞の花のうるわしき

近況を問われて嬉し病よし

折鶴へ素直に動く春の指

ひとかどの仕事する気の袖まくり

東大阪市 米田 水昇

ナツメロにあの日の人よみがえる

齡聞かれたんと鯖よみとほけとく

齡を経て日毎消えゆく漢字たち

酒の席調子を出して黒田節

モットーはくよくよしな前を向く

東大阪市 中岡 妙

戦中派何があつても驚かず

同年と思う相手も老けてゆき

片付けを残してゐるのまだ元氣

マイナスのオーラ避けたい人が居る

毎日がドラマ主役は日替わりで

東大阪市 北村 賢子

性格はくらいけれどもフラが好き

方角音痴天然ボケと娘が笑う

端に居て居心地のよいカスミ草

とりあえず値札見ながら似合わない

春めいてシースルーを着るウフフ

東大阪市 笠井 欣子

百葉の長の誘惑蹴る勇氣

一寸だけ黄泉をのぞいて欲捨てる

病んで見て嬉しがること増えてきた

大層な土産はやめて御座候

悲をくぐり今は桜のど真中

枚方市 二宮 山久

酔うほどにおまえいくつとクラス会

病む妻へ手作り料理笑み浮べ

春がほら来てます散歩つくしんぼ

会釈する顔へ名前の出ぬおかた

梅一輪活けて食卓春を呼ぶ

枚方市 二宮 紫鳳

アレコレソレ呼吸びつたり老夫婦

誉め言葉すぎて素直に喜べず

お互いにナビをし合つて老いの坂

春の風受けて軽やかショッピン

棘一つ笑顔で包む花曇り

枚方市 海老池 洋

曖昧な返事へ微笑添えておく

世間は狭い鬼も仏も友とする

副作用言うてはおれんガン治療

正座などとてもと思う脚線美

夫婦茶碗の脆さを思う伴侶の死

枚方市 伊達郁夫

藤井寺市 高田美代子

青竹が一本ずつの天をもつ

スターの名つけたベットが肥満体

折れそうな雑草だから群れて咲く

母親を赤子に戻す粥の匙

ありがとうひと言だけの遺書にする

枚方市 小林わこ

何食わぬ顔でこの橋渡れない

母の吊橋長く静かに揺れている

理屈抜き渡れぬ橋がただ一つ

はね橋が上がる向うに好きな人

欲しいほしいあなたへ架ける虹の橋

枚方市 安達忠央

近いのに心こんなに遠ざかり

骨っぽいどうしの話きしみだし

近すぎて気付かなかったいい女

もう近い思ってたからの遠い山

一本気骨っぽい地がさらけでる

枚方市 丹後屋 肇

同窓会名簿に増える×印

日溜りでヒモ締め直すスニーカー

二重顎鏡がいやな顔をする

フルムーンビデオにありし日を偲ぶ

妻一人しだれざくらの拉致に遭う

ひな祭り弾んだ頃もありました

春はまだ薄いコートを着て出かけ

うれしいね金魚が冬を越えて生き

どっこいしょこらしょも私のリズム

糸切れた三昧に想いがまだ残り

藤井寺市 伊藤アヤ子

夫婦仲鈍感力で長続き

名残り雪桜のつぼみ縮こまり

霜焼の手で洗いますほうれん草

バンクーバー終ってリズム取り戻す

長蛇の列足踏みしても進まない

藤井寺市 津田シルク

セピア色の写真の中に光るもの

力作は記念切手で投函す

街あるく誰かに逢えるまであるく

サービスは真心だけと小商い

宇宙との交信みたい耳が鳴る

藤井寺市 増井ヨシ枝

罪ひとつ抱いて迷路の中にいる

土壇場で度胸あるのは妻だった

内緒よと他言見越して言う話

お座敷のように靴脱ぐイチゴ狩り

サービスの良かった店もシャッター街

古里は世界に誇る古墳群

藤井寺市 若松雅枝

喝采を浴びたメダルの重い価値

自分だけ惚けぬ心算で赤い服

近くより遠い桜に酔い痴れる

草餅を供えて僧を待つばかり

藤井寺市 太田扶美代

お雛さまひい婆ちゃんを覚えてる

番犬ですもの蝶々にも吠える

一坪の庭を絵にした福寿草

七十歳そんなに恐いモノでない

半分は空気にされていたわたし

藤井寺市 鈴木いさお

最愛の妻初恋の人じゃない

何の記念日か夫婦だけの秘密

賢母ですでも良妻じゃありません

チョイ悪の男に甘い母性愛

鬱の字を書くときいつも辞書をひく

藤井寺市 俣野登志子

ひとりならお茶漬だけで済ませたい

他人事と思つてました花粉症

まだ七十時々発破掛けてやる

くちは悪いが心の温さ隠せない

悔いないが来世は別の殿がいい

健診へ規則正しい日日送る

健診へ睡眠時間たつぷりと

ケーキチヨコ健診前はやめておく

身を清め組板の鯉健診日

春モード先ずは髪のカットから

箕面市 広島巴子

昭和史は時代の流れ深い闇

牡丹餅の夢から冷めぬ民主党

春雨とささやきあつて新芽出る

思い立つなんで立つたかすぐ忘れ

物忘ればかりか春はなおひどい

守口市 井上桂作

ホカロンがまだ離せない春疾風

あちこちが軋む紛れもなく加齢

温野菜手抜きできない独り膳

仏さん淋しがつてるはよ帰ろ

なんでやねん今出来たのにメカ音痴

八尾市 宮崎シマ子

桜の頭少し赤らむ三月始め

衣の下赤いシャツ着た若い僧

逆上りぎりぎり耐える生活苦

煙は見えずペランダの蛭族

銭湯で同じ時刻に同じ人

八尾市 寺川 はじむ

名が消えるとなると寂しい暴れ馬

胸の奥覗きたくなる度量良さ

有難さ忘れ三度の飯食べる

大盛の薬を飲んでいる元氣

ポイントという魔法にかけられるカード

八尾市 村上 ミツ子

悔しさが次へのエネルギーとなる

満員の電車両手を挙げて乗る

銀行預金ダイエット上手です

遅刻大臣主演茶番劇開演

椿落ち春もゆつくり動きだす

八尾市 内海 幸生

神ほとけお陽さん拝む宝くじ

悪い奴では無いらしく眠られぬ

そうでつかめ度とおますか傘寿です

言い切った爽快感に悔いじわり

原稿の枘目に嵌められそうになる

八尾市 笹倉 ひろし

白じらと明けて地球は今日も無事

名を残すほどでもないが自負もある

願い事多くて神に無視される

エコ湾と化した大阪ベイエリア

ケータイに病の話溜まる古稀

大阪府 初山 隆盛

春の風やさしく肌を打診する

想い出のページにのこる花葉

ドラフトの蕾咲くやら消えるやら

ささやきの小径に愛を敷きつめる

やじろべえ右に左へ妥協せず

大阪府 澤田 和重

左遷地の地酒土産に返り咲く

回復の兆し笑いを引き寄せる

人情という温もりで再起する

お借りした本にヘソクリらしい金

大夕焼乗せて単線電車着く

大阪府 野田 栄呼

台所気分直しに光らせる

安全重視虫食い野菜皆で食べ

財源へ首をもたげる消費税

おはようのひと言温い霜の朝

芯ぶれて右往左往をする言葉

大阪府 桑田 ゆきの

手届きの梅の一と枝に澄む心

法話寺善男善女の顔をして

譲り合う図書椅子和む菜の花忌

本当の愛を届けるホワイテデー

大マグマ地球の裏へ津波寄せ

神戸市 山 口 光 久

幸せを運んできそうホーホケキョ
カアカアと烏の親子睦まじい

よちよちと歩くヒヨコの愛らしさ
きやあきやあとお猿が幼児遊ばせる
ひとときをモデルになつて試着室

神戸市 山 口 美 穂

お地藏さまも眠た気花のほろり散る

愚痴捨てるところを探して電話帳

ブライドがまだ少しあり紅をひく

野良猫の逃げ足アレツと見てただけ

真白な雑巾心許せない

神戸市 山 田 婦 美 子

御馳走を食べると顔がほころびる

少しでも若く見せたい髪を切る

化粧品並べため息ばかりつく

足の爪切りたいけれど邪魔な腹

原石を磨いてくれる人がない

神戸市 木 村 貴 代 子

前にならえでは育たない独自性

レシートも記憶もあるに物がな

失せ物を見つけてやつと春気分

花よりも団子の予算止むを得ず

花の道犬と私の歌の道

神戸市 田 中 章 子

病得て梅干しのあるありがたさ

雨あがり教えてくれる揚げ雲雀

病みあがりくぎ煮はもうことにする

たわわさが日本生まれでないミモザ

いつからかわたしのマグマ不発なり

神戸市 伊 勢 田 毅

開幕に合わせベテラン捻子を巻く

切り札を使つて後は風任せ

四月馬鹿まんまと妻にしてやられ

湯たんぼは御役御免とお水取り

はしゃぐ孫つかず離れず潮干狩り

神戸市 両 川 無 限

どこまでの命か爪がまた伸びる

美辞麗句聞くわたくしでない私

無いものを探して虹を追っかける

万物が萌えて五感をノックする

終止符のあとで聞こえてくる本音

神戸市 山 崎 武 彦

腹の虫おさめる酒は哀しいね

風花が舞つて勢いづく逢瀬

幾度のピンチに耐えたささくれ手

ピンチには帰つておいで母の海

追伸はたった五文字のありがとう

相生市 中塚礎石

尼崎市 軸丸勝巳

ロックして深ぶか眠りたい孤独

子の居ない夫婦に軋む風の音

横文字の商品名に踊らされ

人情の機微が身に染む吹きだまり

打つ手みな裏目となつて黙りこみ

明石市 糎谷和郎

他人には杭だが僕の道標

正直を押せば戻れぬ橋渡る

組板より空を跳びたい日航機

子が見てる背を時には手入れする

母の歳越えるまではと歯を磨く

芦屋市 黒田能子

いくつになつても嬉しい褒め言葉

また明日軽い気持で別れたが

口の中いつでも同じとこを噛む

目的は完走だからマイペース

こつこつでいいゆつくりと積木積む

尼崎市 春城年代

物の寿命今ほど深く思ったか

ポッペンに郷愁がある祭の灯

あと一年の卒寿に充ちるものがある

森羅万象春の息吹で蘇る

百までの寿命頭の片隅に

銀盤の妙技炬燵で見る至福

ニュートンもまさかまさかの四回転

お雛さま万歳胸に加太の海

暖冬の予報に地球やんちゃする

三度転け怖い自転車さようなら

尼崎市 加川靖鬼

おいと呼ぶと替りに猫が返事する

顔の皺ゆつくり伸ばす長い風呂

チラシ広告裏もぎつしり書きすぎる

みの虫の晴れ着は好きな葉を纏う

イヤリング噂一番先に知る

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭固いつばみの開く朝

ゆきやなぎポツポツ咲いて庭も春

今は節句古雛出して亡母憶う

腰痛が鏡にうつる我が姿

食卓に毎日届く友の情

川西市 西内朋月

駅前にケーキが並ぶ洒落た街

パチンコに金を盗られた暇つぶし

ぼつくりを頼んであげる五円玉

口先でいつも便利に使われる

居酒屋ではちばち本音でころだ

川西市 米原雪子

年金で贅沢できる策を練る

孫にメールあつと言う間に返事来る

どこまでも夢を追う子であつて欲し

口喧嘩聞いてて楽し老夫婦

昼食が皆椅子席でホツとする

三田市 北野哲男

花吹雪回りもみんな春ばかり

春うらら大呆け小呆け笑い合う

婚活か猫が時々留守にする

人間が好きでしている口喧嘩

母の日の仏花は赤いカーネーション

三田市 久保田千代

臨終の床にりんごのしほり汁(義父逝去)

寒空に物言いたげな義父の顔

よつと手を挙げて迎えてくれた義父

充分に生きた証の棺の中

旅立つた母の後追い黄泉の国

三田市 石原歳子

法要も七回忌から涙出ず

歳とつて野菜ますます好きになり

カーリング選手はみんな掃除好き

忠告が胸にひびいて眠れない

涙など出さず心で泣いている

三田市 臼井二英

高層ビル格好いいけど信じない

客なくて店員だけの百貨店

情けない顔で出てくるパチンコ屋

本当は梅にヒヨドリじゃないかいな

アホなこと言うて笑うて日が暮れる

三田市 福田好文

走ったら転ぶと知って歩を緩め

執刀医の後ろ姿に手を合す

結納が不足だったと今も言う

長い目で見ろと言つてももう六十路

ワクチンに負けてはいないタマゴ酒

三田市 上垣キヨミ

極楽の神と出合った日向ぼこ

お帰りと云えば胸張るランドセル

春の陽に花に負けじと厚化粧

たつぷりと愛注ぎ込んで嫁のもの

温かい心になれる便座イス

西宮市 牧渕富喜子

ユニホーム似合うレジ打つ風新た

何事も無難バンジー咲きそろう

仏壇の花にも春の色を選ぶ

真央ちゃんに釘づけされた視聴率

天気図のせめぎ合う日の春の雷

西宮市 山本義子

未熟のまま後期高齡仲間いり
ロボットはさかな二枚におろせない
自販機も城のあるじの顔をして
無血開城仇はつくらぬ定年後
試行錯誤まだ夢をもつ終のこと

西宮市 亀岡哲子

門の前でみんな並んだ古写真
パニックになるとわたしを頼る姉
ひとさんにはあんじょうものを言う夫
花の香にふわり誘われ春の靴
ほどほどを頼む延命地藏さま

西宮市 片山忠

経験の無さを補う口がある
仲良しになれぬ気がして閉めるドア
お隣も貰いましたと寄付が来る
時どきは老いをチェックに来る娘
冷静になると食えない牛の舌

西宮市 足立茂

こだわりを捨てたら肩が回りだす
風向きも距離も気にしてタバコ吸う
昇給がゼロで無口な酒を飲む
終電車後ろ髪引く残り酒
花より団子誰が言ったか春が来る

西宮市 藤本直

幸せはいつも不幸と較べてる
好きなのは美女と言うよりいい女
春一番ハイテンションでやって来る
ほろ酔いが並みの話に味をつけ
生きる理由楽しみ一つあればいい

西脇市 七反田順子

美術展ゆつくり見よう風景画
逆光があんばい写る顔である
菜の花の一番咲きを神様に
座禪草ほんまにほんま座禪して
木守柿食べたカラスの好奇心

姫路市 古川奮水

春全開土筆が大地ノックする
山菜を摘む親指の爪伸ばす
山菜を盛って我が家の雛まつり
法螺吹きが喜寿になつて吹きに来る
リクルートファッション目立つ御堂筋

奈良市 米田恭昌

招福の猫背を向ける不況風
寝たきりのおむつ嫌っている沽券
古くとも奇跡を祈る百度石
グルメには遠い我が家の台所
ラムネの栓抜けばノスタルジー溢れる

生駒市 飛 永 ぶりこ

靴先に尖らせている自己主張
うつつふ騙されましようしぱらくは
怠けたら物の見事に皮下脂肪
忘れたく今日の悔しさ丸洗い
明日のゴミ中にひよっこり探し物

香芝市 大 内 朝 子

人生の無情にめげぬ笑い皺
魂を抜かれるほどの恋もせず
貧しいがこころ貧乏にはならぬ
朝ごとに一日分のネジを巻く
ありがとういっぱい言うて生かされる

檀原市 居 谷 真理子

大切な命だ冬の陽に干そう
幸せの尻尾がおいでおいでする
そのエサを食べるとロボットになるぞ
傲慢な都会に夜は来てくれず
一本の桜従え墓一基

大和郡山市 坊 農 柳 弘

馬鹿げた事言うてまへんと初鰹
菜の花の誘いふんわり紋黄蝶
美しいトリックドジョウの立ち泳ぎ
菜種梅雨梅酒の仕込み急ぐ母
アングルを変えて新緑を掬う

奈良県 天 正 千 梢

六人部屋この世の縮図渦を巻き
身に受ける人の善意も底知れず
大津波海底までも荒れくるう
春爛漫人の世はどうあろうとも
凜としたボスの御旗はゆるぎない

奈良県 渡 辺 富 子

花びらを手に受けはしゃぐ母という
遷都祭盛り上げてくれ花吹雪
父と子の夢を重ねて弾む酒
煽られて息子の夢が宙へ翔ぶ
要注意今日の私は活火山

和歌山市 福 本 英 子

奥の手を気付かれぬよう小出しする
お寺さんに少うし見栄を張るお布施
方丈もコーヒー好きでモカマタリ
歪でも私の作とお茶を点て
以下同文その真中にいる安堵

和歌山市 木 本 朱 夏

みどり色が足りない春の絵の具皿
エイトビートのリズムで春が戸を叩く
ジーパンがもう似合わない春なのに
固まって自己主張するかすみ草
産地直送たつぷり春を召しあがれ

和歌山市 松原寿子

澄み切った風と小川に癒される
結果どうあれ今ものぞみを熱く抱く
知恵しほり一步進んでまた一步
糸切れるまでの我慢にある自信
古風な殻脱ぎジープンで翔びはねる

和歌山市 玉置当代

啓蟄や虫もわたしも始動する
三寒四温衣脱いだり羽織ったり
寒いほど春をけなげに待つ蓄
定年後リズムの合わせ夫婦独楽
銭だけが頼りと抱え込んでいる

和歌山市 武本碧

ケータイでコミュニケーション取る親子
少しの外して返す売り言葉
夢の中まで追いかけてくるものしも
手回しが良過ぎあれこれ反古になる
子供給付安産祈願増えるかも

和歌山市 喜田准一

ライバルもやっぱり鯖を読んでいる
思惑があつて留守番買つて出る
掴み獲るチャンスへいつもスタンバイ
すぐランク付けする癖が直らない
建前で物を言うから腰が引け

和歌山市 松尾和香

ふるさとの影も一緒のひとり旅
遠回り心の襷を握りしめ
亡夫からの鍵を握って半世紀
四苦八苦書けぬエンピツ笑つてる
運命と寿命セツトにして生きる

和歌山市 堀富美子

老木に春の定番を教えられ
恐いほどびしやりとハート探られる
老いなりに笑顔で緩む皺が好き
ばつとなど死ぬるものかと医者笑う
骨壺にカラカラカラと笑われる

海南市 堂上泰女

人よりも見事な犬にあう散歩
散歩道寄り道をして愛でる梅
真央ちゃんがジャンプするたび胸躍る
良い嫁を選んだ息子誉めておく
ストレスはためないように桜島

田辺市 岡本昇

米寿です四の五の言わず万歩計
生真面目に生きた証の座り胼胝
気楽です遺言状は以下余白
街灯で浮き彫りされた雨の露地
柔らかな言葉選んで母を見る

和歌山県 坂部 紀久子

春の風どんでん返ししの冷たさよ

道連れの五七五に生かされて

死ぬまでの趣味満載で惚けられず

急いでペン取った時には忘れてる

ピリオドを打って安心まだ出来ぬ

鳥取市 吉田 弘子

背伸びして選んだ道で蹴つまづく

空缶の転ぶ音にも冬と春

原色で固め孤独を追ひ払う

兄弟の声のコピーにうろたえる

梢から梢小鳥も春うらら

鳥取市 西川 和子

風緩み畑の草が派手に萌え

春の雪掃いて彼岸の墓参り

戴いた命終盤戦を行く

暴言もその明るさに憎めない

とれとれを貰い刺身で盛り上がる

鳥取市 鈴木 公弘

油断すること許されぬ木の根っこ

エコライフよりも今夜の綱渡り

密約を見た九条が泣いている

格差などない銭湯の脱衣かご

アンテナの向き地デジ波に切り替える

鳥取市 中宇地 秀四

生きている人が集まる銭の音

こぼれ出た一言俺を悩ませる

もう起きてご飯ですよと三毛が来る

嬶やかな女の胸にも夜叉は住む

物言わず何もしなけりや落度なし

鳥取市 山宮 愛恵

花の鉢かたわらに置きティカップ

露の香の広がる厨母憶う

とうさんのあかりで歩む古希の坂

番号をつけてひとり管理する

唐突に謎かけをする子のメール

鳥取市 田村 邦昭

妻思う手がいつぱいの皿洗う

爪に火をともした金が詐欺にあい

美しい爪も時には武器となり

腹を割る友がいるからなお楽し

暗闇にほっこりとした灯が温い

鳥取市 横田 春名

そこからの一歩なかなか踏み出せぬ

耳遠くなつたと眉をひそめられ

わたし足あなた腰かと長話

雛菓子五十にもなる娘に送る

母の墓もう四十年も会いに行く

鳥取市 加藤 茶人

それぞれの立場都合の良い言葉
日本がジャパンひとつになる国旗
母ならば鳩山子なら遼が良い
暇過ぎてゴロゴロしても役は嫌
俺に似た蟬の抜け殻見て飽きず

鳥取市 武田 帆雀

物分かり良い人たちでサクラサクラ
行く道も避けたい道も通せん坊
本戦に強い兵士を飼っている
天を翔ぶ大技小技足固め
本場の事を言うから誘うまい

鳥取市 土橋 睦子

逆境に逢った流れもおだやかに
腰おろす道に待ってる丸い背
紫陽花の迷路を探す車椅子
尖ってる私を叱らない落葉
御無沙汰と借りを返して気も和む

鳥取市 平尾 菜美

抜け殻にしては嘆かぬ御婆さん
首尾のよい尻込みにだけ救われる
霧の中かすむコピートの天下り
なびいてる打算陽ざしが弱くなる
幾山河学んで道の駅にいる

鳥取市 池原 天馬

恋文の返待つ心地塔が来た
合併でわしらの村はゴマ粒に
自家製で椎茸とれたようこそな
菜種梅雨雑草元気盛返す
あと一歩百寿の壁は高かった

鳥取市 春木 圭一郎

分け隔てないあいさつに安堵する
キーワード相手の立場考える
何時だって何でも言える人がいる
忠告は感謝をもって受け入れる
大切な話とにかく会ってする

鳥取市 中村 金祥

野仏の花一輪にほつとする
政策もカネの話も糠に釘
湯治場で昔話の花が咲く
デコボコの道で足腰鍛えられ
クズ鉄もダイヤモンドも地球の宝

鳥取市 宮脇 道子

老いの日々土砂降りつづき癒しなく
友の愚痴聞きっぱなしで軽くなる
切れたかな私の電池空になる
再生は感情までは無理だよ
ね 桜草小さく咲いて独り立ち

鳥取市 太田 幸枝

ポイ捨ての煙草しつかり踏みつける
本心を話したいので酒を出す

脳の錆川柳塔で掃除する

節約も三度だけはとたと食べ
重箱の隅までつくく悪いくせ

鳥取市 奥谷 彩子

あつさりと巣立った子等に持つ未練

まだ元氣踏み出す朝の歩も軽い

ほどほどの子でよし一つ屋根に住む

夕焼とお話をして今日終える

充分に生きたが励むストレッチ

鳥取市 有沢 せつ子

さあ四月街に活気が満ちてくる

シクラメン七度の冬を咲き終える

スーパールの苺の笑みに歩が止まる

心配をかけた墓前へいつも詫び

貧乏が育ててくれた自立心

鳥取市 岸本 宏章

新曲にチャレンジ惚けを寄せつけぬ

親子井卵の方が親だろう

無防備な姿勢で足の爪を切る

早口の漫才耳になじまない

くされ縁六十年のトラフアン

鳥取市 永原 昌鼓

北帰行鶴も家族でふる里へ

同じことくどくど言わすアルコール

クラス会昔の美女も皺だらけ

こそこそとメール交信不和の素

母になる実感腹の子が動く

鳥取市 夏目 一粹

ボクいつもつくり笑いで泣いている

蜘蛛の糸ほどにか細い老い二人

草食の男にもある底ぢから

しばらく会えぬと忘れてしまいたいそう

雨宿りするかしないか夕まぐれ

倉吉市 松本 よしえ

口八丁ひとの心も丸めこむ

不況風人の心も尖りだす

ハローワーク今日も仕事に当らない

梟の声ほろほろと夜の森

介護士を目指し海越えやって来る

倉吉市 山中 康子

久し振り我が家に戻る春日和

馴れるまで虫を宥めているベッド

口と眼が共に笑った退院日

先生も看護師さんみな味方

ゆったりとふれあう棟のきめ細か

倉吉市 最上和枝

海水がテトラポッドを咬んでいる
買って来た水より美味しい井戸の水
疲れ気味足がフラフラ眠くなる
遅くとも五分前には会場へ
派手かなと首をかしげる試着室

倉吉市 猪川由美子

大物逮捕Xデーへ固唾飲む
与野党が立場逆転ぎこちない
獲れたけど悔しく笑めぬメダル色
時と距離置いて諸々よく分かり
世は進み仕分け切り捨て容赦ない

倉吉市 牧野芳光

温暖化で飯を食ってるゴミ処理機
忸怩たる思いでネクタイを締める
バカにしたテレビにバカにされている
沖縄に鎧かぶせるはかりごと
奈良漬を食ったくらいで酔っている

倉吉市 山本玲子

難聴の前触れらしく問い返す
思い出を手繰り寄せてる通夜の席
春一番枯れ葉どっさり持つてくる
電話セールスその語り口こそ悪魔
追伸のたった一行手厳しい

米子市 野坂なみ

大橋が招く宍道湖の夕やけ
啓蟄に早く起きてた亀虫が
一票を投じた信がぼろぼろと
ぼろぼろの家が天下の長者産む
蜜蜂はどこへ隠れたのだろうか

米子市 白根ふみ

空耳かかすかに芽吹く音なのか
桃の花いまだ雛壇恋しくて
固い絆貧乏だったころの椅子
お見舞の今日はやさしい花ぐもり
曲った背たださず老母を撫でている

鳥取県 北村稔

大根葉切って捨てるの主婦じゃない
浮気などしません わたしあんただけ
生んだ子を虐待なんて人だろか
野菜市お客の顔を想いつつ
金なんかいらぬお前と愛がありや

鳥取県 細田裕花

旅に出て凹んだハートふくらます
対等になった親子に酒がある
一冊の本とふれあい夜が更ける
子の都ビルの谷間へ陽が沈む
追伸に母さんの旗なびかせる

鳥取県 山下 節子

決めかねる進路二股から始め
おしゃべりでいつも噂の火付け役
笑みかわしこじけた心解きほぐす
転ぶのがいちばんこわいお婆ちゃん
七人の前で鎧は脱がれない

鳥取県 山本 正光

不発弾提げてるような千鳥足
花見酒奮も酔いがまわるまで
誰かさん煮込むとあぶくどつとでる
星空がきれいと豆の木に登る
目的も地図も無い旅してみたい

鳥取県 池澤 大鯨

温暖化地球が貧乏ゆすりする
密約を暴いてみたがどうしよう
杉花粉黄砂列島春盛ん
ハイエナが餌にたかると蟹を食う
蟹味噌を食べてわが脳リフレッシュ

鳥取県 松川 行男

東大卒タレント希望諭される
採用を願って願書扶養なし
恋は風船破れることを承知して
恋は独身愛は家庭を持ってから
一つ役落ちると次が待っている

鳥取県 石谷 美恵子

老いてまだ二股で追う趣味がある
二番手と組めば出来そう火付け役
らくらくと見せてストレス溜めている
口紅を派手目につけて嬉しい日
リストラヘテレビは食えることばかり

鳥取県 竹信 照彦

健康に近頃坐る電気椅子
良いよいと言われて治る気にもなる
洗濯物干すに美意識ちらと出す
強風と雪でも彼岸やって来る
もう土筆乱立してる散歩道

鳥取県 深田 俱久

山陰がチベットだっていいじゃない
己が香の薄れた古巣覗き見る
ローンひとつ組めば汗する御老体
狙う的年々細くなつてゆく
ふれ合いの席でうつむく性悲し

松江市 三島 崧丘

俺に似るなが口癖だった父に似る
他人から貰う涙はすぐ乾く
約束を忘れた人も同年
真相を知った時から貝になり
目標もノルマも持たぬ身が軽い

松江市 松本 知恵子

とつとつと語るばあやの昔むかし
神楽面つけて本番鬼になる
夜も更けて本音とび出す同窓会
土に生き冬の大地に帰る友
芽吹く春自然の節理知らされる

松江市 小川 注湖

お互いに無口になって手を握る
いい音に心の悩み癒される
白昼夢ピカソの裸婦画描いてる
ダム公園底に山里眠ってる
老人と病院つなぐ過疎のバス

松江市 津川 紫晃

円満の秘訣上手に嘘もきく
それでいいそれもいいなの自然体
保護色が出せない老いたカメレオン
ため息の一つやふたつ冬しぐれ
やがて春信じなければ生きられぬ

松江市 川本 畔

今何時ここら辺りでコーヒーを
うっかうつかと貴方について行ってみる
背中から足までの線こんな線
入口にいつもトマトのある売場
思い出し笑いみんなに分けている

松江市 安食 友子

怠けてる積もりではない爪が伸び
ジェラシーがシルバー会もあるような
或る意味で山の神にはよいしよする
沈丁花と白梅競う玉垣辺
侮って餅に持ち去られた差し歯

出雲市 伊藤 玲子

よいこらしよ無駄骨でしたお節介
自販機の缶はぐずぐずなど言わぬ
淋しさの染みた五体を陽に晒す
湯豆腐に冷めた心を温められ
胸ゆるする春爛漫のウインドウ

出雲市 富田 蘭水

挨拶が人の心を優しくす
マグマの異変ばかりの世界地図
朽ちるまで伴走をする耳鳴りで
言葉一つで好きにも嫌いにもなれる
スーパール籠うさ晴らしも積みこんで

出雲市 小白金 房子

湧水で新酒豊かなコクを出す
お社をひと巡りして春を踏み
長き夜へ我が人生を掘りおこす
再会を約した友の安否きく
名刀へ魂打ちこむ神の里

出雲市 多久和 敬子

感謝する三食昼寝主婦の椅子
老木の芽吹き私も負けられぬ
分婉室孫の産声聞く安堵
幸せを運んでくれる娘のメール
スーパリーのチラシ献立決めてくれ

出雲市 竹 治 ちかし

気付かないところでエコに締められる
買物の籠には妻の領土権
ワンマンカー生命を軽く乗せ走る
不揃いの豆に気付かぬまま紛れ
天も地も私も春を待つしぐさ

島根県 伊 藤 寿 美

坂の上の雲を見上げる菜の花忌
そこからは黙って触れぬ思いやり
古日記繰れば泣いた日笑った日
神様が絡んで戦終らない
やるだけはやったと雲も夕焼ける

島根県 持 田 多輝子

判断は父に任せて恙なし
永田町掘れば疑惑がザックザク
是か非かを決めかねて出す委任状
野辺に咲く真紅の生命曼珠沙華
改革は見えぬが不況だけ見える

真庭市 福 嶋 智恵子

何度でも足が向きます竜馬伝
平成の竜馬が土佐で待っている
オリンピック未知のスポーツ楽しめた
軽業のよう競い合うオリンピック
春はそこ草むしり過ぎ腱鞘炎

真庭市 国 米 きくゑ

十指みな期待通りにまだ動く
期待してますよ総理の決断力
八十女の指をからかうネックレス
温もりの風が手伝う白い杖
後戻り出来ない道を進んでる

府中市 藤 岡 ヒデコ

春風を土に吸わせる鍬をふる
冬眠の蛙を起こす鍬の先
ジャガ芋にたっぷり春の土を盛る
頭だけ出したつくしに雪ぼうし
ふきのとう昔のままの味がする

府中市 馬 場 利 子

紅梅も散り廃校を目の当り
生きて来た重み労う仏の灯
免許更新ハンドルを試される
プライドが素直に聞けぬアドバイス
わだかまりとけてルンルン藤取り

竹原市 石原 淑子

マンホールの蓋のお洒落に気付く春

組板のかわいたまんま母ひとり

柔らかい風深入りはせぬつもり

母の帯ベストに直し母と行く

友の計の受け止めきれぬ菜種梅雨

竹原市 時 広 一 路

もう何年使わぬままの置き薬

神様も教えてくれぬ余命表

まだ元気だから未来図描き足そう

アルバムの家族泣き顔なんて無い

靴だけは磨いておこう無職でも

竹原市 岩 本 笑 子

三月の雪別れとは門出とは

涙ほどの年金十年後を案ず

裸木の強さ弱さよ雪の降る

マイペースガンと仲良くしています

瘦せたいと思う日鏡に笑われる

東かがわ市 伊 勢 八重子

幸せは食べて動いて良く眠る

ふる里の匂があふれる道の駅

廃校に巡る記憶をかきあつめ

万歩計墨絵流しの雨上がリ

波立てず終の住家に根をおろす

東かがわ市 原 賢

拳骨を上げた時から負け戦

再審無罪時計は元に戻らない

狭くとも気楽に横になれる家

がたのきた家にもあつた笑い声

したたかに生きる雑草の気をもらう

松山市 宮 尾 みのり

4 Bがなじんで一句ものにする

字余りにこだわる自我を捨てきれず

関係をはつきり見せている敬語

久し振りの街はゲームの音ばかり

遣り過す風はそのうち風いでくる

大洲市 中 居 善 信

音でない音が聞こえて草芽吹く

まだ殻が破り切れない五十歳

私を誰かが踏んでいる痛い

刺のあるもの美しく媚を売り

合掌をすると笑っている遺影

香川県 川 崎 ひかり

海側の席を夫婦で譲り合う

子が巣立ち元の二人の飯茶碗

イケメンに足腰任す接骨院

やがてすぐ春の主役になる花芽

安物の時計コチコチ三年目

高知市 小川 てるみ

庭先の馬酔木に春を告げられる
いい事がありそう風がハモリ出す
戦中戦後思えば今は楽なもの
杭一本打って流れを変えてみる
前進へ亀はためらう事が無い

高知県 小澤 幸泉

カラフルな街に埋めた父母の骨
幾重にもまた突き当る曲り角
妻の愚痴たまりすぎてる台所
一点を見つめるだけで日が暮れる
青春の母の便りを読んでやり

唐津市 市丸 晴翠

独り身に洗濯もない良い日和
孫の背が私を越えた初詣で
リハーサルできない老いに身構える
百人一首孫と対決まだ勝てる
朝夕の位牌と対話長くなる

唐津市 山口 高明

霊峰をお猿の如く奈良法師
食わずとも死にはしません燕の巢
五十年酷使の身体捻子弛む
水だけでわたし何時まで生きられる
老父と母野良で一生独楽鼠

唐津市 坂本 蜂朗

初恋の住む街に立ち睡をのむ
追って来るほどの愛かと逃げてみる
大臣の椅子がだんだん軽くなる
尻尾振る潮時ずれて群の中
子供らの日本語判らない不安

唐津市 井上 勝規

生かされて米寿峠の陽を拝む
老いてなお共に琴線ひびき合う
座禅終えホッと嬉しい娑婆の風
大食もせぬに頭が眠ってる
老いてさえ雑事の絶えぬ暮らしです

唐津市 樋口 輝夫

喜寿傘寿米寿と生きてつづける欲
小母さんと言われて仲居怒ってる
尋ね人通じなかった北の国
金を出す話にみんな黙り込み
老い二人相和している物忘れ

熊本市 永田 俊子

淋しさがぐつぐつたぎるおでん鍋
ダム問題にゆれてる村の葱坊主
議論百出みな口達者まとまらず
空腹を知らぬ子供のメタボ病
まだ元気数えきれない人の恩

熊本県 岩切 康子

やりたいこと遣つて多忙な今日でした

名も知らぬ助言者に会う謝々謝

不覚にも手首が叫び医者通い

自然治癒肝に命じて薬拒否

自助努力手首のリハも散歩にも

熊本県 高野 宵草

舗装の割れ目春を健気な草覗く

書き馴れて誤字堂々と書いていた

忍耐を梅の花芽に学ぼうか

同窓会なんと楽しい翁媼

自分史を辿りしみじみ親の恩

シドニー 坂上 のり子

うつ憤を晴らすランチは上鰻

プレッシャーがかえ息子もしんどそう

灯を消した途端一撃あびせる蚊

本心を明かしてからの無二の友

降り出せば降り止むことを知らぬ雨

砂川市 大橋 政良

皿の絵が一品料理ひき立てる

どこをどう歩いて来たか木偶の坊

みぞれから雨にかわつて冬を出る

泣いているようにも見える干しシシヤモ

机の隅に未完のままの古ノート

黒石市 佐藤 古拙

よく笑いよく泣き食べて妻眠る

作り笑いするとさからう尾骶骨

すんなりもいいが大根足が好き

人參が嫌い牛年生れです

退いて身についてきたベレー帽

平川市 小寺 花峯

孫達の約束針を飲まされる

孫が来る四の字固めの土曜日

卓袱台が丸かった平和な昭和

町会の会議は御神酒出ると言う

まだ続く偽装の話白湯を飲む

弘前市 今 愁女

恋猫の人と変らぬ声を出し

寒い冬のり越えバンジー色褪せず

花も生きもの夕べ声かけ衣掛け

リコール社長歌舞伎役者と批判され

政治と数小沢ガールズまた一人

弘前市 福士 慕情

加工用へ回るりんごの吐息聴く

古傷に触れば話がなくなる

吊されて鮭の無念が干乾びる

目玉焼き片目で足りる朝ごはん

会者定離季節の花が枯れてゆく

弘前市 岡 本 花 匠

十和田市 阿 部 進

ちやぶ台に花一輪のあたたかさ
主治医去り病院探す破目になり
電化の家訪ね体に異変起き

地物食べこころのゆとり深くする
春の陽に笑福貰ううらかさ

弘前市 須 郷 井 蛙

百円店原価知りたくなってくる
手の平がマナ板になり豆腐切る
バリアフリースリップさえも恐怖です
里帰り出産娘の安住地

診断書やっとお役を下ろされる

弘前市 相 馬 銀 波

過去ひとつ隠すと軽い私小説
聴かせたい時には使うアクセント
ゆきあめと三寒四温待つ桜
禁煙にあれもこれもとつく尾鰭
春以後もポインセチアと雨を待つ

弘前市 高 橋 岳 水

泥酔の捉えどころのない肢体
試されているかも知れぬ分岐点
地吹雪へ向かって伸びてゆく樹氷
浮く灰汁を掬えば本音貌を出す
雑踏にまぎれて捨てる孤独感

すりゴマを食べて居ります里の母
ゴマ食べて喜んで居る老夫婦
里の母元気で居ますゴマ食べて
古里で祖父のお墓が待っている
週一度カレーを食べる私です

青森県 松 山 芳 生

未来潮流世界を招く正念場
シャボン玉割れて再起の始発駅
いい人を仏が先に連れて行く
少子化ヘタレント教授連れて来る
散りはしたが芯を曲げないバラの棘

さいたま市 星 野 育 子

待たすより待つのが好きな花時計
生憎か恵みか三日雨続く
虐待と自死が止まない国哀し
国会の罵声と野次にテレビ消す
裏金や献金もとはみな税金

東京都 岸 野 あやめ

初夏の風ただ森を抜け森を抜け
ふり向けば月が嫌々ついてくる
橋いくつ渡って今日に辿りつく
風邪ひきのなおりそこねも年齢のせい
新生児親のコピーが長い指

東京都 清川悦子

春風が流してくれる今日の悔い
ほかほかの足湯解れていく会話
遠出する外反母趾の靴選び
紅梅へ母を連れ出す散歩道
いつ見ても山の緑は裏切らぬ

八王子市 播本充子

初参加会いたい人がたんといふ
PR身構えながら聞いている
ご近所に行き先までは教えない
東京の雪は全国版に載る
ラブコールふられ上手な男から

武蔵野市 亀井円女

旨いもん食べて長生きしろと亡夫
お父さんにおかん温い言葉やおまへんか
里の母より姑さん好きと泣かす嫁
運動会より亡母の弁当旨かった
夢追い酒は亡夫と夜更けに呑むお酒

川崎市 三浦きぬ

議員さま舌を何枚お持ちです
整形で運命線を変えたいな
化粧して少し女に戻ります
生活苦知らぬファッション女子議員
座り心地良い便座ですよろしくね

横浜市 小野句多留

等伯の余韻一途に帰宅する
ナンバースクイズにはまる春の宵
申告は手でしつかりと渡してる
新党に動く筋書きほくそえむ
一円の株価減資という憂き目

横浜市 菊地政勝

スキヤンダル暴く活字が生臭い
外面の良い女房で恙無し
便利さに慣れ戻れない怠け癖
今日までの味方も明日はわからない
懐しい電話に油断してしまふ

静岡県 藺田獭沓

風祭主役の坊や眠りこけ
人知れず峠を飾る山ざくら
廃屋の荒んだ庭の福寿草
余生にも希望があつて種を蒔く
民宿の夕餉もてなす国訛り

大山市 吉田幸子

厳寒に耐えエンドウのつるが伸び
念願がかない内示に湧く家族
物忘れ度合い激しいカタカナ語
心臓に悪いフィギュアのすってんこ
フォークソング軽いタッチで春を呼ぶ

犬山市 関本 かつ子

静静と冬物回す洗濯機

親の歳越して五体に礼を言い

桜から雪まできょうの日本地図

マネキンにトイレ聞いているおばあちゃん

家庭内別居我家も二三日

可児市 板山 まみ子

衰えに反比例する口の数

実験を持つのは食事作人

春雨に乗ってほのかな沈丁花

冗談が通じるうちはよさそうだ

さぐりあい煙に巻かれた方が負け

京都塔の会 第63回春の吟行句会

日時 5月28日(金) 午前10時半集合(厳守)

集合 地下鉄烏丸線「北大路」駅 南改札口前
(大谷大学前から送迎バスに乗車 10時40分)

行先 常照寺前下車 光悦寺拝観・ホテル然林坊

会場 ホテル然林坊 (ねんりんぼう)

(句会 和昼食とも 椅子席)

京都市北区鷹が峰町40番地

電話 0120-49-1770

兼題 (各題3句)

「当日雑感」「揺らぐ」

「快適」「〇〇力」(漢字3文字)

解散 4時ごろ予定

会費 5000円(当日いただきます)

申込 5月20日までに 都倉求芽まで

〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下る

弁財天町328-202 電話 075-351-4109

◎参考 常照寺 島原吉野太夫寄進の赤門
が有名。毎年4月第2日曜
に島原太夫道中で賑わう。

光悦寺 本阿弥光悦 芸術村営み
の地。7茶室 光悦垣など。

川柳雑誌・川柳塔 通巻二〇〇〇号記念

「私の珠玉の一句」大募集

通巻一〇〇〇号発刊を記念して、同人・

誌友の皆様の「川柳」を募集します。

川柳を始められてから今日までに詠まれ

発表された句の中から、これぞ「私の珠玉の

一句」と思われる句を投句して下さい。

締切日 平成二十二年六月十五日

掲載誌 平成二十二年九月号

投句用箋 専用柳箋を使用し、本社事務

所に郵送して下さい。

(葉書・FAXは遠慮下さい。)

川柳塔の

川柳讃歌

65

木津川 計

美人とは並ばぬように席選ぶ

大川 桃花

子供の頃、犬の仔を貰いにいきますと、一匹だけ売れ残ったメス犬がいました。飼主のお婆さんは「器量のええのから貰われてはく、これでええか?」と念を押された仔犬を僕は可愛がり、よくなついてくれたのです。子供ごころに思いました。犬も女性も器量よしから選ばれるのかと。たとえ「女は顔やない。心や」と慰められるほどに傷つくのです。男も同じです。悔し紛れに醜男がはざぎました。「色男金と力はなかりけり」

一言が添えられ賀状呼吸する

高橋 宏臣

表も裏も全部印刷の年賀状が、しかし多いのです。ちっともうれしくないので「呼吸」していないからです。

味も素っ気もない、どころか自署もしない無礼を責める句はいっぱい詠まれてきまし

た。が、宏臣さんのえらいのは表現を開拓されるからです。全文印刷の郵便物は多くの場合、僕は棄てますが、一行でも添え書があれば私信として残します。「呼吸」しているものをどうして殺せましようか。

輝くというのは重荷背負うこと

山岡 富美子

今この国で最も輝いているのは鳩山首相の幸夫人ではありません。このひとは何一つ重荷を背負わず、浮かれています。

が、浅田真央は違います。一番輝くだけでなく、国民の期待を一身に担っているのです。バンクーバーではライバル・金妍児に破れ、銀メダルに泣きました。今朝のニュースで世界フィギュアの金は真央、銀に研児と知りました。僕らの肩のなんと軽いことでしょう。

冬木立生き抜く話聞くように

福原 悦子

寒風の中に木立は互いに寄り添い、しかし、寄りかからず、すつくと立って冬を生き抜くのです。高村光太郎は冬のきびしさから生きる力を得た詩人でした。「冬の奴」です。

ああ、冬の奴がおれを打つ、おれを打つ／おれの面皮をはく／おれを粉粉にして雪でうづめる／冬の奴は、それから立てといふ／おれは、ようしと思ふ。

そして「冬の言葉」で「冬は鉄壁を打って又叫ぶ。一生を棒にふって人生に闘争せよ」と守る人居ないお墓は作らない

黒田 茂代

お墓は永代家族を前提にして建てられました。長男が家と財産を継ぐ代りに、両親の面倒とお墓を守ったのです。それが戦前の民法でした。が、戦後は長子相続が崩れました。そこへ少子化です。一人っ子が娘なら家系は絶えます。だから、お墓の代りに手元供養や永代供養が増えていきます。お墓をこしらえても、「私はそこにいません」と「千の風」に言われたら、作った意味もありません。

好きな事考えゆるり生きていく

大谷 篤子

篤子さんの句のように生きていけたら、どんなに気楽なことでしょう。ですが、人生はこの句の裏返しでして、厭なことも考え、若い頃は疾走します。中年になれば嫌いなことにも向き合い、なお走らねばなりません。そこまです。意に添わぬことや走らねばならない生活が定年後も続いては悲劇です。

だから、好きなことを考えゆるり生きていく、のではありませんが、篤子さん、先立つもの。そして、人の世や嗚呼に始まる。

(「上方芸能」発行人)

2010(平成22)年 第16回川柳塔まつり

川柳雑誌・川柳塔通巻1,000号 記念川柳大会ご案内

と き 平成22年10月9日(土) 午前11時開場・午後1時開会
と ころ ホテルアウィーナ大阪 4F 金剛の間
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441

祝 辞 船全日本川柳協会 会長 今 川 乱 魚 氏
傘川柳本社 主幹 磯 野 いさむ 氏

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞
おはなし 「路郎と薫風 ― 牽引車の火と継承者の灯」

『上方芸能』発行人 木津川 計 氏
兼 題 「 虫 」 川 柳 展 望 社 天 根 夢 草 選
「 深 い 」 時 の 川 柳 社 平 山 繁 夫 選
「 渡 る 」 ふあうすと川柳社 赤 井 花 城 選
「 車 輪 」 傘 川 柳 本 社 森 中 恵 美 子 選
「 スピーチ 」 川 柳 噴 煙 吟 社 田 口 麦 彦 選
「 価 値 」 柳 都 川 柳 社 大 野 風 柳 選

事前投句 「 千 」9月1日必着 川 柳 塔 社 河 内 天 笑 選

出 題 各題2句・欠席投句拝辞
出句締切 正午(午後5時終了予定) ※各題の「天」位に賞呈

会 費 4,000円(当日いただきます) ご昼食は各自でお済ませ下さい

記念品呈 「麻生路郎読本」・「河内天笑川柳句集」

《懇親宴》

と き 平成22年10月9日(土)(午後5時半～7時半)
と ころ ホテル・アウィーナ大阪 3F 葛城の間
会 費 7,000円(会席料理)

川 柳 塔 社

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
電話 06-6779-3490

自選集

八十田 洞庵

奥田 みつ子

燃えてくる炎二人にある覚悟
社が乱れ三猿主義を通してる
ひとつだけ秘密を提げた旅みやげ
消えた面影ワイングラスが映し出す
リングむく男に嘘を言い出せぬ

両川 洋々

河井 庸佑

葬式二つ田舎議員も忙しい
婚活のわたしを神が振り向かぬ
景気への長い助走に疲れ果て
妻よ子よ俺に花道など要らん
リストラへ軍手が欠伸してござる

板尾 岳人

川上 大輪

鶯の声聞きながら薪を焼べ（北川村）
お龍には逢えず龍馬と桂浜（坂本龍馬）
星一つ土産に欲しい露天風呂（北川村温泉）
幕末の志士となりしか陸援隊（中岡慎太郎）
ゆずの里クロード・モネに逢える庭（モネの庭）

春告げる白木蓮に励まされ
カーリング真似て楽しい風呂掃除
喜寿たのし言いたいことを言いながら
花の下ケンカの続きなど忘れ
春愁に追討ちかけて降る黄砂
流された旅路を語る丸い石
継続は力悟った万歩計
土壇場で心に響く亡父の声
正論が棚上げされて悔しがる
右左はたと思案の分岐点
春うらら生命線も伸びてくる
雨漏りをじっと聴いてる聴診器
坂道で振り向く癖が治らない
スパーードのエースも少しメタボ気味
んなバカなことが今では当たり前

木村 あきら

霧雨に相合傘のゆく長閑
防潮林今日も雄々しく村守る
道州制夢見て進む街作り
やすらぎの心を呉れる六地藏
地球儀の明日を狙う植樹祭

小島 蘭 幸

妻を長女と間違えたのは神である
そして十年比翼の句碑と乾杯だ
洗濯物を上手に畳む僕がいた
ご機嫌な義父が蘭幸さんと呼ぶ
頑張れと誰も言わなくなつて冬

小西 雄 々

萬的と愛論消えたどうしてる
雪の降る町で異国の灯をながめ
若草は萌える牧場はシンホニー
無人駅にたんぽぽが飛び温かい
幸せに見せる隣へ気をつかう

斉藤 嘉

りんご噛む音も枝剪る音も春
デフレなど知らず出てきた路の臺
ふるさとの香りいただく木の芽和え
ぐっすりと眠つた森のいい目覚め
太陽にもうささやいている双葉

塩満 敏

久しぶり桜島に会いに行く
これきりになるかも知れぬ桜島
この秋は父母のお墓に会う予定
天国の友よ傘寿祝いに顔を出せ
妻の庭今年の花がお楽しみ

新家 完 司

写真帖貧乏苦笑物語
般若心経苦手般若湯得意
酒焼酎麦酒葡萄酒皆歓迎
我利我欲身体髪膚占拠中
注意注意！自殺者注意！決算期

恒松 町 紅

一徹な人年聞けば同い歳
ど忘れも茶飯事馴れてきた手足
手の傷み筆の所為にはしたくない
まだ若いつもりが身体ついて来ぬ
畑には父が遺した宝物

津守 柳 伸

釘煮届いて一年の早さなど
夜目遠目癩癩持ちの猫の恋
フグコース汽車弁になる猛吹雪
衣食住足りてマナーにもの申す
桜便り予約プランの目白押し

遠山可住
老いらくの恋へくせ字がなつかしい
毛糸編む指目葉をさしながら
スイッチONお風呂が湧いて森が荒れ
オリンピック済んだら相撲プロ野球
へそくりを郵便局が知っている

都倉求芽

どこいった雀横着な鳩ばかり
子供らが遊び疲れて春暮れる
釣堀の魚に延命策を聞く
何事もなくてカルテも春になる
弥陀の声まだまだ聞けず春彼岸

土橋螢

次の世に辿りつくまで流れよう
浮きたって燃えるところに春が逝く
六人の飯ふんわりと炊きあがる
笑い遅れておんなが通り過ぎてゆく
第一志望は飛行機乗りだった

中原諷人

ぬらりくらり加齢一樹の病み易き
つえを突くのに少しづつ蘇生する
かと云って半馬力ほどではない
風に風邪その後は油断せぬ栖
ひびき合う絆もたつく日もかぞえ

西出楓楽
昼の月その後のノラを知らないか
同じ目線で違ったものを見ています
うんちくを溜めるポツケは穴だらけ
あきらめと我慢政治に教えられ
三世代同居さざ波立てながら

仁部四郎

CMやGDPを左右する
CMのおかげ楽しむ白昼夢
おくすりのCM俺も一言
広報といえはお上のCMです
CMの加減乗除で明日の知恵

林瑞枝

駐車場には昔は無花果ざくろの樹
未来は海の童話となるか鯨たち
望郷の海を枕に旅の宿
健やかな笑顔さくらの駅にある
恍惚と八十路を生きる福寿草

前たもつ

とれました医師の言葉にほっとする
看護師の技術やさしさ合せ持ち
ホテルであれば大阪城は前に見え
また世話になるかも知れぬアンケート
これからのことはこれから考える

第118回 大阪川柳の会

日時 6月2日(水) 17時開場 18時締切(席題なし)
会場 サンケイホールブリーゼ 八階 八〇三号室
宿題と選者(各題二句)
△じわり・杉野まつ子 △巻く・上野多恵子
△怪しい・古今堂蕉子 △雨・磯野いさむ
会費 千円 欠席投句6月1日まで 本田智彦 宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706

大切な明日のための誘眠剤
トーン落として病床の友と笑う
変わる季節へ同級生の計が続く
早やばやと桜満開やがて哀
そのうち牡丹 あなたは花になっている
虹が出る予報出来ぬか氣象台
気がつくと老人会のベテランに
大皿も小皿もそれぞれの役目
人間の勝手ここにも羽根布団
後戻りする策もある分岐点
利き耳を塞いで空気汚さない
回転のよい五感から窓開ける
友達を囲み囲まれても崩れない
金沢の雨を選んで春絵筆
どん底も断崖も見てまだ未熟

政岡 未延子

三宅 保州

宮西 弥生

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須崎 豆秋

この石にむかし芭蕉が腰をかけ
秋風の中で乞食に拝まれる
ふらんすへ行きたし秋の背広着て
煌々とすしがぎょうさん売れ残り
小市民軒に玉葱ぶら下げて
神様へ腰の痛いのもたのみ
ほのぼのと元旦になる酒のいろ
どないしましょうか猫が風邪をひき
区役所には惜しいべつぴんが居り
均一の中にさみしき荷風集
無一文というスリルを君知るや
啄木でなければどじつと手を見るよ
今晩は台風だとさコスモスよ
パチンコの玉さえままにならぬ世ぞ
けつきよくはミミズ煎じたので治り
口説かれたことが無いとはさみしいネ
らりるれろはつきりしない程に酔い

初版 昭和29年11月発行
再版 昭和30年4月発行
復刻版 昭和60年9月発行

水煙砂

川上大輪選

和歌山県 森 下 よりこ

磨りガラス明日のわたしが見えてこぬ
寂しさの隙間を埋めるコップ酒

静電気己を裁く鞭だろう

今治市 渡 邊 伊津志

ふるさとに住んで逃げ道なくらし
古希過ぎて生活習慣変えられず
汗流すくらしに嘘は出てこない
裏側は見ないでいよう春最中
花水木軽い嘘なら許せそう
長生きをするかもしれぬ一歩引く

米子市 竹 村 紀の治

言い訳の土産の鮭と終電車
もう一度ゴミカレンダー確める
時代から一歩遅れてついで行く
ジーンズに脚の長さを嘆われる
もう少し頑張れと言う体脂肪
ダイエット今日も拗ねてる腹の虫

紀の川市 宇 野 幹 子

ポロポロと虚飾が落ちる厚化粧
ぐつぐつと妻の小言が煮え詰まる
秋刀魚の目はろりほろりと海を恋う

透明なものが描きたい画家の欲
目に見えぬものが描けんと嘆く絵師
母親が語を足す孫の電話口
野の花に心を寄せて私語を生む
絵が見えて音が聞こえて来た名画
無意識に意識が溶けて来た絵画

和歌山市 上 田 紀 子

万歳をするまで取ってある笑顔
サラサラの血液だけは自慢です
欲のない人に巡って来たチャンス
人間が苦手パソコンと遊ぶ
春風と野山が私呼んでいる
不束な娘を売りにお見合い日

豊中市 源田 啓生

埋み火を掻き立てて着る赤である
煮え切らぬ想い半熟卵にも

満開の老桜杖が離せない

何時の間に翼の取れた背がある
笑えなくなつたな入れ歯外れそう
残り時間生命線に聴いて見る

阿波市 三浦 千津子

古布を前に模索の小半日

価値観の違いぐしゃぐちぎれ雲

マニフェスト並べ過ぎての空回り

ライバルにのらりくらりと間を置かれ

生き下手の一つ覚えが勝ち進む

ゆつたりの服に馴染んで来た加齢

札幌市 小沢 淳

美しく逝きたいなんて冗談を

芸術に王道はなく上下なし

頭数まず集めねば民主主義

平坦な道でないから面白い

よく吠える粗食に耐える雑種なり

なあカラス俺もお前も騒ぎすぎ

大阪市 池田 純子

父の呼ぶおーいは母のことでした

母さんが逝つて私は迷子です

車イス残して母は永遠の旅

父さんに逢いに行くわと母は近く
日帰りで行けたらいいな亡母の国
縁側の日だまり猫とうばい合う

堺市 遠山 唯教

花吹雪気になり天気予報みる

決着をつける啖呵はよく切れる

助っ人に手垢がにじむ古い辞書

ドルユーロ円の都合で船にする

三食に甘えて帰る家がある

おひとりに一個チラシの列にいる

堺市 羽田野 洋介

背景だけ存在感のないお方

ちよつとした仕草まで似て苦笑い

雑学の豊かさ誇る老いの意地

延びる寿命付いていけない足と腰

焦点を少しはかせばいい加減

まだ何かつかむつもりの一ひとり旅

芦屋市 竹山 千賀子

縦と横うまく絡まり五十年

愛一杯背負いくの字の母のせな

子等のない校舎の窓が泣いている

故郷の肴に出合い禁酒とく

満月が手からこぼれる露天風呂

転んでもだるまのような子に育ち

札幌市 三浦 強 一

寿限無寿限無言えます呆けてなどいない

筆順はどうあれ誤字はいけません

自分史に付けておきたい正誤表

孫が来りゃ張子の虎で首を振る

黄味の位置こだわりがある目玉焼

横浜市 川島 良子

回り道しましたキミに逢えました

東大にこだわる訳があるらしい

嬉しくて絵文字絵文字で打つメール

フラッシュを浴びて凱旋するメダル

気力との勝負自分に負けられぬ

豊橋市 藤田 千休

春風が宅配してる花粉症

フリーズで妻がよろめく美人の湯

雨漏りの跡も雅なロココ調

デビューする前に消えてくシヤボン王

ヴィーナスの素顔を知っている鏡

大阪市 吉田 知之

アンケートちよつと気取って標準語

ポイントに釣られつついい買いすぎる

生駒越え夜景にホッと癒される

今日も無事夕餉の膳に手を合わす

ラーメンの梯子を今日もするテレビ

大阪市 松田 聰

飼主を従え散歩してる犬

特価品迷っていたら売り切れた

特売日主婦のパワーを見せられる

目玉品に並んでまずい人に会う

ガソリンの一円安へ高級車

池田市 上山 堅坊

親しげに話し始めて人違い

居酒屋ででかい話をして帰り

皆欲しいどれが好きかと言われても

聞くだけで疲れる壺のない話

念のため先ず百均へいってみる

茨木市 島田 誠一

仕分けする妻の矛先僕ばかり

創業家継いで白足袋泥踏めず

お家芸継げぬ五輪を遠く見る

こんなにも丸い地球が輪を拒む

貧乏を継いで無欲を鍛えあげ

河内長野市 松岡 篤

温室でおマセに出来た旬の味

健診の結果聞くまで酒止める

酔っ払い隣家のチャイム鳴らしてる

口出すが金出さんから進まない

駅前の大きなビルが大欠伸

河内長野市 辻村 洋子

寝屋川市 岡本 勲

困ったな着れそで着れぬしサイズ

博士号光り就職儘ならず

同窓会どんどん冷める古い恋

おーい飯他に言う事ないですか

子育てが楽しかったと気づかされ

堺市 澤井 敏治

福は内豆は枝豆ビール党

錆ついた肩甲骨に軋む音

薬指わたしも嚙んで欲しかった

キャッシュレス社会に潜む生き地獄

背かれても故郷はじつと待っていた

高槻市 片山 かずお

いたわりの言葉に揺れたハイヒール

友からの釘煮が春を連れてくる

幸せは透明だから気づかない

躰きの最初は君に会ったこと

子供部屋夢いっぱい万華鏡

高槻市 島田 千鶴子

三面鏡律儀に写す老いの顔

三角の底辺にいてよく眠る

凜としてお湯沸く音を聞く茶室

お茶の席じつと我慢の白い足袋

捨てられず納屋に居座るおひなさま

ぬくもりをちよつともらいに絵本展
年毎に増える心の皺の数

どの薬効いたか元氣とりもどし

初恋のレモンの味がよぎる古い

取柄ない僕にも妻がいてくれる

羽曳野市 宇都宮 ちづる

驚も発声練習する陽気

呼出し音変えて電話に春を待つ

帰国して茶漬の味にホッとす

時差ボケも旅の余韻を楽しんで

蝸牛管妻の小言を風にす

枚方市 河田 洋子

割り勘で飲まぬ酒代払わされ

口実をつけて昼夜酒びたり

好物の酒下げてゆく兄の墓

盃を重ねて猫が虎になり

我慢やめお好きなように生きなはれ

西宮市 寺井 秋果

諸行無常失うもののない八十路

老いたりと言えそれなりの矜持もつ

麓から拝んでバスで待っている

四季折々咲いて咲かせて共白髪

顔見せよじザはいらない古里だ

西宮市 吉井 菜々子

春めいてシフォンの風が吹いている

ペアグラス甘え上手になれませんか

ブラインド開くと今日も雨でした

バランスのわるい翼で四十六

頼もしい一升瓶を傍らに

川西市 日野岡 和之

四苦八苦極楽を知る岩清水

梅一輪春のきしみにせかされる

身にしみる心にしみる贈る歌

汗なみだ思い出に成るたからもの

悔しくて眠れない夜は眠らない

和歌山市 磯部 義雄

酒量が分かるすわった目の笑い

凡婦だが妻の料理は五ツ星

裏方で支えた妻へ感謝状

ゆたんばで温めた恋が冷めてきた

九回の裏に潜んでいた哀歌

紀の川市 辻内 次根

春になるネットで花の育て方

単線のことと走る春の音

汀百選空も気分も晴れている

十八切符いまだ尽きない夢がある

デジタルにしても中身は変わらない

紀の川市 北山 絹子

懸命に生きてその後はケセラセラ

土砂降りへ肩の力が抜けてくる

引き止めて無理難題を押しつける

足音も立てず帰って来た夫

雨垂れの音に心を遊ばせる

鳥取市 稲村 遊子

つまみ食いカルテに自白させられる

本音吐く独り善がりと言われても

リセットをしたのに同じ朝が来る

春の靴踵を少し高くする

家族より長いケータイとの時間

鳥取県 大塚 美代子

心配の種を探して歩く親

鉛筆の芯を削って身構える

とんがった鼻がじゃまするのぞき穴

噂話拾い食いする隣組

変化球なげて破ったガラス窓

鳥取県 田中 一眸

自己主張しないと決めた春の雪

シナリオの無い人生を楽しもう

正論を吐くたび肩が凝ってくる

決断を延ばせと笑うおぼろ月

はにかんで春を告げてる路のとう

米子市 小塩 智加恵

父ゆずり器用貧乏丸い爪

無口でもハートは熱い人と知る

年金の財布になびく子や孫や

同窓会葉の数を自慢する

ガスレンジ買い替えました五割引き

米子市 後藤 美恵子

返り血を覚悟でずばり物申す

細腕にまさかの時の力瘤

春風がさよならさせた坐り胼胝

裾回りしつこく絡む静電気

屑籠に句作の悩み溢れてる

米子市 吉田 陽子

病気さえ直れば何も望まない

体温計二本どちらも六度五分

仕分けしてみたら未来が欠けて来た

美人とは言われず困る事もない

どちらかが待つことになる待ち合わせ

出雲市 川島 和歌子

豆撒いて一人住いの福は内

ほのぼのと程よいかんの雪見酒

ひとときを睡魔が誘う春炬燵

退屈で携帯電話掛けて見る

ほどほどの幸せ貰い生きている

竹原市 若年 幸子

君と居てカメラに遊ぶ梅の香よ

六Bの芯から夢を紡ぐ幸

下り坂笑って困る老いの膝

海光る嬉しい春の予感抱き

雪洞へ桜ゆかしく悩ましく

宇部市 高山 清子

覚醒剤人間性を売って買う

携帯を持って孤独が深くなり

雑談の中から腹のさぐり合い

便利さが人の絆を薄くする

それなりの覚悟で乗った縄電車

大洲市 花岡 順子

トレードへ人の重さが計られる

全国に支持層のあるこしひかり

ゆっくりと歩いて視野を広くする

叩き売りバナナの痛み知ってるか

内定のない卒業へ春の雪

福岡県 林 さだき

人生に選びそこねた分岐点

約束がいくつも迫る趣味多芸

定年が迫る助走を急がねば

憲法がまぶしく見えた少年期

ケイタイが家族の距離を遠くする

静岡市 渡辺 芳子

京都府 清水 英旺

私なら氷に立つとすぐころぶ
仰げば尊し鬼の男子にも涙
チューリップ見て欲しい人来たかしら
この年でどこも正常どう生きる

岐阜市 平野 あずま

熱燗が冷やかで悩む春の宵
味方にも見せてならない傷がある
人赦すことで自分も救われる
影だけは僕を信じてついて来る

江南市 脇田 雅美

初恋を喜寿の恩師に打ち明ける
針金のとおりにならぬ松の意地
お手前に正客の目が光ってる
新緑に母を和ます車椅子

京都市 藤井 文代

持て余す長い話に咳払い
考える間に先走る思い込み
善し悪しを計り返事を書いている
冗談に本音を混せて通す意地

京都市 田部 和幸

朝寝坊生きてますかと妻が呼ぶ
耳元であのねあのねと孫が言う
女房の正論聴いて黙る僕
呆けたかな食欲だけが沸いてくる

副作用ばかり目につくマニフェスト

花粉症律気ことしもやって来た

熱い茶でぐつと飲み込むきょうの憂さ

年金者の中にもいてる富裕層

大阪市 堀田 温子

動くもの大好き猫のフラダンス

古美術に私どうかと言う老母

大自然流れる涙までのむか

大都会蟻によく似た人の群

大阪市 笠嶋 恵美

ちいさめで買わず防止冷蔵庫

ドアのノブバレンタインのチョコ掛ける

わくわくといかなご煮ます配ります

春風と空に私のタクト振る

大阪市 山本 加お里

傍にいてあげねばならぬ人という

ゆっくりと年相応に生きてます

これからは私の時間寝るとする

誕生日近づき夢が膨れだす

大阪市 吉川 弘泰

レントゲン私の胸をのぞいてる

まだ早いや遅くない緑の湯

柏餅少しあぶってひとり酒

久し振り化粧映えした妻の膝

大阪市 安藤 なつこ

たんまりの金と孤独を手に入れる

本物の愛は確かめたりしない

ありがとうさくらにあなたにこの国に

花よりもおだんごよりも君の笑み

大阪市 片岡 松枝

良いところまだ残ってる足撫でる

救急車音遠くなりホッとする

不意の用意気にしながらもまだ出来ず

十階へ昇降の足泣き笑い

大阪市 太田 としお

さすが友金というたら財布ごと

なああんたおめでたちやうでメタボやん

幻覚の親類でした錯覚は

舞台よりめっちゃおもしろい舞台うら

大阪市 奥田 キエコ

犬の世話まめにはするが親看れず

未練などないがメールで追いかける

約束を破ってほけたせいにする

外国人古い町家にうまく住み

大阪市 橋村 容子

北風に落葉が好む水溜り

大イチゴ手のひらにのせ眺めてる

クレーン横歩幅速めてホッとする

路地の猫用心深く眼が光る

大阪市 寺井 弘子

声だけを聞けば優しい妻になる

淋しくてひばりの古い歌うたう

新しいドレスも愛に飢えている

紅させば少しはましになる私

大阪市 平井 露芳

ゴミ出し日カラスにもあるスケジュール

かわせみの来るのを気長に待つカメラ

お目覚めに一寸聞いてや深夜便

瓦屋根減って雀の住宅難

泉津市 助川 和美

お姫様だっこかなった要介護

老妻はハイハイ言うて生き上手

これでよし鏡に写る今日の出来

本物や言うから指輪質屋行き

泉佐野市 稲葉 洋

また席が空いた汚点を繰返す

裏向いた絵馬よレースはまだ続く

人間の渋味氣がつく頃斜陽

大津波大袈裟なんて言う勿れ

岸和田市 中岡 香代

二歳児に誰が教えたアカンペー

マスクかけマスク美人と言われても

親の夢背負う子供の塾通い

デマも交ぜおもしろい話作りあげ

河内長野市 針 生 和 代

嘘少し混ぜて人生泳いでる

子の泥を被って生きた背の温み

野良猫と目を合わせてる日向ぼこ

亀の歩であゆむ幸せだつてある

河内長野市 梶 原 弘 光

決算の数字を固め大あくび

自転車に付いてないのかエコポイント

蛍光灯替えるとそこは別世界

今の齡はるか先だと思つてた

河内長野市 山 本 エ ミ

してみた恋に溺れて大火傷

嘘ばれそう話ころろ変えて行く

虹の橋取りに行つてとせがまれる

鉛筆が仕分け済ませて削られる

河内長野市 谷 久 美 子

風去つて元の静かな日が戻る

横槍を入れた時から四面楚歌

許してと言つて顔がなぜ笑う

頼まれた判子一つで共倒れ

河内長野市 山 室 光 弘

姑が嫁に気がねの現代史

とりあえず金のいること先送り

生きてるぞ地球が時に跳ね返り

母の味添えてくぎ煮が春を告げ

河内長野市 宮 守 正 博

水割りにライバル浮かべ一気飲み

白足袋の小鉤が光る若女将

女医さんに見惚れて脈が早くなり

泳ぎ方教えてくれた夜の蝶

河内長野市 内 海 綾 乃

入学まで桜咲くのを待つてほしい

イカナゴの時期早く食べたい待ちどおし

修学旅行指折り数えて待つている

公園の遊具子供を待つている

河内長野市 木 見 谷 孝 代

石投げて波紋は君に届いたか

道草が好きで迷路へ入り込む

春うらら野良着ファッション板に付く

旅終わるまだマニキュアは赤のまま

河内長野市 木 太 久 正 一

気合入れ包丁握る晩ご飯

愛想よいレジに人あり店栄え

いろいろのあいさつ交す犬仲間

幸いに足腰丈夫牡丹咲く

堺 市 内 藤 憲 彦

妻の勘あらどうしたの図星突く

あの頃に変身してるクラス会

送料がゼロと言われて買い過ぎる

孫を誉め兜も誉めて初節句

国産の野菜喜ぶ台所

堺市 近藤 治子

亡き夫の十三回忌妻は老い

赤ちゃんのほっぺ思わずつついて

出来ること一杯あるよ有難う

吹田市 二宮 栄子

庭の花切つて小さい春活ける

もの忘れするが口だけよくまわる

からっぱの頭をなでる春の風

遺族年金孫にいい顔して暮らす

高槻市 初代 正彦

青空が動いて見える逆上がり

磯便り聞いてそわそわ釣り支度

伝統の神輿に映える若い肩

店仕舞い決心したら客が伸び

豊中市 荒巻 夢

建前も本音も共にほどほどに

春まだき一途に燃える猫の恋

じわじわと伸びる日脚に靴が鳴る

じっくりと煮込んだ大根ほどの恋

富田林市 古田 千華

練行衆の声明を聞く異空間

青空を見上げてふらりずる休み

青い薔薇バイオの子孫残すのか

大根の本音しみじみとおしい

寝屋川市 小嶋 みさと

週一にマイク持つ手の楽しさよ

花だより心浮きたつスケジュール

生きる術逃げるが勝と言うけれど

水仙は可憐に人目惹いている

寝屋川市 小谷 滋彦

パスポート捨ててて日本の四季に酔う

瀬戸の香の牡蠣雑煮こそ母の味

花茎みて心の軸のぶれ直す

旅の恥拾い集めて持ち帰る

羽曳野市 森 下一知

年金のしずくを受ける定年後

利き腕に残る病の後遺症

家計簿の穴に産地を押し込める

跡継ぎにバトン途切れる耕運機

羽曳野市 松本 静子

春なのに冬將軍がまいもどる

沈丁花ほのかに匂う春の宵

菜の花を御浸しにして春を食べ

傘寿でも夢はいっぱいもっている

東大阪市 西田 いくひろ

それなりに立派に育つ路地の花

頭打ちしてから知恵が湧いてくる

折り合いがつけば妥協の癖がある

十人十色深入りすると揉めてくる

枚方市 小川 良 吉

覗きたい妻の秘めごと古日記
亡き母の遺した古着懐かしむ
亡き母の古いアルバムすまし顔
古い家町屋が生きる京の街

枚方市 坂本 ミヨノ

冬の鍋今年も毎夜酒の友
本音出さず我慢するの歳功
ささやいて本気にされた四月馬鹿
花便り心も夢も揺れている

藤井寺市 吉田 喜代子

ほっとする下手な手作りおひなさま
啓蟄に急いで靴を磨き出す
やっと来た春の日差しは斜めから
年寄りには朝が早いと一絡げ

箕面市 寺井 柳 童

秋の空真つ赤に子規の好きな色
国と国切り離す橋結ぶ橋
お結びに和風洋風中華風
パン屋まで春の新作発表会

八尾市 中島 春江

ひらひらと蝶舞うようにスイトピー
なき人に名残りの梅香馥郁と
なにげなくその一言が火種とは
落ち込んで今日は早よ寝よ明日がある

八尾市 赤木 妙子

アルバムに増える曾孫とツーショット
腹の虫時々頭あげたがる
天辺は見ないでおこう木の葉髪
回収日生きた証のゴミを出す

八尾市 前田 紀雄

不揃いでも孫のケーキはおいしいネ
無為徒食家族の絆細くなり
千号を夢見て切磋琢磨する
誘い受け出席すれど茶も出ない

大阪府 神野 千恵子

マスクして眼鏡をかけて行く花見
四月馬鹿本気になつて探す嘘
おはじきにどこか似ているカーリング
繋がれて安心してゐる犬の顔

大阪府 西川 冷子

ひと言を飲んで拍手の渦となる
ほめ上手その気にさせて放り出す
旅先の気温案ずる花の冷え
花言葉あつたわたしも野を飾る

大阪府 畑中 節子

農道に春の雲浮く水たまり
誰とでも話したくなる春日和
牧場の向きそれぞれの牛の群
農作業鍬で鍛えた肩と腰

大阪府 小 栢 こずえ

皺の手をさすり毛糸を編む日向
笑み浮かべ言葉を探すボランテイア
旅仕度してるときから旅気分
出入りする呆けに挑戦する努力

大阪府 若 月 祐 作

政治と金裏と表で出来ている
犯罪の裏には金がぶらさがり
つまづいた石を睨んで蹴っておく
免許継続妻の買い出し医者通い

大阪府 高 木 道 子

道の駅生き様さけぶ野菜達
ローン済みスローライフを持ち歩く
早起きに墨絵のような朝が有る
人生の惚け突っ込みの句読点

大阪府 坂 口 公 子

憎まれ者になりたくは無いピースです
亡夫サマの命日だけは忘れない
曾孫どのにあやされてるよう抱っこして
良き事へフカフカになる足の先

大阪府 中 井 記久乃

この頃はネコも杓子もダイエット
パソコンはボタン一つで海外へ
健康に気を付けながらのむサブリ
細い目のズボンに合わすダイエット

神戸市 早 川 孝 子

転んでも心の奥はバラが咲く
空見上げ胸の痛みを軽くする
子育ての魔法の力鈍りだす
いい出会い繋がる糸を玉結び

尼崎市 藤 岡 り こ

サクラサク子は親離れたつもり
夫婦円満少し我慢の胸の内
保険金払うばかりでまだ元気
妻の留守おまけのビール冷えている

尼崎市 小 池 幸 子

身に染みる寒波もやつと先がみえ
さまざまな願いを吊るす絵馬の数
尽くし過ぎ駄目な亭主にしてしま
い
登下校未来を担う子等元気

加東市 岩 本 美緒子

シルバーの夢追う足は杖たより
消したよな声かけ習う暖房器
電話鳴るハイハイの声間に合わず
朝葉飲んだかどうかまあいいか

加東市 黒 崎 美紗子

間違いの封筒来てるまたかいな
まだ丈夫後期高齢畑仕事
球遊びコンペ結果へ首のびる
元気ですか気づかいくれたひなあられ

篠山市 沢山啓子

古里の友がまた減りフキノトウ
ファイルには無い豪球に見舞われる
鶴亀の箸置き払い薬飲む
股座膏葉すごい言葉があるもんだ

篠山市 谷田多美子

虎の子を数えて春の夢を追う
野仏も温いお顔のお水取り
三度目のクシャミ大きく一人住む
啓蟄に掘った墓穴の蓋をする

篠山市 酒井真由

父さんのへそくりとうにばれている
お小遣いねだるつもりがいい返事
断りの手紙に情をからませる
知らんぷり何度呼んでも振り向かぬ

篠山市 永井かほる

次々とメールで知らず便利な世
作物はてまひまかけてよい返事
便利になり昔のがまん出来にくい
四月には遊ぶ予約が飛んでくる

三田市 尾崎一子

手術後の貴方の両手あたたかい
田畑をみればその家の暮らしぶり
子の家を探す交番見つからん
鍋囲む蟹もみんなも赤い顔

三田市 辻開子

アナログを地デジに換える満期金
週末の孫が遠のく年ごとに
収納は本の助けを借りるけど
埋蔵品桶が出てきてはしゃいでる

宝塚市 丸山孔一

御利益を値踏みしつつのお賽銭
長生きをしたくないとはそりゃ嘘や
店じまい言われ買い込む不用品
この地球自転の速度早過ぎる

西宮市 株元玲子

萌える春ただそれだけで頬ゆるみ
今聞いたこと二度三度きく八十路
脳とびら少し錆びたか半開き
心情はシルクのように柔らかに

西宮市 泉水牙子

目立ちたいので腰パン鼻ピアス
新しい案蹴られても蹴られても
物心ついたら母は居なかった
交通費も無料でいける銀河駅

三木市 山口久子

病み上り体不自由口達者
不況でも大黒柱しらん顔
露天風呂わが世の春と一人じめ
雨の日はしづかな午後のひるねで

奈良市 尾畑 なを江

簡単に覚えたことはすぐ忘れ
口数が少ない方が良く映える
あたふたと過ぎる一年早いこと
親切をさりげなくする苦勞人

奈良市 岩本 浩二

直向きな恋も全ボツ苦い青春
午前さまぬつくと起きた鬼の面
鬼嫁もはたから見れば賢夫人
足湯とて若い娘の傍寄りたがり

奈良市 阿部 茶々

鯉のぼり娘の鯉も泳いでる
呱呱の声産みの苦しみ飛んで行き
湯タンポをベッドに入れてエコ参加
薬湯に肌も心も癒されて

奈良市 辻内 げんえい

縁故入社したのは良いがリストラに
腰痛を治すリミット孫来る日
虎の子の埋藏金も塩漬けに
国会の生中継に時忘れ

奈良市 加門 萌子

好奇心歳と相談して萎む
列島が溜息ついた涙雨
凡人の親凡人の子で気楽
春霞わたしうっかり溺れそう

奈良市 矢野 良一

幸せは炬燵に入りする昼寝
へそくりは結局孫に消えて行く
満天の星ロマンチックな能登の旅
健康は目刺し納豆御御付

大和郡山市 牧野 隆之

構えてる老舗の暖簾揺らす風
阿修羅像眼の奥にみる慈母の雨
容赦なき言葉に欲しい句読点
豊かさと隣り合わせに棲んだ飢餓

奈良県 谷川 憲司

太陽の恵みを忘れ文句言う
定年後自由な今日に感謝する
煙草止め命を繋ぐ酒を酌む
万歩行地元の名所図会が出来

和歌山市 根田 よしこ

パソコンが使えなくても案に生き
孫たちが笑う漫才笑えない
ピアノ弾く自分におくるノクターン
目は今も五番ホームをさがして

和歌山市 福井 菜摘

ポケットにいつもユーモア持ち歩く
ふり向けばどの足跡も温かい
労わりのかたちになってフルムーン
続編は輝く色に仕上げよう

辛抱が鏡に写る深い皺

岩出市 藤原 ほか

たつぷりと愛をもらって開花する
簡単に仕分けされても意地がある
新しい暮らしに赤いバラを買う

岩出市 村中 悦男

ふろしきは丸も四角も包み込む
過去話す多少誇張を含ませて
反論の可否を互に知る二人
残る余生心丈夫を重ねたい

海南市 小谷 小雪

芳醇さまだ足りません手前味噌

渾身の豆腐料理に文句なし

沈丁花母のいのちへ香を運ぶ

リハビリの母のお箸に豆が逃げ

田辺市 大峠 可動

四月馬鹿愛は何処まで飛べますか

妙薬を飲んで頭痛の種明し

日向はこ膨らむものは夢ばかり

余生とや樂觀主義になりました

和歌山県 坂部 かずみ

飽食も漬け物ですむ昼ひとり

辞書だけを開けて一日終ります

愚痴こぼす電話長々聞いている

春三月櫛の花も咲きました

母の爪切って残りの時すごす

鳥取市 高浜 勇

ベルトからこの半年の不摂生
動かずにじっとしているエコもある
虹を見てばかりおれないきのう今日

鳥取市 坂本 なつみ

裸木の強さ飾るは牡丹雪

名水が湧くふるさとで手を洗う

合格の予感うれしい祝い鯛

よもぎ餅あつあつあんこ草匂い

鳥取市 深澤 千恵子

肩の荷を涙と共に下ろす真央

スカートの丈より目立つ腹周り

時が経ち苦い思いも甘くなる

横向いた顔に不満が見え隠れ

鳥取市 近藤 秋星

森羅万象春の衣装に衣替え

逆戻りは結構前へ進め春

お坊ちゃま総理に活を入れてやれ

春が来た野にも山にもホームにも

鳥取市 大前 安子

頑張つてガンバツてみた見た格差

バツシング修正液が間に合わず

捨てたネタ化粧なおして花開く

母の雛孫と並んで同じ笑み

鳥取市 山口 千代子

春よ来い希望を抱いて夢を追う
看護師医者と親しくなるも良し悪し
願わくば花の季節に逝きたいと
念仏をとなくて胸のしこり消す

鳥取市 津村 律子

いい妻と思つていたは私です
気がついて夫に渡す感謝状
チャイム鳴る一・二の三でどっこいしょ
苦しさを励ます星を亡母と見る

倉吉市 藤井 美津恵

小春日に散歩する人走る人
地図広げ旅もいいなと独り言
土手の草日増しに青く日足延び
小春日に鴨も並んで日向ぼこ

倉吉市 前田 喜美子

遅い人みんな待つて旅のバス
仏壇に正座出来ない脛の鬱
火付け役噂ばなしに尾ひれ付け
どんぶりを一つ洗つてすます昼

米子市 加藤 正二

ドクターに病名を聞きほつとする
川柳でチクリ心に穴を開け
老い一人口が勝手に喋り出す
約束を破つた妻の十三忌

米子市 野川 宣子

粘り物食べてチャンスに掛けてみる
今日もまた孫の涙が粘り勝つ
きらきらの石女心をもて遊ぶ
遅咲きもキラリ個性を持つている

米子市 田村 周子

孫たちが帰りほっこり二人きり
明日もあり明後日とは限らない
喧嘩して距離をおいては元のさや
散歩道春の野草が待っている

米子市 見山 温子

春日和干した布団に猫が居る
ありがとうほっこりさせるいい言葉
孫の賀状ほっこりさせる虎か猫
花便り黄砂も共にやって来る

米子市 後藤 宏之

つやつぱいうわさばなしに耳を立て
痛いところかれて逆に強く出る
浅学の我もよき師にめぐまれて
永続が会社の社是であつたけど

鳥取県 飯野 菖子

ほっこりと春の陽気に一万歩
噂など気にしませんと耳は言う
見直せば雑草すらも美しい
買物は値引きのタイム待つて行く

鳥取県 岡村孝明

グリーン車の予約嬉しい二人旅
縄のれん楽しみながら税払い
春大根自慢している長い脚
春よ春野にも畑にも花盛り

鳥取県 西谷悦子

薄化粧ほっこり誰に会うでなく
背伸びするぎりぎりの線引いておく
くつ下を脱いで素足に賭けてみる
またひとつどこか壊れてゆく焦り

鳥取県 吉野いさお

諦めて取り直しするダイエット
孫の手が届きはじめて金魚鉢
見破った笑顔に潜む下心
飼猫が思わず逃げる厚化粧

鳥取県 斉尾くにこ

ただいまのドアへ妖しさ脱ぎ捨てて
お叱りを貰ったわたし付箋つけ
丸くないわたしを入れる金魚鉢
ときめきのチャンスだあしたへとジャンプ

鳥取県 橋谷静江

寒椿咲いて心が弾みだす
春目ざめ寒の戻りに縮こまる
杉などに負けてはおれぬ花粉症
ストレスへグランドゴルフ調子良い

鳥取県 岩崎和子

雨戸閉め夜がまたくる歌つてる
塀の中甘夏みかん光つてた
差し花のしおれた茎を摘んでやる
オ・ソレミオ下手なピアノで歌つてる

鳥取県 加賀田志延

路駐車を黄砂が染めて春になる
水くれと鉢が声出す陽の長さ
ひと安心強い群れにもビリは居る
耳なれた声ばかりでは進めない

鳥取県 鳥越鬼一

雨あがり水たまりにも青い空
火を吹いておこす技術が消滅し
人生七十近來稀でなし
国会に遅参議員という新語

鳥取県 岡本幸枝

指先に叱咤をかける司令塔
健やかな舌が味覚を選び分ける
まな板の鯉も奇跡の春を待つ
急ぐ日は会釈だけでも交したい

鳥取県 田口清帆

買うほうが安い野菜に鉤を振る
波瀾万丈昭和のどん底懐かしい
また一つ疑念が宿る温い風
満開のあとのやさしい花吹雪

鳥取県 下田 茂登子

縁と言う絆があつて別れない
憧れは一人暮しがしてみたい
逝つてから恋し哀しい夫婦仲
紙おむつしている老婆口達者

松江市 松浦 登志子

釣り針の先で魚も遊んでる
単純な生き物だった男達

気に入りの写真持参で美容院
料理より美味しい話続けます

松江市 山根 邦代

朝寝して慌てることのない暮らし
惨いことテレビに文句言つたとて
塩梅でおいしいと言う目分量
手の届く範囲わたしの小宇宙

松江市 錦織 禮子

ピンポンと無用の用がやって来た
腹話術お巡りさんの汗光る
体験を一つ重ねて子の熱気
今日だけは精一杯のお洒落する

松江市 相見 柳歩

始めから火の粉は覚悟恋の道
初恋はアイス最中のような味
友達と言えば彼女は否定する
油断すると筆でくすぐる君だから

雲南市 菅田 かつ子

掃除機も疲れましたと動かない
こんな日は萎びた脳に喝を入れ
騙されたふりして今日も恙なし
頼られて時には重い日もあるよ

雲南市 渡部 好榮

どんぐりを並べただけの事でした
この辺でみんな話してくれますか
昼寝する吾れにひと声ホーホケキヨ
生半可な天の声など聞きません

雲南市 福岡 博利

生き残る昭和の戦友が居なくなり
肝心なことは忘れた日記帖
まだ俺に余力があつた爪のびる
この白髪神のほうびと春の風

雲南市 武島 ちよえ

丸腰で皆陽気な花の下
親切だ嗜んで含めて飲み込ませ
頬張った餅ひと口へ鳴る電話
風船のふくらみ過ぎたのが怖い

安来市 原 煩惱児

出雲弁真似て笑顔の孫の所作
出雲弁で爺もからかう孫娘
出雲弁で可愛い孫を抱きしめる
出雲弁で通じる絆爺と孫

美作市 小林 妻子

香南市 近 森 功

鉄砲玉は来ぬが米寿の坂は急
もう一度虎が回れば百歳だ

落第も正解もなし半世紀

取り換えの出来るところは皆換えた

竹原市 國 實 力

卵かけごはんですます旅帰り

いい親かどうかわが子にアンケート

雨傘のそれは重たく感じる日

方言を無理にころしている団地

竹原市 六 田 半 徳

画伯かく玉ネギばかり四十年

年金と普天間のこと五月末

留守居して妻の働き思い知る

梅の木に春告鳥の気配する

竹原市 土 井 輝 恵

介護して貰うよ遠慮しないから

この度の選挙は夫も酔っていた

私もおんなじですと愚痴を聞く

孝行が出来なかったと通夜の席

香南市 桑 名 孝 雄

サクラサクよかったのうと八百よろず

いつまで飲める一夜ひとよに賭けている

ケイタイが鳴ってますよと美人から

ソチ五輪生きる目安にしておこう

長電話悲鳴を上げる鍋の底

椅子一つねらう候補のマニフェスト

父さんの癒しの場です縄のれん

母さんの埋蔵金が物を言い

唐津市 岩 崎 實

よい返事どこかが痛む破目となる

何よりもお金がいいよそうしとこ

ひよ鳥に追い回されて目白二羽

くもっても庭に小鳥はきてくれる

唐津市 吉 富 節 子

お供えにチョコ沢山の人氣夫

自慢肌皺と染みとが同居する

財産ゼロ子に書いておこ感謝状

焼芋の声で青春甦る

唐津市 北 村 松 風

湧く疑問すぐに尋ねる園児たち

寿の箸が欠伸の長祝辞

ボーリング八十路のボール溝転ぶ

デイケア後期高齢和む顔

北九州市 小 松 紀 子

小さいなア自分の器気ずかさ

まあいいか負けて勝つのも処世術

どっこいしょ家に帰ると口に出る

無駄なもの何もなかった我が人生

シドニー 三谷 たん吉

基地なんぞ日本に不要と何故言わぬ

目を覚まし負け犬根性今捨て

ひとごとに体張るよな国は無い

基地やめて辞任してこそ花道だ

メルボルン 藤原 ポン吉

リコールが必要なのは経営者

最先端走り過ぎたら崖っぷち

次世代も信頼あつて新技術

よく見れば光るブランドシミだらけ

札幌市 佐藤 登美子

春陽気猫と婚活競いあい

感情を出して女にある打算

真つ直ぐに進んでほしい親心

満開の桜へ風も嫉妬する

網走市 角谷 幸甚

あの人に会うと決めてるイヤリング

四コマ目漫画の中にはくが居る

愛さない分だけ妻の無頓着

笏のごとケータイ拝む若者ら

栃木市 岡野 すみれ

逃げて来た顔にはあらず嬉しそう

お願いね何度も言われかけたかな

凡人が好きだといって逝った父

意地に生き意地で守った土地も消え

東京都 井上 つよし

すぐ終る猫の額の庭掃除

思ひ出す三人掛けの三等車

貧困と腐敗戦の芽を育て

わたくしが決めるきめると先延ばし

昭島市 野口 忠

本丸を狙う特捜眠らない

沈む陽を山懷がイッキ飲み

懷の具合で店を選ぶデート

手の荒れを氣遣う義母の目が温い

横浜市 巖田 かず枝

ありがとう笑顔引き出す言葉です

誘ったら割り勘なんて言えません

頷いているが話を聞いてない

素人の剪定庭木困ってる

藤沢市 加藤 スズコ

春陽ざし直立不動アマリリス

ひな祭り笑い転げるひなあられ

降りやまぬこの世淨めるばたん雪

泣き笑い世を生きぬいて老いの春

佐渡市 高野 不二

二つ三つ若く言うたら当たった

成績はもう通らないクラス会

日記には読まれても良い事を書く

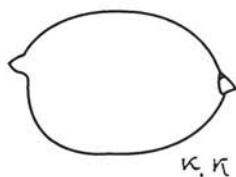
食うだけはある年金を自慢する

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 七七〇句)



「椅子」 三宅保州 選

夜桜へ母を乗せてる車椅子
 総理の椅子一年毎に張り替える
 ハローワーク椅子取りゲームさながらに
 心地良い椅子で草食系育つ
 剛腕が椅子に胡座を搔いている
 時々昭和の椅子に掛けてみる
 椅子席と聞いて出席することに
 椅子の上写真が座る同期会
 踏台に使い重宝してる椅子
 玄関の椅子でお靴をさあどろどろ
 うたた寝を許すベンチに陽が当たると
 長椅子のかたちに眠る昼下がり
 指定席妻と他人の様に掛け
 傾いた椅子傾いて釘を打つ
 父の椅子少し傾きかけている

河内長野市 針生 和代
 大阪市 古今堂蕉子
 尼崎市 長浜 美籠
 三田市 上垣キヨミ
 弘前市 福士 慕情
 羽曳野市 吉村久仁雄
 堺市 柿花 和夫
 豊中市 江見 見清
 三田市 石原 歳子
 西宮市 亀岡 哲子
 松山市 高橋 宏臣
 西宮市 吉井菜々子
 静岡県 蘭田 猿香
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 紀の川市 北山 絹子

「椅子」 高田美代子 選

頂上の椅子も楽ではないらしい
 車椅子に道をゆずった春の風
 人生のドラマが駅の椅子にある
 本堂もやがて全席椅子になる
 夕暮れのベンチ帽子の忘れ物
 椅子とりゲームその内みんないなくなり
 窓際の椅子が優しいことを言う
 天国に予約してます夫婦椅子
 高望みしていた椅子の勘違い
 社長室椅子にしゃべらしたい秘密
 むずかしい話はない丸い椅子
 指定席妻と他人のように掛け
 玉座から折りたたみである格差
 馬の椅子ハイドウドウと孫は騎手
 いざという時の出口に近い椅子

高知市 小川てるみ
 島根県 伊藤 寿美
 弘前市 高橋 岳水
 鳥取市 岸本 宏章
 藤井寺市 若松 雅枝
 八尾市 村上ミツ子
 出雲市 伊藤 玲子
 鳥取市 永原 昌鼓
 高槻市 執行 稲子
 神戸市 田中 章子
 西宮市 牧渕富喜子
 静岡県 蘭田 猿香
 堺市 羽田野洋介
 藤井寺市 増井ヨシ枝
 愛知県 早川 遡行

キッチンにひとりて泣いた椅子がある	藤井寺市	太田扶美代
キッチンの近くに私坐る椅子	鳥取県	岩崎 和子
ロイヤルボックスみんな静かで美しい	大阪市	柴本ばつは
充電をしに行く映画館の椅子	弘前市	高瀬 霜石
3Dを観る椅子だけを先に買う	大阪市	岩崎 公誠
あの日からあなたの椅子は空いたまま	京都市	榎本 宏子
辛抱の形にくぼむ椅子布団	茨木市	藤井 正雄
木の椅子が小鳥の歌を覚えてる	和歌山市	古久保和子
お気に入りの椅子でカボチャの馬車等待つ	和歌山市	武本 碧
車椅子押しで命の重さ知る	東京都	清原 悦子
いい椅子もあった最後は車椅子	箕面市	寺井 柳童
車椅子渡り切るまで見届ける	京都府	松本としこ
椅子取りゲーム無縁に生きてきた誇り	河内長野市	村上 直樹
椅子とりゲームその内みんないなくなる	八尾市	村上ミツ子
奪い合う果てに孤独の椅子がある	大阪市	升成 好
皆勤で肘掛けのない椅子を去る	三田市	北野 哲男
栄転の椅子転勤と言うおまけ	大阪市	小谷 集一
昇進の椅子は回してから座る	田辺市	岡本 昇
この椅子は私にびたり隅が好き	大阪市	榎本日の出
窓際の椅子が優しいことを言う	出雲市	伊藤 玲子
引き寄せて内緒はなしの好きな椅子	芦屋市	黒田 能子
頂点の椅子でメガネの度が進む	宇部市	高山 清子
否定肯定どっちつかずのパイプ椅子	大和郡山市	坊農 柳弘

廃校の小さな椅子がなつかしい	寝屋川市	小谷 滋彦
リビングの椅子は瞑想癖をもつ	藤井寺市	太田扶美代
定年後茶の間にできた僕の椅子	大阪市	鶴田 遠野
椅子席がガランとして大相撲	日高市	根岸 方子
居酒屋に僕を待つてる椅子がある	大阪市	小谷 集一
ふかふかの椅子がわたしを離さない	青森県	松山 芳生
耳寄りな話へきしみ出した椅子	神戸市	山口 美穂
背もたれの大きな椅子で夢をみる	枚方市	小林 わこ
椅子なしで慌てて食べた待ち合わせ	河内長野市	植村 喜代
古民家に似合う古木の椅子の艶	今治市	渡邊伊津志
抱くように古いソファアに癒される	堺 市	西村りつえ
窓際の椅子へ遊びにくるカラス	松江市	津川 紫晃
桂浜龍馬も椅子が欲しい齡	尼崎市	軸丸 勝巳
緋ろうか蹴ろうか椅子が揺れている	鳥取市	倉益 一瑠
切り株を椅子替りにし握り飯	河内長野市	水谷 正子
椅子空けて待つミヨちゃんの良い香り	鳥取市	加藤 茶人
龍宮の椅子でどきどきするデート	香芝市	大内 朝子
今日の疲れ流してくれる風呂の椅子	京都市	榎本 宏子
譲り合う椅子がボツンと空いたまま	大和高田市	鍛原 千里
起立札 昨日と違う椅子の音	羽曳野市	酒井 一壺
時々昭和の椅子に掛けてみる	羽曳野市	吉村久仁雄
うたた寝を許すベンチに陽が当たる	松山市	高橋 宏臣
重役の椅子には遠き手弁当	枚方市	二宮 山久

良い知らせを受けた椅子から弾みだす
 奪い取る椅子はいつでも揺れている
 組ろうか蹴ろうか椅子が揺れている
 譲り合う椅子がボツンと空いたまま
 叱られる椅子は浅めにかけている
 気乗りせぬ話は腰を浅く掛け
 椅子浅くかけてチャンスを待っている
 辞退した椅子にライバル座っている
 左遷から戻った僕に椅子がない
 前任者どんな思いで去った椅子
 椅子一つ減らし私が弾かれる
 一言が過ぎたのか椅子棒に振る
 いつから狙った椅子を狙われる
 世の中が見えないようにできた椅子
 真ん中に嫌味な椅子が置いてある
 高望みしていた椅子の勘違い
 倚りかかる椅子が未だに見つからず
 器量よりでかい椅子から転げ落ち
 泣ける椅子あると女は立ち直る
 手を挙げてごらんこの椅子欲しい人

秀句

海南市	小谷	小雪
枚方市	伊達	郁夫
鳥取市	倉益	一瑞
大和高田市	鍛原	千里
岸和田市	土橋	房枝
大阪府	米澤	俣子
羽曳野市	徳山みつこ	
岸和田市	雪本	珠子
藤井寺市	鈴木いさお	
泉佐野市	稲葉	洋
吹田市	太田	昭
寝屋川市	富山ルイ子	
府中市	藤岡ヒデコ	
樺原市	居谷真理子	
八王子市	播本	充子
高槻市	執行	稲子
さいたま市	星野	育子
吹田市	穴吹	尚士
阪南市	山本	柳昌
東京都	岸野あやめ	
大阪府	森田	明子
愛知県	早川	遡行
大阪市	谷口	義

辞退した椅子にライバル座っている
 鮭のぼる椅子とりゲームするように
 ばあちゃんがつもいねむりしてる椅子
 長椅子のかたに眠る昼下がり
 末席の椅子から飛んできた火の粉
 突然にドラマの変わる春の椅子
 お遊びの椅子とりゲームにも勝てず
 頂点の椅子へ勇気を試す風
 引き寄せて内緒はなしの好きな椅子
 傾いた椅子傾いて釘を打つ
 然るべき人 wait する椅子がある
 カッコよく蹴ったが未練残る椅子
 ベンキ塗りかえましたバツイチの椅子
 ゆずられた椅子に背骨が馴染まない
 先生になりたい人が座る椅子
 充電をしに行く映画館の椅子
 千円の椅子に請求書が届く
 叱られる椅子は浅めにかけている
 空いていた椅子に坐っただけのこと

秀句

岸和田市	雪本	珠子
黒石市	佐藤	古拙
和歌山県	森下よりこ	
西宮市	吉井菜々子	
東かがわ市	川崎ひかり	
美作市	大石あすなろ	
四條畷市	吉岡	修
海南市	堂上	泰女
芦屋市	黒田	能子
藤井寺市	鴨谷瑠美子	
阿波市	三浦千津子	
香南市	桑名	孝雄
西宮市	緒方美津子	
鳥取県	石谷美恵子	
鳥取市	土橋	螢
弘前市	高瀬	霜石
田辺市	大峠	可動
岸和田市	土橋	房枝
大阪市	谷口	義
八王子市	播本	充子
大阪市	佐藤	忠昭
羽曳野市	吉川	寿美

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

菰盆変哲もなくモ翁坐し

寝台を辞して眉山樂しめり

涼しさは何処の末寺か峰に立ち

おばアさんの部屋で缺の音がする

掛軸が素直に垂れて寒いこと

米の値も知らずヒューマニズム称え

香港は手足のもげた蟹に似る

水兵に太平洋はうちの海

気兼しては打水さへ出来ず(時局私観)

おっさんも翼賛かいと風呂で会ひ

スウィッチをどういひませう新世帯(英語排撃を笑ふ)

日本髪悠然として脊が低し

莫迦は莫迦だが哲学もかじり

苦学した博士はすぐに金のこと

還暦もいいが家賃をまだ払ひ

時鳥から俗物と見くびられ

葱赤蕪奥様の短歌

女社長うっかり僕と云っちまひ

二月の寒さ土佐衛門と巡査

残置燈女給鮎のやうに消え

我々が今食う米へ閣議也

全快だだが十一貫と何百目

アルミニウムかアハハと戎さん笑ひ

買溜めに嫁の里まで手を廻はし

愛染帖

新家 完司 選

藤井寺市 鈴木いさお

マザコンと言われようとも母が好き

(評) その言や良しー我が母を「好き」と言うのにテレも遠慮も不要。幼い頃の純粹な気持ちを終生持ち続ける人は極めて少ない。

倉吉市 野口 節子

新ネタが次々出ます物忘れ

(評) 想定外のことが次々起こる「物忘れ」。深刻に捉えると意気消沈してしまうが、「新ネタ」と笑えば、人生の調味料になる。

堺市 加島 由一

握力が落ちてお椀の蓋とれず

(評) 握力や腕力にものを言わせて取るものではないが、歳を重ねるということは、歯がゆい思いをすることが多くなるということ。

豊中市 荒巻 夢

カラーゲンよりも効きます恋心

(評) 酒は三時間ほどで醒める。サプリメントは効き目が不明。こころにも身体にも若々しい活力を与えてくれるのは「恋心」。

歯磨きのチューブ夫婦で絞り出す

(評) 仲の良いことである。エコライフは、家族の誰かが「面倒！」と思うと成り立たない。節約したお金で回転寿司に行くのだ。

和歌山市 磯部 義雄
大阪市 大川 桃花

貧乏も続いていると慣れてくる

(評) 何事も慣れると平気になるが、いちばん慣れ難いのが、贅沢を経験した後の貧乏。その変化に適応できなかった人は破産する。

宇部市 平田 実男

不景気をいとわず伸びる爪と髪

(評) 爪は自分で切ればいいが髪は面倒。理髪店主の話では、散髪する間隔が長くなっているらしい。やはり不景気のせいだろう。

河内長野市 梶原 弘光

怒ってる妻のうしろに虹が出た

(評) 怒っている相手の言葉を真剣に聞いていれば、虹に気付くはずがない。「あつ、虹！」などと言えば、火に油を注ぐことになる。

羽曳野市 吉川 寿美

補聴器で福祉切り捨て聞いている

(評) 「こども手」や「高校無償化」などにケチをつけるつもりはさらさらないが、高齢者に対する福祉も忘れないうちに願いたい。

浜松市 岡田 史郎

菜園のモグラに退去令を出す

ほんとうにちくりと痛い注射針

初恋のドライフラワー捨てられず

過去帳にいずれ納まる嫁姑
美しい過去だけ貼った写真帳

米子市 後藤美恵子
榎原市 安土 理恵

三月三日 雛人形は箱のまま

三月三日 ひとりて食べるちらし寿司

三月三日 おんな独りの白ワイン

三田市 堀 正和

札束を手にするまでは反対派

シヤツぐらいちゃんとスボンへ入れなさい
八王子市 川名 洋子

やつと来た春一番にはつとする

畑に戻りたい暇な滑走路

河内長野市 松岡 篤

複雑な機能は要らん安くして

一度でも悩んでみたい贈与税

芦屋市 黒田 能子

痛いところとついつい下を向く

二種類のケーキ半分ずつ食べる

大阪市 伏見 雅明

久しぶりエノケンに合う名画館

ぼろぼろのコンサイスには借りがある

三田市 久保田千代

義母がいて桜がきれいだった頃

貴男への想い心にりんご剥く

奈良市 岩本 浩一

生姜湯を飲めどフトコロ寒いまま

鳥取市 高浜 勇

白魚のような指にも爪がある
ほっこりと我が家でトゲが抜けていく

大阪市 岩崎 玲子

坊さんのお経聞きつつ句をひねる
口下手の気持がわかる友が居る

大阪府 澤田 和重

お出掛けの妻の猫語に使われる
七十五歳もうウインクは似合わない

倉吉市 松本よしえ

ひよこ饅頭あたたま響るの可哀そう
甘酒に少しお酒を入れて飲む

堺市 奥 時雄

病癒え押し戴いて飲むビール
多い目の泡が不満の生ビール

橿原市 居谷真理子

アンチエイジング君は造花になるつもり
魂は憚りながら五分以上

弘前市 高瀬 霜石

人柄と仕事の出来は違います
葬式というにぎやかな大掃除

松江市 松浦登志子

ドライアイドライマウスにドライ脳
おとつと足があがつていませんよ

豊橋市 藤田 千休

いい女見ては妄想膨らませ
葬儀屋と寺が手くすねひく老後

大阪市 小泉ひさ乃

早朝の空気が好きなスニーカー
年金のお陰不況に三度食べ

大阪市 岩崎 公誠

本もののお経頼むとちと高い
牛井の縮んだ肉が気に入らぬ

鳥取県 細田 裕花

バッテリーサイン違いが増えてきた
あによめが亡母のコピーを口にする

弘前市 福士 慕情

倒産のビルを支えている礎石
まだ映るテレビ地デジが持つて行く

和歌山市 福本 英子

玉葱と替えたミシンがまだ動く
片付けが進まないのでもまだ近けぬ

京都市 都倉 求芽

種を蒔く日和に落ちた紅椿
住み分けてのどかな堀に亀と鯉

羽曳野市 吉村久仁雄

寄り道が足らぬと叱る万歩計
ししおどし水の汚れをコンと打つ

鳥取市 有沢せつ子

草もちが出回り母を愚ぼせる
懐かしい人に会いたく目をつむる

藤井寺市 津田シルク

何事も脳の指令が遅すぎる
麻痺したか風邪も花粉も通り過ぎ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

吹田市 太田 昭

就活の子がたこ焼きを買って来る
貧困率云々ケータイだけはあ

和歌山市 木本 朱夏

都落ちとは言うまいぞターン
海南北

香芝市 大内 朝子

煩惱が息吹き返す春の宵
枕方市

伊達 郁夫

仏壇に怒られそうな夢を見る
介護認定母に演技をつけている

三浦 強一

人肌の爛でテレビの小津映画
すき焼きは今もうれしいお献立

大阪市 笠嶋 惠美

しばらくは寒い寒いで動かない
くつ下の重ね履きして越した冬

加東市 中上千代子

食べ放題飲み放題で胃酸過多
これからは応用編で生きのびる

和歌山市 古久保和子

ロボットに宴会係出来ますか
三田市

北野 哲男

母だけにわかった髪を切る理由
米子市

政岡未延子

箕面市 広島 巴子
雛のように並んで夫婦日向ぼこ

鳥取市 平尾 菜美
つれ添った二人はつこり逝きたいね

大阪市 小谷 集一
体調を酒で占い医者要らず

枚方市 海老池 洋
常備薬の一つにしてる缶ビール

大阪市 井丸 昌紀
騙されるために彷徨うネオン街

八尾市 高杉 千歩
床暖でごろ寝気兼ねのない独り

河内長野市 坂上 淳司
現役の丸いポストが似合う町

尼崎市 春城 年代
長寿とや一族のことあれやこれ

河内長野市 山室 光弘
絨毯の厚みに財布気にかかる

鳥取市 吉田 弘子
草食系男子はいないバンクーバー

大阪市 太田としお
見る方が疲れてしまうカーリング

網走市 角谷 幸甚
参加するだけじゃ済まないメダル枷

豊中市 水野 黒兎
どこことなくおっとり刀めいて古稀

西宮市 緒方美津子
手袋のいる日いらぬ日春間近

河内長野市 木見谷孝代
春を待つ心じらしている羨

四條畷市 吉岡 修
年功と順番だけでここにいる

豊中市 安藤寿美子
片恋は別れ話をせんですむ

堺市 大隅 克博
出来るだけ食器使わぬ妻の留守守

大阪市 津村志華子
嫁がせて幸せだらうか無事だらうか

鳥取市 夏目 一粋
一人だと貧乏ゆすりしたくなる

羽曳野市 徳山みつこ
ほつこりとお芋を焼いてエコライフ

羽曳野市 酒井 一壺
勢いに乗ると聞こえぬ民の声

大阪市 古今堂蕉子
口から先生まれ最後に口が死ぬ

鳥取県 深田 俱久
端っこで聞き役これも親譲り

東かがわ市 川崎ひかり
リコールをしたい仲人墓の中

奈良市 矢野 良一
琴線に触れる昭和の流行歌

京都府 松本としこ
とりあえず目の前のこと片付ける

泉佐野市 稲葉 洋
右翼かと揶揄されながら日章旗

鳥取県 石谷美恵子
竹を踏みクルミ握って百めざす

堺市 荻野 像山
なつかない猫に餌だけ取られてる

河内長野市 谷 久美子
玄関で帰らぬ娘待ちに仁王立ち

高槻市 片山かずお
妻の留守のどかに時が過ぎてゆく

弘前市 今 愁女
国会の野次罵声にはテレビ切る

松江市 津川 紫晃
なんとなく責任者だと判る顔

神戸市 田中 章子
転居先梅はしつかり根を張った

枚方市 寺川 弘一
ばあちゃんは儉約孫はエコと言う

長岡京市 山田 葉子
かぶら蒸ボワンと湯気に包まれる

鳥取県 岡本 幸枝
孫にやる親が喜ぶのし袋

唐津市 山口 高明
清正の城下に赤子捨てに来る

西宮市 泉水 冴子
糠床に愚痴もいっしょに混ぜている

姫路市 古川 奮水
山菜摘み駐車スペース見付からず

大阪市 森田 明子
私に足りないものは塩コシヨウ

未使用の脳もハートも持っている
島取県 斉尾くにこ

塩引きの鮭を風干し北の知恵
大阪府 田浦 實

隅に居てもやはり目立っている美人
豊中市 松尾美智代

喧嘩せぬ程度に酒を注いでやる
島取市 武田 帆雀

チケツトが二枚で相手見付からぬ
藤井寺市 若松 雅枝

酒代の愚痴は言わない妻も好き
高槻市 乙倉 武史

中古車が並んでいます子の家庭
米子市 小塩智加恵

きつちりと生えてふらふらする昆布
池田市 上山 堅坊

下痢止めを飲んで便秘に悩まされ
堺市 矢倉 五月

傍らにいと分からぬ妻の価値
神戸市 山口 光久

陽だまりの老友に向く黄水仙
篠山市 沢山 啓子

悪いとは知りつつ金と握手する
島取市 中宇地秀四

春一番恨み辛みは棄てましよう
西宮市 吉井菜々子

一万歩あるいた所で迎え呼ぶ
三田市 福田 好文

改めて子の歳聞いて老いを知る
河内長野市 水谷 正子

大根が上手に煮えて老い進む
唐津市 市丸 晴翠

民主党百花繚乱期待薄
大阪府 初山 隆盛

朝風呂は昭和育ちは気が咎め
大阪市 吉内タカ子

異常気象季語の見直し迫られる
岸和田市 井伊 東吉

逃げ腰の弱気見られて吠えられる
島取県 加賀田志延

ヨイドンなんといそがし力ニツアー
香南市 桑名 孝雄

神様の抽選機からもれている
箕面市 出口セツ子

外人の介護に頼る長寿国
羽曳野市 森下 一知

鳥帰る空に落書きするように
八尾市 中島 春江

褒めあつて井戸端会議春うつらら
尼崎市 市坪 武臣

振り向くな死に神おいでおいでする
紀の川市 宇野 幹子

年金をどんどん食べる慶弔費
弘前市 高橋 岳水

と忘れが続きしぼんだ力こぶ
島取市 倉益 一瑠

ああしんと満腹感に頼ゆるむ
寝屋川市 小谷 滋彦

今日の嘘きのうのうそを消していく
八尾市 村上ミツ子

オレオレとノックもせずに詐欺ぐる
河内長野市 村上 直樹

一生の天職白い割烹着
島取市 岸本 孝子

誉め殺しボディーブローが効いてきた
神戸市 山崎 武彦

競い合い葉見せ合う喜寿の会
大阪府 野田 栄呼

人も神も信じて生きることにする
西予市 黒田 茂代

煙草の輪吐けたむかしが嘘のよう
黒石市 佐藤 古拙

力一杯もまれ踏まれて麵の味
島取県 大塚美代子

大地震地球の皺が伸び縮み
八尾市 前田 紀雄

ゴミ置き場の布団に猫が日向ぼこ
寝屋川市 森 茜

春風に冬着いっぱい吊るしてる
島取県 岩崎 和子

自画像のシミもきつちり描いてみる
西宮市 藤本 直

一日に一度死の事考える
大阪府 片岡 松枝

誹風柳多留一篇研究 57

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦
清 博 美

433 さがり取御用爰だとつれて来る

山口 さがりとり【下取】は、売掛金を取りに行くこと。

掛け取りに來た人間を御用聞きの小僧が「この家だ」などと案内して連れてきたのである。一般の掛け取りであれば、相手の家は知れているから近所の御用に聞くまでもないが、多分この下がり取りは吉原からの借金取りであろう。遊興費のつけを取りに來たのである。

下り取り見世へ来るとハひどいやつ

明六松一

さがり取りおふくろと見てつけあがり

清 尋て爰へ来る人は下カリ取り
賛。しかし、この御用、余計なことをしてくれたと、後でこつぴどく呵られたかもしれない。

安九仁二
五〇三

434 蓮池をぐるぐる回り廻る安いきやく

山口 蓮池はご存じ上野不忍池のことである。弁天堂へ行く橋の両側に男女の密会に使われる出合い茶屋があったという。川柳には御殿女中や後家など沢山のカプルの出合いが詠まれているが、この二人はどうしたことであろう。茶屋に入る金がないので、茶代の安い所を探しているのだろうか。あるいは二

人で歩くだけか。下男下女などの出合いかもしれない。

しのハずの茶屋で忍んだ事をする

田草一三二

忍び出に不忍の蓮見て戻り

百合華八

小栗 賛。それにしても何をしているのだらうという礎説の疑問尤も。一軒一軒値段を聞いて回るなど考えにくいのだが……。予約をしないで飛び込むというフリの客を「安い客」と言つたものか。

伊吹 賛。出合茶屋の料金体系がわからないが、時間制なら外で時間稼ぎをしているのだらうか？

山田 文字通り蓮を見に來た客。あとで蓮飯でも食べるのだろうか、出合客に比べればはるかに「安い客」であらう。

ねないのハ銭にならぬと池の茶や

安七礼四

清 山田説賛。風流な御仁か。

435 へどをふみく井慶ハいのるなり

山口 謡曲『船弁慶』を句に仕立てたものである。梶原景時の讒言により頼朝に追われた義経一行が大物の浦から船出すると海上に知盛の幽霊が現れる。嵐を巻き起こして義経に

打ち掛かるが、弁慶は「打ち物業にて叶まじと数珠をさらさらと押し揉んで」これを見事に調伏する。

一行がこの風で船酔いになって反吐を吐いただろうと想像、弁慶はこの反吐を踏みながら折つたろうといういかにも川柳的な想像句である。

あ、らめつらしやハこわい土左衛もん

一四二

清 賛。やれたつなぐて武蔵珠数をすり 二四三〇

436 御産婦を証人にするほとゝぎす

山口 ほとゝぎす聞かぬといへば恥のやう

二四〇

右の句があるように、夏の到来を告げる時鳥の初音は江戸の人間にほとんど珍重されたようである。初鰯を食べて、時鳥の声を聞かないと、江戸っ子の沽券にかかわるのである。

主題句の場合、確かに時鳥の初音を聞いたのだが、人に空耳だと言われると困るので、産婦に証人になつてもらうべく確認したのである。産婦に付き添っている下女などはよく居眠りをするので、当てにはならず、なかなか眠つかない産婦を証人にしたのである。

御産婦と敬つてゐるから武家屋敷や大家での場面であろう。

出て見れハ跡下かたも無いほとゝぎす

安二七五

はつもの、てつへんになるほとゝぎす

天五満一

小栗 賛。貴人の産婦としないと解釈できない句ではないので、軽い敬称(ごさんぶさん)程度としてよいのかもしれぬ。

増田 賛。夜伽と時鳥。

夜伽同士はつ音のろんでねたが知れ

二三三〇乙

清 賛。

437 いたふりであるふと妾逢ひに出る

小栗 いたぶるは、ひどく振る舞うの意から転じて、さまざまの事を言いかけて物をむさばり取る。ねたる。せびる。(江)

お妾のところへ来訪者があつたので、「また金をせびりに来たのだらう」と言いながら逢ひに出て行く様子。相手が誰かが問題だが、「妾が兄」にしてみらえないやくざ者の兄弟あたりか。柳雨「吉原志」は「是も与三郎式の男らしい」としておられるが、どうであらうか。

又まけたそうだと妾あひに出る 安元義 8

増田 賛。兄弟や元の情人。

清 賛。

438 此しぎでござると巨燵ものをいひ

小栗 仕儀は、なりゆき。工合。次第。(江)「炬燵ものを言い」は、炬燵に潜り込んで、首だけ出してものを言っている光景をいうのであらう。

人間の兒からだハこたつ也

一〇一三

状況をはつきり示す措辞がないが、柳雨「年中行事」に大晦日の仮病の句として並べられているに従う。病気で寝込んでゐるふりをして「こんな工合でございますので、しばらくご容赦を」と言い訳をしている図。

大晦日巨燵か破れかぶれ言イ

夜着かけたこたつから出て言ひのべる

最上初三

増田 賛。ただ情況は「大晦日の仮病」とは特定したくない気がする。所在のない冬こもりとしても柳味はあると思うので、

山口 同右。来客者に「面目ない」という状況であれば色々な場面。

清 やはり、暮れの類型句ではなからうか。着る物ありません、という状態。

届く

波多野五楽庵



遊ぶのは今だ八十に手が届く
百万本の薔薇より愛をたつぷりと
達筆に度肝を抜かず便り来る
風花は天から届く母の文
一枚の葉書まで届く思い遣り
末端の本音が届く目安箱
手の届く程度の夢にしておこう
花びらも添えて届いた愛一途
絵手紙の蝶に春風届けられ
手の届く願いがあつて生きている
お袋は季節を詰めた宅配便
百本のバラ届く日待っている
極楽の亡夫に届けるラブソング
いずれ手の届かぬ子らの寝顔見る
目が届く位置でいたずらさせておく
ドナーから善意が連れて来た命
結び目で母だと分かる新茶着く
花屋から気障なおとこの贈りもの
故郷の祭りをつめた荷が届く
真実の愛が届いたホワイトデー
謝られても傷の深さに届かない
誕生日届いた花に教えられ

雅 碧 黒 雅 深 順 千 敏 大 奮 節 彩 正 牙 勝 柳 高 寿 扶 雅
枝 美 美 雪 子 歩 子 水 子 子 雄 子 視 弘 明 美 代 枝

手の届くところにあつた小さい幸
猫年もあつたかしらと年賀状
行き届きすぎても何か素気ない
娘より届く土産が着払い
嬉しい便り届き一日暖かい
千の風届けてくれる愛の檄
刃こぼれのハートへ届く子のメール
山彦は心の奥を届かせる
流暢にくちびる動く愛届く
この思い届いてほしい灯を点す
梅干が届いて母へ借を積む
諫言が天狗の鼻に届かない
さようならと届く五文字が手厳しい
新米が届き故里炊き上がる
花占い思いが届きますように
佳
真心を届ける人のみな無口
輪から輪へ届く花見の紙コップ
幸せの届くところで転ぶ癖
声届くところに僕は置かれてる
苦労した数だけ届く天の慈悲
人
異かも知れぬまっ赤なバラが届く
地
指先まで届くちちはの思い
天
落ち椿ことり別れの文届く
軸
一番欲しい人から届く涙雨

雅 碧 黒 雅 深 順 千 敏 大 奮 節 彩 正 牙 勝 柳 高 寿 扶 雅
枝 美 美 雪 子 歩 子 水 子 子 雄 子 視 弘 明 美 代 枝

修正

三島 淞丘選



自分史のあちらこちらに消した跡
修正の出来ぬひとこと眠らせぬ
修正液がすべて知ってる脳の錆び
きつちりと下方修正する預金
修正に修正が要るマニフェスト
修正を何度重ねた卒寿坂
てにをはを直してみると血が通う
修正が過ぎる原型とどめない
何遍も軌道修正して夫婦
ポストまで修正液を離さない
修正はそのちと夫婦互い見る
軌道修正しないと妻に見放され
傷ついた心へ修正液たらす
論しても修正きかぬ古い脳
修正をしつつ夫婦の顔になる
師の筆の修正待つて絵が生きる
頑固さがとれて孫にも気に入られ
投票所修正液は置いてない
修正を重ね重ねて老いを生き
答弁の修正本音更に出る
老い案じ小さくなった飯茶碗
バーゲンの値札修正欄がある

雅 公 菜 堅 勝 克 俱 美 千 巴 満 敏 ま 孔 孝 弘 幸 四 晴 銀
明 子 摘 洋 視 久 智 代 子 子 子 子 一 子 郎 翠 波

生き上手修正液が手放せぬ
一徹の父のピンクに立ち直る

修正液の屑にまみれて生きている

修正案出せば出すほどケチがつき

脱サラでまだ修正が利く若さ

修正の効かない髻で土俵去る

修正でお咎めなしの贈与税

原稿は6日消しゴム離せない

お見合いへ写真と同じ女ですか

修正液も白紙には戻れない

不協和音修正しては生きている

納得のいくまで直す青写真

失恋へ修正液を塗りたくる

針金に逆らいもせず鉢の松

家訓にも少し手直し要る老舗

返信は添削されたラブレター

代わり映えせんのバフを叩いてる

昼会った人と思えぬ夜の蝶

低くして下さいばくの跳び箱は

サクラサク方へ修正した進路

修正が効けばあの日のあの出会い

修正の出来な昭和历史の汚点

消しゴムも修正液も効かぬ過去

修正の効くうち脳のストレッチ

富喜子

幹子

蜂朗

葉子

義雄

あずま

裕之

千歩

賢子

柳弘

悦子

慕情

朝子

茶子

哲男

政勝

像山

時雄

霜石

千代子

志延

ちかし

天

軸

修

ていよてい

山本 蛙城選



価値観の多様化が生む離婚劇

動物を食べる習慣とさまざま

さまざま祈りへ月は丸くなる

さまざま生き方を知る広辞苑

幾万の鎮魂曲する花筏

諸語を秘めて静かな男の背

ゴシップで人気呼ぶ人消える人

さまざまドラマを知っている枕

夜叉菩薩とさまざまな面持つ女房

さまざまな生き方あるが俺は俺

さまざまな悩みを抱いて自転する

さまざまな愛が流れる母の川

そここの人に氣を揉む花時計

歯科内科外科とさまざま行く日課

さまざまに揺れる総理の軽い口

同じよう育て個性の違う子ら

さまざまな角度に美女は動かない

さまざまな出会い見てきた無人駅

そんな日もあるさタロット凶が出る

さまざまに生きて柩の行儀よさ

反応を楽しんでいる赤い靴

おれおれの詐欺も手をかえ品をかえ

マニフェストあれもこれもと盛りすぎた

さまざまな人生先は唯ひとつ

さまざまな苦労を耐えて今を生き

お化粧もさまざまな謎は女から

さまざまな過去は忘れて翔んでいる

とまり木で歌う男の生き様よ

さまざまな暮らしの中にある自由

さまざまに言い方替えて逃げ回る

集うたがそれぞれ腹の探り合い

さまざまな癪面白く落書きよ

賞味期限まで安売りで分ち合い

さまざまな色で春待つランドセル

さまざまな自由になげん個人主義

喜ばすつもりで老後を試される

さまざまなまさが起きるこの地球

さまざまなまさが起きるこの地球

色即是空酒と女とさまざまに

大臣が好き放題を言っている

背景はさまざまなそとした墓碑

さまざまな風と馴染んで生きのびる

アイドルのコピーミナミは多色刷り

日替りでさまざまな夢見れる才

ダビンチもミケランジェロもひとりもの

不揃いのリングの中に夢がある

句座冥利個性豊かな呼名聞く

句座冥利個性豊かな呼名聞く

五月

一壺

四郎

キヨミ

茶子

ミツ子

准一

章司

典子

弘風

螢

康子

かつ子

忠子

柳弘

正和

美籠

朝子

俣子

蕉子

霜石

天

軸

修

初歩教室

題一虹

鈴木公弘

端的に申せば、馴染みがあつて焦点を合わせにくい「題」ほど、どのような場面を設定し、どのような感情移入をして表現するかが、作品としての成否を握るカギとなります。月並みな課題ゆえに安易になりがちな集中力をどう高めるかが問われるということです。虹はそうした観点から出題しました。

【もっと推こつてほしかった句】

原 五月晴七色の橋くぐる鯉

弘 秦

添 五月晴れ七色の橋くぐる鯉

七色といつて虹を連想させる仕立ては評価します。ただし、季語としての五月晴れは新暦六月の晴天を指します。川柳は「今を描く」原則がありますので、季節を入れる場合には留意してください。

原 混沌の世に虹をかけるのは誰

宏 之

添 混沌の世に虹かけるのは誰だ

原句は合計十七文字の句でしたが、575のリズムを壊してまで描くほどの意味はない

ように思います。また、余韻づくりとして用いたと思われる「誰」という問いも、締めくくりにかけてきたため、語気が強い割に未完成的の印象を残しています。いまいし工夫をしてみてください。

原 七色の大きな弓型虹流れ

ミヨノ

添 七色の大きな弓の虹流れ

原句は中8でした。

原 うたかたの虹の如しか散る桜

いさお

添 うたかたの虹の如くか散る桜

桜の句になつてしまいました。

原 窓越しの母の涙に虹もかれ

なつみ

添 窓越しの母の涙に虹も濡れ

虹が濡れるという表現は、涙にも掛かつていて、面白いです。

原 拉致された友にみせたい故郷の虹

彦

添 拉致された友にみせたい国の虹

彦

原 汗の分重きメタルや虹いろに

俊子

添 汗吸つて重いメタルの虹のいろ

俊子

：分という描き方は説明になります。

原 合格の音きく心虹色に

玲子

添 合格の音きく心虹色に

玲子

原 虹色を顔に貼り付け厚化粧

光弘

添 虹色を顔に貼り付け厚化粧

光弘

表現の仕方に特徴があつて面白いですが、

顔と厚化粧は重なります。

原 何処までも二人で虹は追い駆ける 紀子

添 何処までも二人は虹を追い駆ける

感覚の違いが多少出るかと思いますが、無理のない助詞の使い方をするならば、という

観点から添削しています。

原 雨が止み我が家は虹の真下です

節子

添 雨がやむ我が家は虹の真下です

いい着眼です。

【入選に準じる句】

しぐれ後の虹に染み入る近きかな 冷子

雨ふつて空気中の浮遊物が落ち、視界が良

くなつて虹が近くに見えるようになった、と

いう句意かと思ひます。「虹に染み入る近き」

という表現は虹の存在をクローズアップする

に十分であり、魅力的です。口語でいう「かな」

は不確定表現となりますので、残念ですが、準入選にしました。

虹に会ういいことがある予感する ふみ子

着眼、表現ともやや平凡です。

好きな色多くて虹と言つておく りこ

何色が好きかと聞かれたのですね。

わが願ひ虹のかけ橋まだできぬ 久子

どんな願ひかは判断できませんが、きつと

橋が掛かります。待つていてください。

ほろ苦い昭和懐古に虹似合う

虹の街昭和と共に消えていた 篤 治子

あの虹に万葉人は何を観た

正彦

時代や生活環境によつて映つた虹は色々でしよう。対象を限定するとき、かえつて流れ句になる場合があることも知つてくたさい。

気晴らしにドライブ虹が元氣くれ 美紗子
アクセルは戻る程度に踏んでくたさいね。

普天間の海が大きな虹を待つ 敏治
日米交渉は密約をするか否かが課題です。

雨上がり弱音に固唾虹の橋 安子
雨後の虹は爽やかで、勇氣をくれます。

虹柄の春着羽織つてバスに乗る 智加恵
バスの中虹が見えたとき大騒ぎ ちづる

バスを人の集団と読めば深くなります。
絵本の虹これは何かと孫が聞く ヒロ

さて、どう返答するかですね。
煩惱を包んで飛ばすシャボン玉 律子

シャボン玉は必ず弾けますので、元の煩惱が丸見えになります。その「こっけいさ」を描いておられると解釈できます。

虹みつけ心の闇もあがる雨 開子
やがて足もとの地も固まつてきますよ。

サクラ咲く虹鮮やかな春の庭 幹子
春にはさまざまな縮図が見え隠れします。

ただ、小道具やや多い感がありますね。
虹描く絵具一色足りません 真由

どんな色だろうかと想像を掻き立てますが、インパクトを強くするために、むしろ特

定の色を出したほうがいいと思います。

【入選句】

老いたけど未だ虹待つ性根あり

喜寿米寿一歩一歩の虹の橋

虹の空渡つて見たい野望抱く

青春のページ褪せない虹の中

破れたジーンズが虹にジャンプする

プロボース虹が背中を押してくれ

風景画虹出てないが書いている

虹の橋走つてお出で古希の恋

虹の橋あれが冥土の花道か

虹の橋入口いつも消えている

氷河期に内定通知虹が差す

貧しいが夫婦にかかる虹の橋

近づくといふと逃げぬ虹を追う

騙し絵の夢は七色だった過去

虹の橋未完のままで消えている

老後の虹掴めぬままに君は近く

虹の彩り一期一会の縁でした

虹のかなたいつか逢えます父母に

父母眠る山河にかかる虹恋し

虹の橋渡つて島へ里帰り

消えかかる虹のふもとに居るおんな

万馬券外れた虹が風に舞う

渡れそうそんな気がする虹の橋

青虫とジョーロの虹を眺めてる

空の虹夢捨てると言っている

清

弘子

健柳

志延

啓子

菜摘

綾乃

エミ

志郎

憲司

紀雄

唯教

堅坊

道子

嘉彦

美恵子

宣子

文代

一子

孝代

酒坊

義雄

登美子

菜々子

憲彦

この道を行けばいつかは虹が出る 勇
褒められたところからほら虹が出る くにこ

啓蟄の春だ希望の虹を抱く

春先に心の虹を塗り替える

虹つかむまで追いかけて追いかけて

遊子

陽子

みち代

弘光

千恵子

恵美

宏造

振作

孝明

久美子

谷

小栢こずえ

虹の両端辺りに建つ家をうらやましく思つたことがあります。こういう気持ちがあつたのでしようね。納得しました。

虹の立つ下に幸せあるような

虹の橋渡れば苦勞消えそうな

茶柱と虹を見たので寝つけぬ

太陽に背を向けてこそ見える虹

ふっ切れて心に虹がふたつみつ

この虹の向こう側から見ると

小さな虹水まわくホースからこぼれ

君の家虹の中だとメールする

【今月の推せん句】

メルヘンの世界へ誘う虹の橋 谷 久美子

ローマンがある「虹の橋」になりました。

虹の立つ下に幸せあるような 小栢こずえ

虹の両端辺りに建つ家をうらやましく思つたことがあります。こういう気持ちがあつたのでしようね。納得しました。

秀句鑑賞

同人吟 高瀬霜石

— 4月号から

青森県は、本州の果てなので、百人が百人

場所に分かるらしい。反対に、よく間違われるのが、宮崎県とか、群馬県とかだそうぞ。

僕は、鳥取と島根をよく間違うので、6月の日川協の大会に出席し、「ぐるっと鳥取」旅行にも参加し、見聞を広めようと思っている。

さて、青森県は「津軽」と「南部」の二つに別れているのだが、関西の人はほとんど知らないだろう。せつかくの機会だから、青森県の説明をしたい。地図に向かって、左半部分が津軽、右半分を南部と御理解下さいな。

今までの東北新幹線の終点は、八戸（南部）だったのだが、今年の12月、青森市まで開通するのだ。ジャン。数年後、新幹線は、真つ直に北海道に向かう。だから、僕の住む津軽の中心地である弘前市には、新幹線は永遠に來ない。永遠に來ないが、すぐ近くの青森市までは来るのだから、それでOKなのだ。

来年の日川協の大会は、仙台（平成23年6月12日）に決定済み。今から予定表に書き入れ、ついでに弘前まで足を伸ばして下さいな。

とりあえず今すぐできることをする

春木圭一郎

僕の大好きな長嶋茂雄風に言えばすなわ「わたくし、この度、初めて還暦を迎えまして」なのである。僕の友人たちも、この3月でみーんな定年。なんだか切ない、寂しい。そんな心境の時に、こんなサラリとした句を読むと、ついため息をついてしまう。

鏡見てまだ毛があると胸を撫で

藤井則彦

笑うなかれ。たかが毛、されど毛なのである。僕もちよつと前までは髪はふんだんにあった。でも、実際に、秋に枯れ葉がガバーッと散るようなことを自分の頭で体験して、則彦さんの気持ちがよく分かるのだ。本当のことを書く川柳は、実に説得力がある。

黄昏にやとと園車かみ合つて

倉益一瑠

これもきつと本音。一瑠さん、よかった。《黄昏になり園車がかみ合わぬ》の方が川柳的なのだが、普通でないのがよかった。

ラジオ体操布団の中で聞いている

古手川光

これも多分本音。実は、僕も一緒。僕はテレビ体操なのだが、もちろん、そんなことはどうでもいい。光さんも僕も、暖かくなったら、布団を抜け出すはずである。

八方美人幹事の役はむきません

山本玲子

これも多分、本当のことで、自分のことだろう。玲子さんは、誰にでも優しく、親切で人気者。あんまり得手ではない人とも、まづまず上手にこなしている分、心の中ではこっさり「八方美人」と卑下している生真面目な人なのだ。そんな人だからこそ、当然のこと、幹事の役が回ってくる。受けたくはないが、しがらみで受けざるを得ない。かくして、また自己嫌悪に陥るといわけだ。

《八方美人幹事の役にむいている》が、普通の発想なのに、この句は、正反対になっている。それは、玲子さんが真実を書いているからにはかならないと、僕は思う。

愛してる方がいつでも待たされる

岡川無限

無限さんは、ひたすら美女を待ったのか。それとも、無限さんは、かつてはブレイボーイで、モテた昔を反芻しているのか。

今日までに八万回も食事した

池原 天馬

ひよんなことから、僕の子供ほどの年の娘の川柳の師匠になった。師匠なんて実におこがましいのだが――目が不自由な娘なのだ。彼女は宮城県に住んでいるので、別に手取り足取り指導しているわけではないのだが、僕を先生と呼ぶので――この際仕方がないと諦めて、そういうことにしている。

最近の僕は、一日の大切さ、一回の食事の有り難さを、あらためてこの若い弟子から教えられている。

熟睡をする人明日を信じてる

寺川 弘一

一病息災なんと羨ましい言葉

三島 淞丘

彼女の病気は、10万人に1人発症するか否かという「多発性硬化症」なる難病。視力障害や、手足の麻痺、感覚障害、言語障害、排尿障害などが起きたりする怖い病気なのだそう。だから、彼女は、朝目覚めると、「手足は動くかな? 声は出るかしら?」などと自分のカラダの確認をしてから起き上がり、夜寝る前には「ああ、今日も一日元気で無事に過ごせたなあ。おかげさま! おかげさま!」と手を合わせるという。

長所だろうか誰にでも声かける

富山 ルイ子

投句は友人が代筆してくれるし、句会や大会でも、ルイ子さんのような親切な柳人がいて、彼女はまったく困ることがないそうなので、てにをは変えて前進しています

籠島 恵子

ある日、彼女からファックスが届いたので驚いた。「この手紙は、ケータイのメールを自分のパソコンに一度送信し、プリントアウトしたものです。いつも友人に代筆してもらっていますが、代筆だと自分の気持ちさをさらけ出すのが恥ずかしい時もあるので、今日はこうして自分一人で打っています。メールは音声で入力できる優れものなんです」とあった。僕にはチンプンカンプンだった。

あとであとと傷を大きくしてしまふ

高島 啓子

佳句である。古川柳の名句《本降りになつて出て行く雨宿り》を彷彿とさせた。

秋晴れに家族全部が干してある

佐甲 昭二

これも佳句。シアワセが、目に見えてくる。入口にしてはもらえぬ非常口

高橋 宏臣

今回の集句の中で、僕のベスト・ワン。

酒を少々飲んでゐるマイペース

武田 帆雀

集まって酒を飲むのも元氣者

竹信 照彦

西出楓楽さんがまだ編集長時代、本誌に、僕は0歳の時に小児がんに罹り、運よく生き延びたと、告白したことがあった。あれからまた数年が過ぎ、僕は今年還暦。よく生き延びたのだが、つい感謝も忘れ、毎晩ダラダラと飲んでいる日々、これではイカンと思い、一杯の酒を、大事にいとおいしんでおります。飲みすぎに注意と瓶に書いてない

升成 好

焼き具合知らせてくれるシヤモの目

小寺 花峯

一合を許してもらつて聴診器

須郷 井蛙

酒五合まだ語りたいロマンあり

小川 注湖

五合はちよつと多すぎまふせ。ご同輩。

内緒だが昼間もちよいと飲んでます

山本 正光

禁酒する気など毛頭ありません

早川 遼行

「川柳塔」にはなんと飲ん兵衛が多いことか。10月9日、楽しく飲み交わしたいものだ。

—水煙抄

秀句鑑賞

—4月号から

早川 遡行

おでん種鍋いっぱいにして出掛け

島田 千鶴子

コンビニで何か買って食べといて、などと
けろっと旅行に出掛けてしまふ主婦もいれ
ば、食事から着替えまでこまめに指図して、
済まなさうに出掛ける主婦もいる。おでん
だったら火を入れ直せば二、三日は大丈夫だ
し酒のつまみにもなり安心である。

今帰るだけのケータイ持たされる

三浦 強一

これぞ川柳と言ふ一句。このユーモアが堪
らない。

老老介護あらぬ思いがふとよぎる

寺井 秋果

一瞬どきつとするこの句、考えさせられる
ものがある。介護疲れから悲劇に至る暗いニ
ュースに接するたびに、この国はいったいど
うなっているのかと不安になってしまふ。

初対面猫の話題で座がなごむ

谷田 多美子

初対面の人と猫の話題を通して打ち解けて
いく様子がなんとも微笑ましい。

嘘っぱい話で耳がこそばゆい

神野 千恵子

嘘っぱい話を真面目に聞いてやるのも処世
術。反論してしまつたら元も子もなくなる。
諍いを嫌い無口になる夫婦

片山 かずお

我を張って諍うより、ほとばりの冷めるの
をじつと待つ。どちらかが折れてくるまでの
辛抱です。

懐が寒いと孫も寄りつかず

安達 厚

孫がくるのは小使いが欲しいか、何か買つ
て貰えるからで、年金日以外に用がないので
ある。

一色に染まった国の恐ろしさ

森下 よりこ

北朝鮮のように軍事一色に染まると、何を
為出かすか分からない怖さがあつて不気味だ。

あきらめた夢の数だけしわが増え

深澤 千恵子

顔のしわを諦めた夢の数に置き換えた見
つけが面白い。

降りる駅までにメイクはちゃんと済み

竹村 紀の治

通勤電車の中でメイクしている女性をよく
見かける。昔では考えられないことである。

笑い声聞こえる家は人も寄る

橋谷 静江

どうせ生きるなら、明るく楽しく暮らした
いものである。笑いさえあれば、どんな不況
も怖くないはずだ。

昔ならとつくに死んでいる跡

片岡 松枝

医学の進歩には目を見張るものがある。高
齢化社会の一因もそこにあることは確かであ
る。しかし寝たままの跡で延命治療を受け、
生かされている状態をどう評価するかは人そ
れぞれであろうが、私には耐えられないこと
である。

天高く風と闘う風が好き

橋村 容子

勇壮な句。逞しい男児が目につく。

おふくろの味はおせちに引き継がれ

竹山 千賀子

善悪を母の涙に教えられ

寺井 弘子

時期が来るまであたたためておく火種

花岡 順子

錯覚の夜

木本 朱夏

素通りはできぬ花屋も古書店も 朱夏

どうしても花を買って帰りたいと、心の騒ぐ夜であった。日々雑事に追われ神経がざらついていたのだと思う。繁華街に夜遅くまで開いている花屋の前で私はしばし佇んだ。十本三百円という値段に釣られて、赤紫のデンファレを買った。

わが家の近くの横丁まで来て自転車から降りた。この横丁には猫が多い。太猫中猫子猫とり混ぜて、年中十数匹の猫が屯している。この間まで子供だと思っていた猫が、子供を連れていっぱしの母猫になっていたりする。

猫が好き中途半端な男より 朱夏

住吉大社の初辰さんの日に鳥居の下に、青いリボンを結んで捨てられていた子猫を拾ったのが、猫と私の共棲の始まりだった。

段ボールに入った猫を南海電車で和歌山ま

で連れ帰ったが、車内でミャーミャー鳴かれて困ってしまった。何しろ子猫の分は無賃乗車である。鳴くたびに私は周囲を気にしながら子猫に指をしゃぶらせて黙らせたのである。それから半世紀ちかく、猫のエピソードにはことかかないが、どの子にも深い愛着と濃密な思い出がある。

ネズミを捕ってきて仏壇の前に供えた猫たち。嘘ではない。本当の話。和歌山県の鳥メジロをヒヨイとジャンプして捕まえた子メジロは県の保護鳥のはずだ。「やだよ、この子、お尋ね猫になるよ」と私はばやく。

十数年前、すがきの下で野良猫が子供を産んだことがある。七匹の赤ちゃんにクッキーあんこ・きなこ・わらび……などの名前をつけて、いいお家へ貰ってもらったことも……。今も二匹の猫と暮らしているが、下の子は妹が散歩の途中、橋のたもとから拾ってきた。二百グラムの黒い毛糸のような猫の子の幸せを願って、「福助」と名付けた。

横丁で産まれた野良たちの中に黒猫が一匹混じっていた。福助にそっくりなその子を私たちは「福助のいとこ」と陰で呼んだ。

さて自転車を押して行くと路地の真ん中に

地面に張り付いた影が見える。もしや福助のいとこでは………と思い「どうしたの、早くお帰りよ」と声をかけながら近付いて行つた。紛れもなく福助のいとこである。いつもであれば人影を見ると、一斉に猫たちは跳び散るのだが、今夜横丁にはこの子猫だけである。しかし動かない。びくつともしない。

恐る恐る抱き上げてみると、消え入りそうに柔らかに軽く頼りなく、私の掌には存在感がない。昼間のにわか雨に打たれたのか、背中はまだすし濡れているが、どうやらもう死んでいるようだ。

（この子に何が起こつたのだろう……）ほんやりした子猫ではあったが、昨日までは、いいや、さつきまでは確かに生きていたはずだ。理不尽な怒りからかれ、せめて葬ってやろうと私は家に駆け込んだ。

タオルに包み、綺麗な靴箱に横たえてみたがあまりにも小さく痛々しい。買ってきたばかりのデンファレで子猫の亡骸を埋めた。

「ちいさな子には似つかわしくない花だけどねえ……」と妹がつぶやいた。（まだ生きていたのではなかったかしら……）妙にぬくもりの残る掌を私はいつまでも眺めていた。

影ほどのかるさで猫が死んでいる 朱夏

本社 四月句会

四月七日(金) 午後五時
アウイーナ大坂

花冷えの一日、夜の四月句会が、初出席一名を含む九十名で開催された。

お話は奥田みつ子相談役。「対談つれづれ」と題して話された。

四月二十四日は橋高薫風先生の祥月命日である。「この世からあの世は見えずさし向かい」「あの世からこの世は見えずさし向かい」の色紙を檀家でご覧になった僧侶が、「格調高いこの二句でお浄土を詠んでおられる」と話されたそうである。

一九九三年の朝日新聞に川柳と言えない句が載った。天声人語にも「これらの句に驚いた。これは川柳ではない、悪口 of the 五七五」と書かれた。でもあれから一七年経った今、川柳を見る一般の人の目は変わったのだろうか。言葉遊びの多いサラリーマン川柳が目立つようだ。

二〇〇五年に薫風先生が死去された直後、出版社から対談の依頼があり「少し手伝いなさい」との先生の言葉と思い引き受けた。

遠藤千舟氏、やすみりえ氏、榎本一郎氏、芹川英子氏、林家木久扇師匠、それぞれとの対談の中で、「川柳とは言葉遊びや駄洒落などと思われている風潮に納得できない。知的な文芸であることが川柳の特色である」と述べてきた。

「孝行の仕方兄弟みな違い(薫風)」のように「川柳の社会化」にそれぞれの立場で、できる方法でお手伝いしたい。

このように文芸川柳について熱く話された。(能子記)

月間賞は大谷篤子氏(吹田市)に輝く。

(司会)美籠・昭(協取)千代・真理子

(受付)柳昌・わか・実花(清記)光久・善純

席題「名刺」

川端 一步選

男前の名刺はちゃんと覚えてる

いくひろ

名刺には無職と書いてプロの主婦

美智代

ありがたい名刺代わりと言う和菓子

朝子

専業主婦名刺代わりにレシビ出す

りこ

名刺手に栄華の日々を懐かしむ

美籠

汗涙沁みた戦士の名刺入れ

直樹

憲法の前文書いてある名刺

保州

名刺にはない実力を試される

唯教

作業着で社長の名刺渡される

郁夫

肩書きの数だけ父のお人好し

柳弘

囑託と肩書を入れ家の番

公誠

異性からきこちなくもらった名刺

瑠美子

診察券ばかりとなった名刺入れ

和夫

また名刺変わり仕事も変えはった

月子

名刺百枚刷つておんなが翔びたがる

扶美代

もてたなあ往事を偲ぶ花名刺

直樹

文庫本の葉にされている名刺

真理子

気が付けば名刺に頭下げていた

昌紀

生きるため身を切るような花名刺

求芽

名刺だけあるが誰だか忘れてる

玄也

めつたには渡さぬ警官の名刺

朋月

趣味の会可愛い名刺作ろうか

ルイ子

たかが名刺されど名刺と言う怖さ

みつ子

むくむくとやる気が湧いた初名刺

淳司

名刺代りに笑っておきました

義

丸めたり落書きされてる名刺

ダン吉

振り向くと僕の名刺を捨てていた

保州

肩書が消えてすっきりした名刺

紀乃

手渡しの名刺じんわりお人柄

ふりこ

僕の名刺なまえと住所だけですわ

勝弘

真つ先に名刺供える御仏壇

たもつ

栄転の名刺ふる里遠くする

無限

住

擦り切れた名刺にだつてある自由

寿子

肩書きできて名刺見せとく亡父の墓

一風

肩書の無い名刺には夢を刷る

黒兎

社の再起果した過労死の名刺

良一

わが名刺汚すことなく用終える

耕治

人

第一印象名刺の裏に書いておく

地

いい笑顔これが私の名刺です

天

新人の名刺余曰は無限大

軸

点字入り名刺で候補売っている

兼題「晴れ着」

太田扶美代選

山里はたたいま桜 さくら着る

制服がひとときわ映える新学期

ママさんが夢を叶えた宇由服

晴れ着よりバジヤマが似合うおとうさん

晴れ着なら何枚もある案山子です

晴れ着で立食いそばを食べている

ホームラン打って輝くユニフォーム

行き違ひ晴れ着へ晴れ着値踏みする

ひらひらと赤い晴れ着を着た金魚

作業着が晴れ着就職できました

瞳キラキラ絶好調という晴れ着

畳紙の中で出番を待つ晴れ着

うれし涙いっぱい吸っている晴れ着

晴れ着写真モンペ姿がセピア色

晴れ着でカレうどんはやめなはれ

一番の晴れ着表彰台のユニホーム

日本列島晴れ着さている花吹雪

振り袖の娘まぶしいみおつくし

希久子

一風

黒兎

義子

寿子

耕治

日の出

義子

堅坊

好子

朝子

富美子

柳昌

美智代

恵子

敏治

玄也

求芽

義子

千里

ジバンも晴れ着も長女よく似合う
晴れ着代持って留學すると言う
真つ白な産着人生への門出

借りてきた猫になつて燕尾服

晴れ着です夫婦げんかは出来ません

晴れ着のしみ青春は美化される

ユニクロで間に合わせています晴れ着

作業着が晴れ着と父は胸を張る

飢えしのぐ米と交換した晴れ着

晴れ着用にイケメンひとり借りてくる

古着屋で買った晴れ着を褒められる

振り袖のたもとで温めてる内緒

自分史に著せる晴れ着を縫っている

晴れ着から夢の溢れている門出

佳

胸に花つけて晴れ着が出来ました

日の丸を胸に五輪へ発つスーツ

晴れ着着る時は気合を入れてます

晴れ着から覚悟問われている二十

春夏秋冬問答無用の一張羅

人

献血の晴れ着二十の逞しく

地

留袖を着てくれない息子たち

天

皆晴れ着留守番の祖父茶を入れる

軸

一糸発起係の晴れ着を縫っている

正雄

蕉子

賢子

朋月

日の出

希久子

朋月

楓楽

保州

尚士

天笑

いさお

昭子

朝子

月子

耕治

美智代

良一

柳弘

一風

美花

正雄

兼題「右」

伊達 郁夫選

左手も添えた握手についコロリ

妻の右腕に徹する定年後

右折して毬は一途に弾み出す

不器用な右手左に助けられ

右腕の牙えが時々疎ましい

さよならの向こうで恋の回れ右

右隣へ火種が飛んでから無口

守られてあなたの右を歩いてる

右と言えは左と妻が言う余生

右肩がときどき触れている鼓動

ウインクは右目ですと決めている

ライバルと最後は握手する右手

春つらら右脳を占めるのは霞

密約を握り返した右の腕

にんげん百態独り善がりの座右の銘

我を殺し右に倣えて丸く老い

僕をみて女神が回れ右をする

靴下の右の穴から慌てだす

右傾化に歯止めをかけている九条

右だろうと左だろうと金次第

座右の銘探しに辞書の森に入る

白寿なお左手に徳利右手に猪口

右向いたままで動きのとれぬひと

右腕のいない不幸に鳴く小鳩

残り運つかむ右手はあけておく

戦争に征つた右手が帰らない

美義

雅明

寿子

哲子

富美子

柳弘

寿子

真理子

希久子

朝子

卓

無限

紀乃

求芽

柳弘

昭

好

瑠美子

東吉

修

良一

直樹

紀乃

直樹

好

岳人

探し物右手に確と握ってる
使いすぎ右手が先に縮み出す

右大臣祖母で大蔵省は母

右腕と頼られ出してからの鬱

明治の母は右向け右のまま逝った

横顔は右から撮って欲しかった

佳

守らねば履けない靴の右ひだり

今だって右のボツケに夢がある

右の手は貴女のために空けてある

握手した右手が重くなってくる

バラリンピック右手ひとつで掴む金

人

好奇心座右の銘にして老いず

地

右上がりあの時僕を見失う

天

まわれ右優しい海に会いに行く

軸

右腕とおだて窓際座らせる

兼題「なんと」

鹿島

恵子選

なんとなく話の筋が読めて来る

憎まれても後期なんとか生きている

泣き虫が今度はなんとうれし泣き

自分史になんと落し多いこと

なんと明日児童手当が貰えるぞ

篤子
たもつ

正雄

淳司

美代子

昌紀

美代子

朝子

尚士

楓楽

光久

哲男

ダン吉

柳昌

准一

美義

雅明

楓楽

岳人

おばちゃんの会話五秒も途切れてる
なんとなく響くものあり初対面

外人が相手ジェスチャーだけで済む

なんとなく暮した過去に自己嫌悪

生き方のなんと見事な余命表

なんとなく今日一日が過ぎていく

微笑んでなんと見事な嘘を吐く

直子さんなんと笑顔の爽やかな

学帽になんとロマンがまだあった

緊張するなんとやたらに渴くのど

握手した温もりなんと覚えてる

なんとまあ何時溜めたのかゴミの山

なんとしても九条だけは守りたい

うちの娘をなんと上手に言う祝辞

なんとなく生きてるさくらからさくら

落ち椿なんと余韻のある風情

なんとなく国の行く末気にかかり

腹八分なんともこれが難しい

慰さめられている何ともなさけない

なんとなく夢二の猫のけだるさよ

神様の指図だらうか運が向く

なんという話もなくてまだ夫婦

初対面なんとさわやか眼がきれい

休肝日この夜桜をなんとする

笑顔よしなんとも好きでみんな好き

なんとなく始めた趣味が身を縛る

なんとなく言った言葉が傷つける

見清

寿美

紀乃

靖博

美智代

能子

光久

美花

瑠美子

章久

篤子

日の出

ダン吉

耕治

希久子

いわゑ

遠野

好

天笑

瑠美子

美籠

義

わこ

和夫

哲子

光久

百歳のなんと明いお葬式
母さんがなんと小さく無人駅

好き嫌いやわぬが皿に残してる

なんとなく生きてるのに肩がこる

なんとしても越えねばならぬ山がある

人

お日柄も天気もなんと良い門出

地

生きるとは何と厳しい綱渡り

天

妻変身なんと楽しくなった僕

軸

なんとという誤算ばかりを積む夫婦

兼題「極楽」

河内

月子選

極楽へ着いたら君も呼んでやる

極楽も地獄もたんと見たこの世

十月十日が極楽だった虐待児

極楽へ行くには欲が多すぎる

極楽は大福餅と美味いお茶

極楽とんぼそれもいいかも青テント

引き出しに僕の極楽詰めてある

極楽へ行き着く迄のお念仏

仕事終え一風呂あびて呑むビール

ごきぶりもここが極楽思ってる

極楽と思えば楽し地獄の火

楓楽

れんげ

宣子

義

いわゑ

賢子

良一

柳昌

房子

朝子

遠野

いさお

正雄

寿美

求芽

美代子

靖博

天笑

みつ子

極楽往生しました母は九十九
極楽の句座あの顔もこの顔も
朝寝朝酒極楽にいる独り者
極楽を知らずに極楽への夢
極楽を今日も訪ねた酒二合
極楽を信じ切ったら行けそう
定年の今極楽の風の中
極楽はポツクリ寺の奥にある
極楽も人間くさくなりました
極楽で踊る阿呆をやっている
極楽はビール片手に虎が勝つ
極楽で遊べる余力あるように
極楽も住めば住んだで出る不満
無事完走仰いだ空は光ってた
極楽へは行けぬとあきらめて気楽
極楽は退屈そうで行く気せん
極楽な朝寝楽しむ春うらら
極楽は混んでもつせと閻魔さん
極楽へ行くにも消費税かかる
極楽の気分湯船で身をほぐす
極楽もよいが惚れるとつまらない

佳

一風 蕉子 朋月 見清 弘風 紀乃 良一 卓卓 希久子 卓卓 昌紀 直樹 見清 時雄 能子 敏治 一步 いくひろ いくひろ 朋月 哲子 昭 柳昌 わこ

人

極楽を見せて上げると深海魚

地

安らかに大往生をこい願ひ

天

平凡な日々を極楽だと思ふ

軸

好きな物並べチャンバラ観ています

兼題「削ぐ」

河内 天笑蓮

無理やりに削がれた山が泣いている
贅肉を削いで酒で埋めもどす
御無沙汰すると削除をされていた
竹削いでB29に立ち向かい
贅肉が削げたらクラス会へ行く
削減が弱者に重いマニフェスト
文章をすっきりさせてまとめあげ
煩惱を削ぎつつ仏彫っている
カットした髪が春風もてあそぶ
風雪に身を削がれてる野の仏
憎しみを削ぐとわたかまりが消える
支持率低下で氣勢を削がれてる
削いで削いで葬式はせぬつもり
ます僕のお小遣いから削ぐらしい
削減の裏でむだ金注ぎ込まれ
この辺を削ぐとすりりとなるわたし
五七五一茎一花に削ぎ落とす

千里 時雄 房子 耕治 扶美代 満作 寿子 舞夢 美花 日の出 いくひろ 義

煩惱を削ぎ落とせたら仏様

勢いを削いだひとりのノの声

ブルドーザーに虫歯一本削られる

しがらみを削ぎ落したい落とせない

七光り削いで私の道を行く

美辞麗句削ぐとまあるくなる話

キヤッチャーのはやきに氣勢をそがれる

真っ白になりたくて押す削除キー

少しづつ削いで夫婦も丸くなる

官の無駄民の納税意欲削ぎ

生え抜きの夢削いでいく天下り

減量のと一キロが削ぎとれぬ

事業仕分け仇のように削ぎ落とす

欲驕りみんな削って仏さま

プライドを残酷に削ぐ紙オムツ

マイナスの予感みんな削ぎ落す

でこぼこを削いだら消える面白味

横並び削がれた個性落ちている

欲削ぐと間抜けな顔になる私

ぬくもりを削がれてあとにする都会

いい苦勞したなきれいな削ぎ跡だ

削ぎつくし流れるリズム一行詩

年寄の夢を削ぐ記事多すぎる

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

削ぎつくし流れるリズム一行詩

ふりこ

ダン吉

たもつ

蕉子

哲子

良一

能子

玄也

良一

好昭

公誠

楓楽

篤子

富美子

蕉子

柳昌

求芽

真理子

篤子

柳昌

求芽

真理子

篤子

柳昌

求芽

真理子

篤子

柳昌

求芽

真理子

篤子

柳昌

みどりの城

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

ローズ川柳会(兵庫)

木村貴代子報

前へ前へと気概は持つておりますが 義子
開かずの亡夫にあげたチヨコレート 藍
花屋の花に呼ばれたように立ちどまる いわゑ
春宵のワインは少し罪つくり 年代
人の寄る開けつびろげな母と家 てる
ほはえんで花はこころの戸を開く 哲子
春はそこ小鳥ついはむ黄色い実 みつ子

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

いいニュース聞くアンテナを高くして イセ
テレビから人が飛び出す明日がある 巽
テレビから出演依頼まだ来ない 順一
常備薬の代わり毎日観るテレビ 朱夏
ネクタイをはずしテレビに添寝する 起世子
父さんの座よりも上に居るテレビ 豊
コマーシャルごとに仕上げてゆく化粧 八重子
出演者だけ笑つてるバラエティー ダン吉

画像から跳ねてきそうな海老フライ
テレビ通り出来た試しが無いレシビ
テレビから貰った知恵で生き延びる
思考力奪う魔物の住むテレビ
進化するテレビに退化してる脳
考える脳を壊しているテレビ
雑学をいっぱい学ぶテレビジョン
信長も龍馬も逢えるテレビから
ミステリーだらう一日無為徒食
一日が無事で白紙の日記帳
生かされて今日の一日無事にバス
遮断機を抜けて一日跳んでみる
欠かさずに一日置きに姑が来る
一日が長し短し鬼の留守
日帰りの旅もクスリと保険証
さあ夜明け活気が満ちてくる駅舎
一日じゅう食べていそうなそんな妻
病院もここも同じ二十四時
スイッチが壊れ一日ごろごろと
一日を棒に振らせぬ靴の裏
足止めをされて一日棒に振る
一日を宝のように抱く余生
一日の重み八万六千四百秒
独り身へ今日一日を尋ね合う
一日を使い切ったという寝息
一日も無駄には出来ぬ余命表

町子 孝子 登美代 東吉 紀子 次根 桂香 かずみ 昇 元三 辰治 幹子 絹子 菜摘 武 柳昌 みね 俣子 章子 義雄 当代 碧 保州 さち子 和子 准一

一月一日去年の水を吐く蛇口
松露川柳会(鳥取) 小西 雄々報
ハッピーを手繰りよせたい寅の初春
三世代ハッピー願ひ初詣で
期待した花が満開ハッピーだ
ハッピーは家族旅行で蟹する
ハッピーは孫の笑顔へお年玉
ハッピーな年ありがたい福は内
ハッピーな初春へ大きく深呼吸
デート重ねハッピーエンド結ばれる
家族みな元氣新年ハッピーだ
喜寿傘寿越えハッピーは白寿へと
ハッピーな顔を成人式に見る
川柳塔みちのく青森 小寺 花菱報
コンビニーマスク外して入ります
転落に歯止めをかけた立役者
それぞれの心に入るナースの目
タヌキ対キツネの夜を咲きあかす
バスガイド白い手袋歌になる
長くつをはけば軍手も動き出す
錆ついた村に主役の医師が来る
居酒屋で主役張つて大吟醸
錆釘の整理軍手が引き受ける
誕生日今日はばあちゃん主役です
理恵 久子 弘子 智恵子 豊枝 信雄 鈴枝 和代 公美枝 静江 正光 雄々 吞舟 洋子 和香子 美鈴 芳生 一吞 銀波 ふさゑ

かあちゃんを主役に据えて一家無事

それぞれの道を進んで子ら巣立つ

それぞれの考え蟻とキリギリス

七人の敵へ笑っている横座

それぞれに天をいたたく葱坊主

映画館出たら主役の風を切る

あつちむいてホイ百合は気儘に咲いている

主役にはなれぬ女の嫉妬心

地吹雪の音に馴染んでくるマスク

高知川柳社

小川てるみ報

人間の弱さ最後はただ祈る

祈る手に温もりもらう初詣で

敬虔な祈りへ心洗われる

合格祈願絵馬の太さに負けている

祈るもの一つに絞り迷わない

日当たりの中で眠気が射す祈り

お雑煮も供えちちはへの祈り

祈つて途中で効いてきた麻酔

いずも川柳会(鳥根)

佐藤 治代報

古い独り寝られぬ夜の柱時計

わたくしなりのレベルに並び焦り出す

腰痛くどきとき遅刻杖ついて

山と川違うレベルで生きている

剪定で摘まれた芽から出る涙

雅城

愁女

井蛙

黙人

岳水

花峯

慕情

一花

荔

典雄

悦子

てるみ

三郎

健

哲史

幸子

和広

煩悩児

桂子

嘉寿恵

テル子

幸子

願いごとどきどき波が曳き返す

百合の芽になり美しく老いてゆく

ちよつと待てもうすぐ頭出すつもり

わからぬよう私のレベルひた隠す

どきどきと君の視線を追っている

結び目を高いレベルにした誤算

肉じゃがのレベルの中で満ちている

レベルより大きな器さげてる

穂の芽の天ぶら酒を追加する

四捨五入やつとレベルに近くなり

どきどきを忘れたハートノックする

どきどきの訳は言えない恋心

いい素質持つていながら芽が出ない

小卒の身だけと海を持つている

動揺が収まり心の芽が伸びる

向かい合うこのどきどきは何だろう

一本の新芽核心突いてくる

どきどき感伏せたおんなも捨てました

レベルダウンやさしい顔になつてくる

寝違えたまままで春が来てしまう

寝たふりも出来ず起きます闇の音

美味いもの食べると五感踊り出す

蓬餅春の新芽を丸くもむ

身の丈に合ったレベルで跳んでいる

人を送り人を迎える芽出し雨

有がとう一つ布団で寝ています

靖乃

枯次

キミエ

久枝

多喜

美千代

治代

美江子

昌枝

敬子

たえこ

佳子

孝亮

ひろし

左余

徳子

喜子

ちえ

歌子

寿美

龍石

玲子

房子

蘭水

美佐子

茂美

佳句地十選 (4月号から)

井伊 東吉

一年の喜怒哀楽が煮こぼれる

ママ好きよ一番元氣の出る言葉

物忘れ自分が崩れる音を聴く

注ぎにくる男にちらと見た錯

快晴の空へ落書きしたくなる

札束の撒き餌に雑魚がよく釣れる

採血の我血をすする憎い針

友が逝くまだいかなが煮えぬのに

水準の高さは汗の量だろう

老化した鬼がしよつちゅうへまをする

魚屋の魚どきどきする目玉

どきどきを波にかえすと喪が明ける

どきどきとさせたあなたもおじいさん

春の視野持つと聞こえてくる芽ぶき

川柳らくだの会(鳥取) 岸本 宏章報

三食をどんぶりばかり妻不在

幼子が親より先にバスを降り

あぶなつかしい魚料理の下手な主婦

わくわくと万年筆のレター来る

手の届く範囲に配置ものを書く

割り勘の計算中に消えた人

凍みている気をつけてねと送り出す

保州

史子

春枝

恭昌

一風

光久

花匠

哲夫

ダン吉

玄也

文子

章峰

きみえ

ちかし

邦昭

せつ子

玲子

善江

大鯰

紀子

富貴子

牛井にみんなそろつて迷い箸
ランドセル一式入れて春を待つ
途上国が持てば危ない核兵器
今日もまたまぐろ丼抜きする
胸の内ゆつくり聞いてくれた亡母

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

丹念に赤を重ねて春を着る

音のない部屋は私の小宇宙
ストーブに心の傷をいやされる
花生けて電話のベルに水忘れ
スキップを踏んで老人会に行く
座のだけで健康になる電気椅子
秀の字を書きたい筆をよつてみる
雪月花も記念日にして父の酒
踏まれても夢は捨てない車椅子
私のコピー 私と妥協せぬ

山も田も譲りらくらく過疎に住む
笑わない秀才がいて座がしらけ
何事も秀でているが情がない
お達者だタワシでからだこすつて
秀才でなくてよかった親と住む
葛藤の数よ安楽椅子の数よ
品格に華を添えてる牡丹柄
どんぐりの森で秀眉となつただけ
優秀な頭が裏で司令塔

清帆 寿賀子 宏章 仁子 孝子 螢 弘子 幸枝 睦子 茶子 照彦 久枝 彩子 八重 西和子 (節)子 忠良 美恵子 蟹郎 房子 宣子 孔美子 盛桜 実満

(節)子

政治と金踏み絵踏まないえらい人
お捻りが子役の芸へ派手にとび
ボケツトの中部団駄を踏む拳
日の丸は派手で質素でおごそかだ
尻もちを派手につける旨かろう
知らぬ国らくらくメダル手に入れる
受験して秀の仲間にしてもらう
昏がれの派手バランスをとつて着る
タンゴ踏む羽ばたく鶴の門出だな
若返る薬はないが派手好み
秀才も努力なしでは育つまい
らくらくと大学出たが職がない
ボロ着ておれは派手だと思つて
踏み台にしろと大きな父の背
秀でることない人生の共白髪
秀才も凡才もあり皆我が子

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

お守りは結果次第の舞台裏
春がきて嬉しい悲しい別れあり
散歩するゆとりもらつた定年後
いつだって一歩手前で運が逃げ
お守りを持たせて見送る出雲号
お守りをもつて戦さに行つたまま
霞む春はそこまでホーホケキョ
お守りがきいたかシベリヤから帰り
和江 ク二子 満 菊乃 はるお 汲香 みさ子 富久江 みどり かおる 京 重忠 稔 子 永子 美代子 恵美子 聖子 伸子 ちよえ かつ子 はるみ 好栄 博利

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

ひっそりとお守り引揚船に乗り
はたる川柳同好会大阪 水野 黒免報
いくばくかといしと残す夫婦碗
どこまで冬どこからが春衣更え
新聞を楯に夫婦の朝ごはん
どこでも白を切るなら別れます
資金なく練られた構想書いた餅
乾杯のどこまで続く御挨拶
まあえつかどこまで伸びる妻の羽
ここ一番決めるに心震えてる
エコポイント買物プラン練っている
気遣いにどこまで気づく人だろう
年寄りをイライラさせるな新政府
どこまでが限度か鳩の飛翔距離
練り直す予算政府も四苦八苦
どこまでがボケか本気が浪速つ子
雨霰波風越えて妻も無事
けちん坊を隠す芸です無口です
また来たの顔を壁める広辞苑
葉隠れが色濃く残る佐賀ん町
受け立つ横綱相撲ぜひ見たい
亡き父の金言たからとして生きる
とび去った枝ふるえてる冬の空
清泉 契子 柳童 春代 幹治 長一 信男 勝 桂子 雪子 久子 正子 祥風 禮子 黒兎 蜂朗 四郎 晴翠 輝夫 勝規 高明 實

城北川柳会(大阪)

伊達 郁夫報

お料理はコピー出来ない生の味
神様と遊ぶ赤児を見てあきず
水面の光モネに重ねうつとりす
冗談も本気も捨ててゆく浄土
冗談にしては核心突いている
寒い日は炬燵にとらえられて過ぎ
帰農して流石に農の深さ知る
人生に金のお化けがつきまとい
鮎が溶け鞭が覗いたマニフェスト
忘れると言う才能が僕にない
後日談書けば己が嫌になり
文楽の至芸うつとりしてしまふ
冗談で済まされますかマニフェスト
ATMコピーした札撥ね返す
冗談の一つも入れる処世術
靴の減り三兄弟が父写し
まだ捨てたものでもない試着室
水仙に負けぬと傘寿背を伸ばす
冗談を売って明日の糧を買う
私のコピーが欲しい寒い朝
タンス預金冗談でしよう億の金
川柳が若さの秘訣九十二
出る杭が叩かれ強くなる若さ
原爆の話に若い瞳がうるむ
狙い打ちされた企業の儲け過ぎ

容子 智恵子 あさ子 令子 美智子 妻子 とし子 かずお 勝弘 桂作 ルイ子 正 弘風 章久 麗 じゅんこ 克己 和夫 明子 一步 萬的 集一 倫子 東吉

朝日浴び今日の闘志に火を点す
堅物の冗談に輪が和み出す
一線を越えると顔に笑みが出る
スローライフ道草してもそう生きる
ほころびた梅をみせたまし車椅子
その時の風に合わせた速度
ルンルンの予定は無いが陽がぬくい
五線譜で若い命が乱舞する
逢うて来た余韻うつとり見る鏡
義理チョコは義理チョコなりにもの申す
竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

直樹 たもつ 野鶴 修 志華子 典子 賢子 昭 朝子 柳弘 房半 一 節 弘 蘭 栄 笑 慶 淑 汎 力 千代美 規代 輝恵

おしゃべりの下手な雀もきつという
豊作に雀ロックを踊るだろ
寒南天すずめに罪はないのです
この愛はエゴとの境界線にある
あたたかい心いたたく寒の雨
たつぷりと墨含ませて書く祝
電子辞書頭の固さあざわらう
今日の活力自転車漕ぐと湧いてくる
何しよう朝からワクワク日曜日
まだ二歳やつと二歳の反抗期
川柳花の輪(大阪) 妻谷 重風報

静風 幸子 敬子 あゆみ 厚子 栄香 太虚 比呂子 千枝 史子 重風 一幸 やすの 音成 風 周作 楽鬼 泰子 善栄 克衛 薫

川柳塔おつば(吟社香川) 川崎ひかり報

波立てず終の住家に腰おろす

八重子

見栄を張る明日の家は火の車
鑑定で家宝床の間あけ渡す

幾山河越えて掴んだマイホーム

我家にも埋もれてないか埋蔵金

一瞬に百万家屋と人を吞む

年金の家計にひびく義理と見栄

農しない条件嫁の細い指

家庭から昭和だんだん姿消す

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚 恵子報

両の手を合せ父母に感謝する

スピーチの上手さ説得力がある

神さまと話す小銭を絶やさない

おぼろ月逢えない人にあえそうな

世間みな知っていますよ裏献金

蛭梅が咲いて明るくなった庭

新聞をにぎわす種に事かかぬ

貸し借りもなく春風をそっと抱く

目に入れた孫を育てる虎の巻き

「いのちを守る」何と軽々しいスピーチ

朝刊は天気予報を一番に

花びらがなびく余生がうるおつて

長生きをしようお年玉をふやそう

自分史を飾るきれいと止める

さわつてはいけな桃のほつこりさ

鯛の涙見てから刺身箸が出ぬ

賢

ひかり

いさむ

くに子

放任

よしみ

弘

初恵

恵子報

章江

恵子

千代

ゆき

なみ

蘭

亜弥

やえ

富美子

麗

春枝

ふみ

晶子

てい子

未延子

瑞枝

川柳ささやま(兵庫)

遠山

可住報

溝深くならないうちに策を練る

女の性あれこれ袋一杯に

世の流れ友と一緒に渦の中

吊橋の上から見れば深かろう

流行に少し遅れて子を抱いて

年輪を幾重かさねて深いしわ

深呼吸して次の手を考える

乗ってみるブームについて行きたくて

少子化へベビーブームを期待する

売物はすべて袋で化粧され

育ち盛り手が止まらない袋菓子

亡き夫と深い絆はなお続く

親不孝俺が作った深い皺

夕食へ笑い袋を一つ盛る

川柳塔なら

坊農

柳弘報

あの出会いなければさつと王子様

とつおいつ夫婦不思議な縁ですね

孤独とは無縁いつもの長電話

人柄に魅せられ人は寄って来る

発車する手前でヘソクリくれた母

竹の箸ほんのり温い友の骨

星空を妻と眺めるこの不思議

陽に褪せた表札縁だと思ふ

掃除好き言った手前で駆り出され

縁遠い娘二人もかかえてる

ご近所の手前は仲のよい夫婦

乾杯の手前でよぎる血糖値

エンマから招待状は未だ来ない

ほんのりと酔って仮面を脱ぎ捨て

ひとつずつ錆はずしてからの縁

罪になる手前で口に指を立て

鉛一つ貰ってからの尻尾です

少女から女ほんのり胸の線

了見の狭い男の手前味噌

神様に誓った手前まだ夫婦

ライバルの手前だこは握手する

ならやまの手前で粘るだけ粘る

手垢しむ辞書と切っても切れぬ仲

別れぬと決めて東の空しらむ

背中合わせの背に残しておく温み

幸せの手前神様横を向く

譲られた席も何かの縁だろう

手招きに弱い男の尾髭骨

一合の父ほんのりと生き仏

悪友がそろそろ来いと言う浄土

お見舞いを待つ母さんの薄化粧

ウソ一つ吐いてほんのりが闇に

楕円形になってしまった縁がある

死の淵を覗く手前にいた仏

ふりこ

勝弘

いさお

集一

弘風

一風

恵美子

比呂志

恵

寿美

柳弘

富子

良一

卓

完次

真理子

理恵

洋子

美千子

道子

隆盛

國治

加央里

弥生

義

朝子

手招きにあつさり落ちた青林檎 森子

川柳茶はしら愛知 板山まみ子報

飢餓の子へ分けてあげたい食べ残し 迦行
言い分に合わない部分四捨五入 雅美
真ん中の育ち要領だけ覚え かつ子
タイムカプセル抱いた夢が眩しすぎ 幸子
沢山でじやれてしゃべって子は育つ 百合江
子に負けてうれし悔しい腕相撲 美千代
しょうもない大人になるなモミジの手 まみ子

長柳 会大匠 村上直樹報

気合負け週二にされた休肝日 直樹
追いつかぬ脳へ時どき活入れる 孝代
早起きをして節分の豆ひろう 正博
着飾ってみてもデートの誘い無く エミ
結論を急ぐと気合から回り よしお
ばりばりも退職すれば妻社長 マサ
退職後使い走りの日課です たけし
足元に気をとられすぎ雪被る 靖博
恋敵目力勝負気合負け もこ
気合入れ包丁握る晩ご飯 正一
ボケツトの中で固めた拳解く 英美
気を使う相手が欲しい臍月 明子
婚活にやっと出逢った赤い糸 けい子
いつかまた使つと物が捨てられず 幸子
勘違いしたウイंकが走り出す ヒロ

神様に五円ででかい願ひ事

綾取りが模様を変えて右左
五臓六腑酷使に耐えてくれ感謝
桜追い僻地いとわず旅重ね
母の香をバッチワークに秘める布
八十路すぎ気合を入れてフィットネス
都合よく使い分けてる物忘れ
迫る老い八十路の気合あらがえず
政権に武士の気合が欠けている
妻にノー言う時少しいる気合
使わずに大事にとつてある啖呵
アスファルト割つて気合の芽の息吹き
階段が軋む小さなわだかまり

南大阪川柳会 吉川寿美報

愛のある暮らし信じている歩幅
中の上信じたあれは夢だった
本当の友だ付き合い五十年
日本の明日を信じる子の瞳
まだ傘寿鉛筆もてる余曰ある
可能性無限に秘めている余曰
余曰とはおまけと思ひ大切に
教科書の余曰に君の名が残る
余曰には真つ新な僕曝け出す
尿酸をたんまり溜めて痛風に
たんまりの赤い糸から引くハズレ
街の子にたんまり雪のプレゼント

敬二

光弘
和代
明信
三和子
輝子
芳野
幸雄
富美子
正美
淳司
一慧
和子

柳伸
一步
太郎
楓楽
タカ子
栄子
忠昭
清
ダン吉
勝弘
弘子
弘泰

金はないがたんまり持っている自由 柳右子

知識欲たんまりあつてすぐ忘れ
神棚に余曰預けてウツフツ
マニフェストの負債背負うて呱呱の声
バラ色に輝いていたマニフェスト
マニフェストみたいになったラブレター
四捨五入どっち付かずのマニフェスト
傘寿とて女で居たい難あられ
居酒屋で他人同士がぬくぬくあい
バンクーバー肉食系に敵わない
是か非かは損か得かを見て決める
つじつまを合わせて肩の荷が下りる
巡り来るあの日へ枯れぬ涙壺
潤り口潜れば佻びの異空間
赤ちゃんが笑えば家中が笑う
たんまりの愛を母から仏から
マニフェスト書かせて妻が監視する
趣味読書マンガばかりですけどね (告) 修
還付金の手続き済まし買った服 ルイ子
あんな事言ふやなかったマニフェスト (囁) 修
一票を無駄にしたかもマニフェスト たもつ
アラフォーが何を頼るか恵方巻き 弘風
かす汁のしみじみ旨い寒の入り 百合子

田楽の味噌がこぼれる良い話 紀子

川柳塔わかやま 川上大輪報

四面楚歌抜け道一つくれた母

帆掛け船で世界一周してみたい

どん底で生きたあの日が糧となる

底力だんだん見せてくれる嫁

知恵袋の底は二重三重に

蛸壺の底が私の現在地

どん底で免疫力をみがいてる

今に見ろ底を逆さにしてみせる

これ以上底が無いから頑張れる

おべんちゃんら言わぬ鏡を持て余す

万華鏡夢の続きを追いかける

自分史の影も写している鏡

華やかな過去を憶えている鏡

現実には厳しいものと知る鏡

鏡には私の宇宙つまってる

厚化粧鏡でニコリ出番待つ

白寿まで翔べるつもり朝鏡

おたがいが鏡になって夫婦です

あなた次第と冷たいことをいう鏡

どんびしやりあなた射止めた千里眼

赤ワイン過去をびしやりと切り捨てる

春最中恋の予感ばどんびしやり

政治にもびしやりとパンチ効かせたい

勧誘をびしやりと斬った舌の牙え

横車びしやり押さえた姉御肌

風の彩はびしやり涙を許さない

紀久子

泰女

稚代

よしこ

三男

大輪

小雪

美子

英子

輝子

精子

和香

俣子

保州

ほのか

真里子

めぐみ

裕美

徑子

怜

緑良

よりこ

寿子

富美子

義雄

あきこ

川柳若葉の会(大阪)

宮崎シマ子報

ゆらゆらと澱に遊ぶ花筏

遊んでるみなやさしくていいお顔

鳩遊ぶ雨の公園しずかなり

女一人ケーキの後はアルコール

春を待つ遊びごろの裏表

残された時間ぎりぎりまで遊ぶ

思い切り遊んでませんまだ死ぬぬ

遊ぶのがとても上手で生き上手

星のロマンもう通じない認知

銀河鉄道の賢治を探す星降る夜

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

しだれ桃屏の外まで愛想する

皆傘寿続く桃組クラス会

桃いろの謎が解けない夜の長さ

女ですいつまでたつても桃の花

てのひらに載せると桃が生きている

愛されてからだ丸ごと春になる

熱さめの身体の奥にまだ少し

CJも悲鳴をあげている身体

リハビリに汗する人に拍手する

朝一番身体の声を聞いてやる

癌に耐えた身体だ恐いものはない

嬉しさは五臓六腑の異常なし

弘直

慶子

香住

喜美子

加津子

ますみ

烈

能子

シマ子

洋子

見清

章久

朱夏

シマ子

太郎

朝子

いさお

和雄

君代

蕉子

美花

森子

身体髪膚DNAに逆らわず

身の丈に合った恵みの米を研ぐ

万物の命育む陽の恵

恵まれて満月になる喜寿の春

娘の名恵と付けた親の愛

恵まれた女が好きで試着室

悲しんではばかりじゃ前へ進めない

つらいけどやっぱり君と別れます

月瘦せる悲しい鳴咽漏れる夜

長崎は一足先に民主職る

ハローワーク高校卒も並ぶ春

困るよな薄い利子から税を引き

沖縄を掘れば骨はね鉄かぶと

体質もリコールですヨトヨタさん

弾よけで甲種合格兄は散る

平等の最たるものは選挙権

基地はもういらんと何でよう言わん

混乱の政界民は置きざりに

名を呼んで瓦礫を掘っている両手

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

身内の小鬼時どき暴れ出す

ライバルにとっても敵わぬ筆運び

割草着に埋める女の愛とウツ

花筏春風乗せてどこへ行く

運はれた種は無欲の根をおろす

柳弘

昭

郁夫

生枝

忠昭

哲男

克己

武

柳昌

篤

一步

勝弘

鈍甲

紀雄

房男

保州

美世子

美智子

六点

則彦報

藤井

紀乃

庸佑

(永)玲子

郁子

満寿已

当たりくじ徹夜で探し見付からぬ
筋書きの通り運んでいて不安

十八娘
幸雀

失恋のショックをバネにジャンプ傘
ウエディングドレスは明日をうたがわず

志津子
きらり

余生とはいつのことやら春の月

隆

じいから孫「生」のベルトをタッチ逝く

佐和子

今日中にお召し上りと言うケーキ

宇乃子

若作り見抜く性能いいカメラ

千恵子

戦後史に密約という核の傘

早人

水ぬるむ傾いた声で猫が鳴く

佳恵

白湯の甘味舌にしみ入り春浅し

夢

精一杯生されば無一物でよい

則彦

曇天の行く手に薄日差す安堵

千枝子

ゆつくりの子供を急かす親のエゴ

堅坊

ショックから立ち直れずに石になる

寿美子

公園の春を彩る雪柳

靖鬼

梅の香がほんのり残る指の先

満子

妻にまた恋をしそうな春の宵

尚士

ビリオドを打つたら歩き出せるのに

葉子

一周忌亡母は白寿になったはず

見清

復活のラケット冴える足運び

美智代

真つたな暮らしを運ぶ蟻の道

美義

ショック死が一番楽に死ぬそつだ

富美子

ベッドまで軽く運べる母愛し

求美子

倉吉川柳会(鳥取)

竹信 照彦報

この雨で小庭の花がすぐに咲く

玲坊

雨漏りとひとしじに耐え生きのびた

鬼一

大雨に耐えた番傘骨重品

日出子

雨降って地固まるまで雨に泣く

恭子

有難い雨が降るから生きられる

賀寿恵

雨の中芝生積みして泥ネズミ

重忠

下駄箱の側で母さん待った雨

萩江

SLの時代景色がよく見えた

けいこ

老いのはゆつくりの方が良いなあ

風露

遅咲きと言われながらもまだ咲かず

由紀子

よいいどん何をさせてもびりのびり

康子

遅い日は角を隠して鬼が待つ

酔美蓉

ごめんねは遅くなるほど溝になる

玲子

特価品一足遅く売り切れる

美代子

遅い人みんな待つて旅のバス

喜美子

路の墓春いつばいのいい気味だ

龍枝

猫の声不気味に響く春の恋

よしえ

出どころのわからぬ資金気味悪い

瑞子

気味悪いゲゲの鬼太郎福の神

英子

小気味良く舌が回ったことが無い

克枝

風邪気味ね鼻かむ度に化粧消え

和子

いい気味だ俺を負かした奴も負け

泰輔

袖子羊かん甘味ひかえて香りよく

たかこ

観光にお化け屋敷のはせ気味

小生

鶏は天を仰いで水を飲む
夫婦仲毎回変わる水加減

石花菜
いさお

骨の髄凍らす冬の水仕事

茶子

にんげんにもどれる水をもう一杯

螢

戦争は水鉄砲の平和主義

次男

清らかな水にサンショウウオが住む

和枝

お水取り籠松明が春を呼ぶ

貞子

雪だけの水を集めて大河なる

美津恵

雨の日は鎌と包丁爪も研ぐ

照彦

八尾市民川柳会(大阪) 宮西 弥生報

チューリップ話し相手を選ばない

扶美代

人間の柱がすばんと抜ける酒

朝子

ふる里で出会う国訛の会話

いさお

一度だけ会話をしたい宇宙人

紀雄

春風に狙われたスカートの裾

あかり

合掌をする背に鬼も近寄れぬ

留里恵

指先へこころが通い合う会話

賢子

俗受けを狙う漫才徴臭う

幸生

巢立つ子へ手を振る母の丸い背

秋子

年金を国と娘に狙われる

草風

鷹の目は一直線に的を射る

柳伸

軽い夜具を一枚そつと母の咳

耀一

阿修羅像坐す空間に立ち竦む

寿鶴

合掌のかたち曲る母の腰

欣之

大穴を狙い人生狂わせる

一風

イケメンを狙う少女の水鉄砲

弥生

はびきの市民川柳会大団 徳山みつこ報

お買物魚のおいしい生鮮館

真一

青魚頭良くなるよく食べる

フジ

ピラニアの歯を羨んでいる入れ歯

六点

世界中の鮎の旨さ知りすぎた

ちづる

骨抜いた魚はどこか頼りない

アヤ子

原形も知らない魚が膳にのり

美代子

妻無言まるでオコゼと睨めっこ

光男

地図添えて見頃近しと梅便り

美喜

天神さん盆梅展でにぎわって

正子

魔線の駅に律儀な梅の花

一壺

今月は梅林にする飲み仲間

庸佑

梅干しになって届いた里の梅

泰子

紅梅よ孫もい娘になりました

みつこ

物置に夢の欠片を積み上げる

一知

地球から核廃絶の夢を見る

敏

亡き夫の笑顔は夢の中にあり

静子

孫の書く夢という字ははみ出てる

ヨシ枝

就活や婚活夢のない世相

久仁子

捨て切れぬ夢とみちづれ古棉の坂

いさお

肩で息それでも夢は追うている

ダン吉

左右千鳥足にもリズムある

千鶴子

朝の音母の組使う音

猿杓

浮き浮きと春のリズムで進む恋

りつえ

台所ワイフのリズム上機嫌

章司

元氣印リズムを変えぬ腹時計

悦子

湯どうぶがコトコト食べ頃のリズム

扶美代

プラス志向のリズムで坂を登り切る

瑠美子

西宮北口川柳会(兵庫) 黒田 能子報

先輩も後輩もない花の下

朋月

頂上へソチの花咲け真央の舞

祐康

道真の声聞えるや梅の花

比ろ志

名も知らぬ花が励ましくれました

わこ

散る花の行方に心遊ばせて

浩司

はな舞台都おどりへ春の風

奮水

草萌えて遍路の旅の鈴が鳴る

毅

野焼あと若葉が萌える春息吹

基輔

春迎え心の中の雨も止み

玲子

転校の子へ隔てなく若葉もえ

美籠

はめられてうすもいるに萌えている

哲子

朝あるき冬乗り切って萌える土手

耕治

山に雪日溜りはもう浅みどり

哲男

午前様囁くように戸を叩く

盛夫

こつこつとためた小銭を娘に貢ぎ

武臣

こつこつと等身大の石を積む

秋果

こつこつと貯めたポイント期限切れ

いたる

こつこつと論吉と勝負しています

順子

遠慮してノックをします子ども部屋

歳子

コツコツと五百円玉貯める妻

正和

こつこつと誰かが老の戸をたたく

直

月並な言葉に通う親子の血

茂

すぐばれる嘘だからこそ言うてみる

りこ

手話習う四季の歌なら出来ますが

光子

渡し場に橋かけられず碑のみ建つ

佐紀子

焦つても次の一手が浮かばない

光久

娘は嫁きお若いままの難を出す

緑

居眠りの風呂に一声生きてるか

二英

真央ちゃんの涙金よりダイヤより

キヨミ

亡き父母とまだ話する糸電話

早加水

聞き返す無口な君の褒め言葉

文子

リコルが利かぬ私という車

彰

長年の努力の自負は語らない

美穂

完走しました仲間になれました

忠

ボクの夢素直に聞いてくれる空

孝一

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

今度こそ出番が来るぞ私にも

稔

お迎えの出番は遅いほどが良い

重忠

水音のする方角へカーブする

螢

別嬪がひよいと出てくる魔のカーブ

完司

人相は眉のカーブで変えられる

一京

三角を曲がれば老いの花館

忠良

疑餌鉤にカーブをつけて鯛を釣る

蟹郎

あがくほど落ち目のカーブ急になる

たぬ

手で描いた線の丸みが温かい

幸安

くねくねと若葉マークが肩を張る
 生きのびる私へカーブ待ち受ける
 人生のカーブここぞと気合入れ
 百歳の笑顔に検査などいらぬ
 悪いことしていないのに検査され
 検査受け素的な老いを生きていく
 良性のポリープですとカメラ笑む
 浄化槽検査のひとつに札を言う
 嘘をつくたびに足裏厚くなる
 自分の足を地に着け歩く有難さ
 分つてはいても飲み代足が出る
 別れの日胡坐の上に母を抱く
 気がつけば母の足跡たどつて
 有り余るお金を足を引っ張られ
 足跡にせめて一句を残したい
 スリッパも重く感じる再検査

川柳クラブわたの花大匠 西川 義明報

強敵五輪親子でつかみメダリスト
 同居して少し煙たくなる息子
 嬰の僕を抱くぶきつちよな父の指
 検診に通う道には四季の花
 歯車の咬み合わぬまま半世紀
 口車乗ってはまった敵の罠
 老いてなお遊びと学ぶ心持つ
 脳トレで明るく生きる努力する

和枝 雅女 和子 一瑤 公子 菖子 幸枝 よしえ はるお 孝男 圭一郎 茶子 節子 清帆 幸子 美恵子

夫のアルバム剥した跡が気に掛かる
 梅の香に誘われ春が急ぎ足
 アルバムの剥した跡よ若かった
 万葉の時代も今も子は宝
 親馬鹿は親になつてもわからない
 どなたから贈られたやら花に露
 アルバムに火傷の跡が残つて
 敵情を探りに行つてまたミイラ
 もしかしてオレは女房の宝物
 どちらが残る二色のボールペン
 まだ迷う我を笑ろてる昼の月
 サスペンス私の脳の栄養素
 晒し首耐えてクルマを守るボス
 色あせたアルバム今日もようしゃべる

富柳 会大匠

古田 千華報

階段が軋む小さなわだかまり
 人生の階段登るゆつくりと
 朱をすこし混ぜて老後もよく笑う
 一区切りつけてジャンプをくり返す
 これ以上薄くは出来ぬ面の皮
 階段をころがり落ちた自尊心
 逢いたさに三段跳びに駆け上がる
 阿吽坂少し熱めの酒を注ぐ
 父母に嘘は言えないありがとう
 凍てぬよう薬で包もうと志

宏至 義明 いつふみ 宏 正春 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子 和子 ますみ はじむ 一風

ときめきの火種は今も掌の中に
 バーゲンの目移り一日の殺気
 フランスの味を気にする五つ星
 踊り場に噂話がたむろする

箸二膳有つて会話が途切れない
 しあわせのかたち七彩の二倍
 言い訳を聞いてる耳にある不信
 いつまでも布団の中に有る温さ
 染め変えてみせる私の手の中で
 指切りの力強さに嘘がない
 染め変えた着物は過去を封じ込み
 有り余る金ではないが志
 有刺鉄線を飛び越えて来た春
 野の風に染められ男の顔になる
 虫眼鏡活躍してる年になり
 ありがとうだけを残して千の風

ライバルへ嫉妬の風がたむろする
 母の種春の笑いをまだくれぬ
 まだ少し響いてつらい冬の月
 指先にあなたが止る春風
 染め斑のないよう子供育て上げ

川柳さんだ(兵庫)

北野 哲男報

終章はきつと夫の腕の中
 古墳には埋蔵金がありそうな
 発掘が縁で結んだ赤い糸

アキ 登子 田鶴子 留理恵 高鷲 恵 彦次 武人 奏子 寿之 澄子 よりこ よしみ 紅紫朗 糸 欣之 信子 鬼焼 晴美 森子 千華

忠 千津子 千代子

地味な古墳善良な土盛つてある
盗掘にゆつくり眠れない古墳

「それから」婆は遠野の物語
真理つく童話の中に裏表

おしまいが気になる童話演じてる

読み聞かせママのおひさが温かい

湯けむりにばんやり浮ぶ白い肌

サバよんで六十歳と言いい切ろう

神仏効き目ないから十字切る

ドラマだと分つていても出る涙

ほんやりも長生きをする秘訣です

卒業式「以下同文」が気にかかり

雨音を聴きながら読む春の詩

街角に春の景気が覗いてる

ひとまずは本を買い込み満足す

ランドセル鍵を持たせてレジを打つ

電話切りどんだんわいて来る本音

咲阿きり貧乏くじを引いている

雑念を断ち切る気合竹刀振る

翠 洋 会(大阪)

佐々木満作報

生きざまを見せる男の踏んだ数

相変らず数の力でする政治

ありがとう言つた数だけ丸くなる

皺の数多いのだけを自慢する

何回数えても論吉増えもせず

順子	朋月	哲夫	宣子	彰	淑子	一良	ちあき	祐康	二英	歳子	見	裕美	雅司	一泉	好文	ひとみ	正和	哲男
----	----	----	----	---	----	----	-----	----	----	----	---	----	----	----	----	-----	----	----

一生に呑んだ酒代足してみる
夢一つ老妻と築いて無限大

一たす一が二で通らぬその不思議

一年に数回かかる恋病い

数々の記録をうんだ汗涙

礼儀正しい人と正しくのお酒

年とれば礼儀作法は言つとれず

嫁姑礼儀弁え和を結ぶ

礼節を知つて人間進歩する

礼ひとつ欠いて疎遠の道つくる

良いことをした一日のいい笑顔

ラッシュアワー礼儀知らずの長い足

ふらふらと寄つた本屋のいい出合い

徘徊に備えケイタイ持たされる

あの事もこんな大事もふと忘れ

機器音痴孤独ますます深くなる

CMの笑顔信じて飲む薬

すばらしい感動急に小腹減る

福山に惹かれはまった龍馬伝

押入れの中をすい分見ていない

幸せに生きる心を丸く研ぐ

先客と我慢くらべのサウナ風呂

ひこばえの誕生祈る大銀杏

川柳塔まつえ吟社(島根)三島

太陽を迎えて今朝も出る元氣

尚士	滋彦	れんげ	蕉子	恭昌	理恵	知之	弘子	満作	照子	昭	久峰	みつ子	浩二	志華子	叔子	正雄	舞夢	茶々	義	集一	げんえい	千歩	澁丘報	町紅
----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	-----	----	-----	----	----	----	----	---	----	------	----	-----	----

待ち切れず春を迎えに花屋まで
お迎えを身を乗り出して待つ園児

酔い覚めに甘露甘露の迎え水

高齢を迎え感謝の手を合わせ

出迎えは無用勝手に上がりこみ

寂しさを四捨五入して春景色

北の旅一期一会の冬景色

ふるりの景色頭の隅で寝る

昼に見る景色に優る夜景あり

カレンダーめくつて部屋の景色変え

夫唱婦随そんな姿のお山です

本番に向けて刀を研ぐ女

本番は木に竹継いでほめてる

野次がとび本番らしくなってきた

本番を手ぐすね引いて待つている

本番に思わぬ落とし穴が出来

上がり性だが本番は上がらない

ふつくらの笑顔で的を突いてくる

赤い唇ふつくと嘘を吐く

ふつくらの亡母の煮豆を想うとき

ふつくらと恋の綿毛がふくらんだ

見合い席ふつくら男女未来解く

遠い日の記憶ふつくら甦る

語らねば敗戦昭和遠くなる

雪こんこ民話の里を語りつぐ

雨続き雨と語つて毛糸編む

昌枝	芳恵	幸代	長吉	政子	紫晃	薫	たえこ	ちえこ	注湖	茂美	寿代	畔	蘭	多喜	たけし	ゆき	美智子	螢	幸子	柳歩	小生	禮子	スズコ	房子	治代
----	----	----	----	----	----	---	-----	-----	----	----	----	---	---	----	-----	----	-----	---	----	----	----	----	-----	----	----

まないたの窪みが語る左きき

半生を語れば長い私小説

青虫の頃は語らぬ夜の蝶

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

穀報

春や春雪どけ道を闊歩する

鉄人が癒してくれる災の跡

老年の背骨に今も棲む漫画

四コマに頭を縦や横に振り

ほっこりと風を吹き込むサザエさん

本読まず漫画知識で物を言う

川柳と漫画が映す世相感

マンガ好き活字離れが危惧される

ぐるぐると悩みひとつがから回り

美しい花の根っこにある悩み

悩み事一つや二つあつてよい

こだわりを捨てたとたんに晴れた霧

思い切り喋ればスラーと悩み消え

生きてれば悩みあるのが当り前

川柳のお題に悩み初心者

悩み事何でも言える無二の友

悩んでも二十四時間減らないヨ

生かされて悩みつきないケセラセラ

幾何模様一糸乱れぬ雁の列

泣いている赤子の言葉分かるママ

さすがだな貰う氣にさせるコマーシヤル

桂子

知恵子

浜丘

みつ子

洋一

和郎

政一

千賀子

基輔

盛夫

寿朗

能子

美恵子

忠貞

弘

武彦

和恵

芳江

勤

恵子

悦子

茂

武臣

さすがだと友の成功祝う酒

歌声はさすが自慢の親ゆすり

虫食の野菜にはつと安堵する

春眠の夢故郷の野で遊ぶ

微笑みは貴方に贈るブレゼント

前菜の彩り遊ぶ白い皿

老いの恋背筋伸ばして杖を捨て

多事多難仕分ける人がはしくなる

川柳を亡き後の杖として

三国志漫画だったら読破でき

ポケットにちよつと寒さが残る春

まっ白な紙も炙れば夢が出る

菜の花と風のマーチに乗っている

度の過ぎたお世辞に透ける下心

京都塔の会

都倉

求芽報

ひやひやして見た番号に桜咲く

白地図を辿る我が子が案じられ

シルバーが余興にマジックなどするな

予想外の長寿に介護あわてだす

正月で想定外の肉が付く

時間外仕事はしない主義通す

戦力外と宣言された日の長さ

最初はグー想定外に勝ち残る

独居して猫と暮らすも予想外

時間外なくなり家でカッパ巻き

繁義

山弘子

光久

美穂

夏子

札甫

浩司

寛子

利子

順子

無限

穀

いわゑ

楓楽

満子

昭

求芽

典子

福子

庸佑

由美子

昌乃

和友

公子

予想外でこずった子の親思い

規格外青いりんごを慈しむ

トラウマによく利く座禪堂参り

通い合う心で人生二重唱

ランドセルが歩いているよう通学路

通い離婚の率が減るだろう

軽度数 見栄で選んだ老眼鏡

真つ直ぐに生きてきたのに歯が歪み

興奮の語尾が震えている我慢

片意地さ自分で我を笑つて

肚の虫が起きてくるまで我慢する

忘れたと言つが我慢してる顔

ご時世か息子の嫁の言うままに

制御不能妻の我慢の切れどころ

リハビリに耐えてメダルを掴み取る

我慢には縁ない人が横にいる

シャツ出しに我慢がならぬ日本人

煮えたぎる気持ち抑えて茶を入れる

年の功我慢をかわす術を知る

絡まった我慢の鳶は切り捨てる

我慢強い握り拳を持っている

川柳塔打吹(鳥歌)

野口 節子報

桜咲き雪をかぶつてふるえてる

花が咲くような笑顔の君を待つ

昔の写真古芳を知らぬ花のように

万紗子

志寿子

肇

英旺

綾子

としこ

ますお

とし子

欣之

ふりこ

比ろ志

文代

かずお

弘之

葉子

益子

則彦

美義

宏子

啓子

孝一

貴恵

孝恵

克枝

満開を過ぎた花でも花とする
 花かえて香り楽しむさま
 春雷に花のなきがら置きみやげ
 花いっぱい植えて寿命と根くらべ
 内心は破るつもり金無心
 破れがさ田んぼのかがしぬれぬずみ
 血管が破れぬように酒と塩
 約束を破るつもり休肝日
 約束を破る雀の二枚舌
 人生は破れかぶれで丁度いい
 隠しごと見破る妻の第六感
 猿が出る人が掟を破るから
 面の皮破れないのは死んでから
 人間の殻を破って猿になる
 間違っても結果オーライ金メダル
 シンフォニー終り間違え手をたたく
 酒の上のバカな間違い数知れず
 年金の間違い誰が保証する
 我がノート誤字も脱字も顔揃え
 間違つてできたはずの子できがい
 間違いは知ったか振りの土瓶口
 間違いを偉いやつほど認めない
 間違いは浮気亭主に惚れたこと
 間違いを認めることのむずかしさ
 それぞれの意見が瘤となり無口
 ごっくんこ互いに瘤が出てあいこ
 力瘤今が見せ場と見栄を切る

清 和子
 みち子
 螢
 よしえ
 久芽代
 陽之助
 紀の治
 龍枝
 紀美恵
 たけ代
 重忠
 富恵
 芳光
 三津子
 駿三
 公恵
 小生
 和枝
 義人
 滋
 玲坊
 勝憲
 くにこ
 玲子
 芙美子
 いさお

駱駝の背きつい夕陽にこぶの影
 手探りで見付けた瘤にある不安
 木のこぶに仏の顔を彫っている
 ヒマラヤも富士も地球のたんこぶだ
 特売に見せた女の力こぶ
 サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報
 交際自由だが責任は持て
 本心が見えて距離置くおつきあい
 いい出会い求めて旅の始発駅
 手をつなぐこともなかった二人です
 血糖値酒と交際断てと言う
 交際中見抜けなかったのが誤算
 河豚なしのヒレ酒だけのおつきあい
 交際費増えて四月はギブアップ
 やぶ椿ひっそり相手待っている
 気負いなく珈琲をのむだけの仲
 お付き合いいつもいつでも思いやり
 土壇場で差し出す友の手が温い
 援助交際あつたらんと社会病む
 ゆつくりと愛を育てている途中
 交際の始まりシンバルが鳴った
 川柳塔すみよし(大阪) 岩崎 公誠報

禎元
 美代子
 善江
 泰山
 節子
 房子
 千代
 加お里
 昌紀
 久仁雄
 光久
 蕉子
 美智代
 いわゑ
 義子
 みつ子
 たもつ
 楓楽
 扶美代
 希久子
 公誠報
 桃花
 一歩
 太郎

作業服汚し火花を散らす父
 泥んこの汗にまみれた子の笑顔
 どれどれのユニホーム着た孫はたち
 どれどれと流れてないか私の血
 社の噂もつれ纏れた末左遷
 どれどれの作業服にも自負がある
 どれどれの心をかくし美辞麗句
 日暮れまでどれどれになり兒と遊ぶ
 千鳥足またどれどれで帰宅する
 さらさらの血液目指し一万歩
 どれどれの血を化けて出るほど恨みなし
 どれどれの関係ゆえに切れぬ仲
 八起き目はどれどれの坂よじ登る
 権力に金が絡んで秘書が泣く
 来客の時はサラサラ嫁姑
 煮崩れて美味なカレーは母の味
 どれどれと二月のウツが顔を出す
 どれどれはどれどれなり的美顔術
 床に臥しどれどれとした過去うかぶ
 どれどれになつて稼いだ札束だ
 思い出はどれこん遊び紙芝居
 鳩尾に溜まるどれどれした別れ
 愛憎がどれどれ渦を巻く男女
 どれどれになつてみなさい民主党
 兄弟をどれどれにした遺産分け
 ユニフォームどれどれにして褒められる
 その顔じゃもう無理なのにどれ美容

ばつは
 のん子
 篤子
 ヒロ
 美籠
 舞夢
 チエコ
 まつお
 芳香
 温子
 かりん
 末吉
 シマ子
 裕之
 克博
 りつえ
 哲矢
 柳弘
 定子
 日の出
 萌
 岳人
 賢子
 昌紀
 遠野
 五月
 蕉子

雪解けの道を通つて春がくる
どろどろになっているのに気付かない
薬漬け右脳左脳もどろどろに

尼崎尾浜川柳会(兵庫) 田原 一兆報

半音階下げて目線を子に向ける
はめはずし肩を頼つた千鳥足
はらはらとした子に今は頼つて
深呼吸ひとつ緩帳上がり出す
大人の恋ダンス一緒に踊るだけ
赤飯炊いて定年の夫待つ女房
ありがたや娘に頼らずにすむ暮し
カーリングわが家に活かす床掃除
庇いすぎ頼りない子になっちゃった
むつかしい姑だがやはり頼りです
私の番人と言う字をのみ込んで
老いの身を庇つてくれる有難さ
あり余る好奇心ゴミの日のカラス
ああとヨタ独走神話にブレーキが
不細工な男に頼る不幸せ
苛めて嫁を頼りの紙オムツ
孫二人軽く受けたが持て余す
リクルート濃紺青広朝の靴
花束を抱いてエヒロは舞台裏
廃業で定年となる小商い
蜘蛛の糸みんなが頼るから切れる
妻にない色のあなたに惚れました

半 銭
朝 子
公 誠

一 兆
よしひさ
雪 菜
政 江
柳 明
野 薫
亀 子
勝 巳
あかり
美代子
里 江
江 美
求 芽
祐 康
朋 月
五 月
イサミ
奮 水
彰 彰
遠 野
靖 鬼
かずお

頼りない人やがうちは好きやねん
幸せは定年以後も忙しい
終着駅ちあら視野によりり出す
お言葉にあまえて弱音吐いている
真心に心の衿を正さるる
生きている証しと思う肩が凝る
子を庇う愛の言葉が見つからぬ
定年で名刺の顔を裏返す
庇いなりでせすに見守る愛もある
陰にだけ日向に優し母がいる

岸和田川柳会(大阪)

仲谷 弘子報

秀才もダメも証書はみな同じ
卒業の次が決まらずフリーター
制服の第二ボタンは今何処に
人間を卒業するにまだ未練
不況でも被災へ愛の寄付の額
仕分けですとどん数字削ります
孫と風呂目かぞえるの早いこと
につこりですましてくれぬ山の神
森羅万象総て数字と共に生き
数字ばかり追うて淋しくないです
よし悪しを母は静かな目でせめる
攻撃はするが守れぬ僕の囲碁
物言わぬ人がずるいとせめたてる
正論で攻める雑魚にも骨が有る
口喧嘩せめすきてから自己嫌悪

耕 治
哲 男
紀 乃
菜々子
美 義
由美子
海 童
比ろ志
キヨミ
美 籠

香 代
和 美
ゆ い
隆 昭
淳 風
幸 子
若 芽
仁 緑
ダン吉
はるえ
玄 也
泰 弘
力 子
房 枝

川柳ねやがわ(大阪)

籠島 恵子報

だし抜けに詩の一行が浮かぶ春
早朝に猫の叫びに春を知る
だしぬけは御免老いにもある都合
だしぬけの別れ話に狼狽える
だしぬけの誘ひ懐確かめる
啓蟄も自然の摂理デリケート
気遣いをし過ぎて孫に嫌われる
また来たね花粉症にはデリケート
輝く陽吸って満腹です布団
春雨に濡れた二人に赤い糸
就活はもう終わりたい春の雨
やつと春猫も私も落ち着かぬ
巣立つ子に背を押すような春の雨
つつましいが輝く希望だけはあ
ちらほらと恋もサクラもいま序曲
いい友に出逢えて明日が見えてくる
春雨に相合傘で手をつなぐ
こほれ種春の恵みに芽をさます
春雨のような友居てあたにか
春雨が目覚しになる森の木々
ブームなのか続けて句集載いた
プラタナス芽吹いて春が輝いた
海越えて黄砂の旅は我が家まで
青竹が一本つつの天を持つ
束の間を輝いていたしゃぼん玉

義 泰
浅 子
洋 子
珠 子
東 吉
茂 茂
俊 昭
権 代

美智子
祥 昭
弘 一
洋 麗
鈍 甲
朝 子
一 風
ただよし
柳 弘
ルイ子
弘 風
さち子
茜 茜
かすみ
郁 夫
仁 清

青空の下を駆けたいベットの眼
旅みやげ僕より先に着いている
川の字で妻に寄り添う猫と寝る
旅土産に残した土地の唄

ペットブームの影に虐待子供の死
春雨に迎え待ってるランドセル
途中下車ここから旅が始まった
ふるさとが輝いているウエルカメ
布団の中で哲學してる寒の朝
残り香をかるく叩いて干す布団
赤鬼の涙もろさを見た童話
二代目が家訓の額を下ろしてる

川柳大阪

長井

善純報

誕生日嬉しい電話孫の声
誇らしや明治生まれの母が居て
予算案減らすつもりが増えている
冬山を甘く見てると大誤算
何もかも誤算一からやり直そ
ペン先につ誤算が隠れてる
続投が誤算になるよ小沢さん
派遣切り儲け一番するからや
財界は民主の大勝想定外
JAしが泣く赤字路線の後始末
退職金当て込み立派な家を買
ああ誤算早とちりして結果出す
新型のワクチン余る大誤算

賢子 博泉 敬 薫 美江 亜成 恵子 一炊 あさ子 庸佑 壽男 善純報 洛醉 隆司 一歩 義明 一風 芳香 勝弘 美世 紀雄 向日葵 珠生 功 章久

ダム工事誤算で済まぬ税金や
民主党誤算続きに四苦八苦
あれ程のヒントで答えまだ出ない
知ってる顔だが名前出てこない
優しいが何をさしても鈍い人
スローライフ鈍行の旅あわてんと
鈍いふりまた母さんに救われる
鈍いからいつも火の粉を浴びてます
定年後数段上の妻を知る
温暖化だんだん自然の美を侵し
階段の下りに老いが邪魔をする
正論を吐けば階段きつくなる
梯子階段昇る途中で左遷され
上段の構えカマキリプロポーズ
石段を登る汗から無垢になる
女性には生きる手段がたとある

川柳塔さかい大阪

河内

月子報

招かざる客時計の前に座らせる
放ついても主人浮気の能がない
親になりよう判ったか親のこと
招かざる母親つきの初デート
アル中のようにサブリを飲んでる
保険屋は死なないことを望むだけ
色あせた招待状に残す悔い
来賓は直ぐに席立つ人ばかり
アル中になるほど飲んでまだ元気

かよこ 照月 まつお 五月 和 丹吉 鉄心 彦太 川童 美花 信醉 青道 柳弘 朝子 善純 好 像山 時雄 雅明 和夫 唯教 公誠 玄也 朋月

家中のいちばん後できつい風邪
本当を知ってと言えぬのがつらい
イケメンの毒にあたったことがない
本心も尻尾も隠しのし上がる
星月夜しみじみひとり軒の下
同じもの食べて僕だけ毒あたり
豊作でしんどいでしようのんびりと
アル中と本人だけが認めない
微笑んで障害の子と乗り越える
土砂降りのはとは蛙の面をする
捕鯨船シーシェパードにノーサンキュー
はじめからオバハンだったわけじゃない
焼肉の中毒メタボ夫婦です
敗けいくさあとで悔んで何になる
欲しいまましこたま盛った野の香り
同じ物食べて僕だけ救急車
中毒になるほどはまる手打そば
だいぶ鈍うなつたとあとから気付き
年の順わたしはあとで参ります
一人足らぬ時招待のかかる鴨
さぼつた掃除を春の陽が叱る
おい妻よ僕よりあとで惚けてくれ
夕焼けのあとと寂しい空の色
差別され値上げされてもまだタバコ
中毒にならないように飲んでます
梅だより出して大掃除をはじめ

飯子 扶美代 みつこ りつえ のん子 冬虹 綾乃 さくら 千代 五月 八千代 としお 篤子 妻子 ゆきの 舞夢 たつお 天笑 かりん 健吾 明子 愿 童之介 敏治 日の出 月子

第11回柳都岡山の会川柳の集い

日時 5月16日(日) 午前11開会
会場 J R倉敷駅ビル6Fホテル倉敷
川柳トーク 『川柳とわたくし』

柳都主幹 大野風柳

宿題「微熱」小島 蘭幸 選(竹原)
「反対」小野真備雄 選(岡山)
「封筒」生駒 聖天 選(弓削)
「足跡」西原 知里 選(岡山)
「雑詠」大野 風柳 選(新潟)

*席題なし

*当日投句締切 午前11時40分

会費 3,000円(昼食・記念品・大会誌呈)
表彰 各題特撰句(川柳こけし)・秀逸
選句に呈賞

パーティ 同会場にて16時30分から

会費 6000円

*大会・パーティは予約制です。

〒710-0055倉敷市阿知1-14-23

倉敷ファッションカレッジ内

山口 貴子 宛

川柳塔わかやま吟社誌上川柳大会

課題 (各題新作2句以内)

「力(ちから)」岡崎 守 選(札幌川柳社)
「箱」あきた・じゅん 選(宮城野社)
「流れる」津田 逞 選(川柳研究社)
「嬉しい」新家 完司 選(川柳塔社)
「朝」小島 蘭幸 選(川柳塔社)
「雑詠(自由吟)」川上 大輪 謝選

(川柳塔わかやま吟社)

受付 7月1日~7月31日(必着)

用紙 自由(便箋に課題と句、〒住所、
氏名、電話番号を明記)

*句は事務局で一句ずつ句箋に清記しま
すので、必ず楷書で書いて下さい。

投句料 1,000円(現金・郵便小為替)

*後日発表誌を送ります

賞 各題秀句に句入りの入賞盾

投句先 〒640-8472 和歌山市大谷831-99
坂部紀久子方 川柳塔わかやま吟社
誌上川柳大会係
電話・FAX 073-454-3123

第34回 全日本川柳2010年鳥取大会

日時 平成22年6月13日(日) 午前10時開場
会場 とりぎん文化会館梨花ホール

〒680-0017 鳥取市尚徳町一〇一五 TEL 857(21) 8700
交通機関 鳥取空港からタクシー20分 J R鳥取駅から県庁方向へ徒歩20分
宿題 第二部(当日投句、11時10分締切)

「蟹」藤原 鬼桜 選 「駱駝」松代 天鬼 選
「格差」小川沢綾子 選 各題二句当日配布の句箋に記入

参加費他 大野風柳・河内天笑・赤井花城・安藤紀業・住田英比古
四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円、昼食他二、〇〇〇円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞 (4)大会賞
ジュニア部門は賞状とメダルを予定

◎表彰式典・前夜祭ご案内

◎表彰式典 平成22年6月12日(土) 午後5時半
(功労者・大会10回連続出席者・川柳文学賞)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野 いさむ
全日本川柳鳥取大会実行委員長 鈴木 公弘

△宿泊・観光ご案内

宿泊 ホテルニューオータニ鳥取・ホテルモナーク鳥取他
宿泊料金・一泊朝食付・税込み 8、400円〜12、600円

日光 6月12日(土) 午後1時〜午後5時 3、500円
▽春の因幡路観光

集合場所 J R鳥取駅南口・午後0時45分 最少催行人員35名様
▽ぐるーっと鳥取 II 人気観光地めぐり II

6月14日(月) 15日(火) 35、000円
集合場所 J R鳥取駅南口・午前8時45分 最少催行人員25名様

宿泊・観光のお申し込み、お問い合わせ
近畿日本ツーリスト(株)鳥取営業所 担当・芦田・前田

TEL 0857(22) 7100 FAX 0857(22) 6904

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸和田 川柳会	15日(土) 午後2時締切 筋・そこなう・たのもし テント	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 ねやがわ	16日(日) 午後2時締切 連休・人相・ロマン・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日) 午後2時締切 うかうか・縋る	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 午後1時半締切 足音・訥弁・変身	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	17日(月) 午後1時40分締切 来る・本音・なんと・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	18日(火) 午後1時から 銀行・話・継ぐ コマーシャル・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 すみよし	22日(土) 午後2時半締切 無駄・浴びる・ゲーム	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸 川柳会	22日(土) 午後1時から 子ども・赤い・怒り	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの 市民会 川柳会	23日(日) 午後2時締切 鯉・心・スタッフ・油断	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	23日(日) 午後1時より 関所・ホルモン・格差	鳥取駅2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
南大阪 川柳会	24日(月) 午後6時から 脂肪・マジック・かなう のんびり	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	24日(月) 午後7時半締切 連休・ポート・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	28日(金) 午前9時半から ライバル・肩・一生・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
京都 塔の会	28日(金) 吟行・光悦寺 〇〇力・揺らぐ・快適	集合10時半 地下鉄・北大路駅 南改札口前 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	1 日(土) 午後 1 時開場 配る・煙・ハーフ・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	1 日(土) 午後 1 時から 掃除・ヒント・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	1 日(土) 午後 2 時締切 意味・知る・無	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	6 日(木) 午後 1 時開場 薫る・柱・便利	奈良市立中部公民館 4 F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町 2-1-24-901 安土理恵
川柳大阪	8 日(土) 午後 2 時締切 スリル・涙・平均	長堀鶴見緑地線京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土) 午後 2 時締切 童心・茶・紛れる・空っぽ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川 柳 塔 みちのく	8 日(土) 午後 5 時締切 拝借・約束・しみじみ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 塔 打 吹	8 日(土) 午後 1 時から 運・断る・煮る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	9 日(日) 午後 2 時締切 効果・土・優しい・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	9 日(日) 午後 1 時開会 シナリオ・狙う・孤独・貝	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川 柳 会	10 日(月) 午後 1 時開場 保つ・草・うきうき・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11 日(火) 午後 2 時締切 匂う・応援・びっくり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町 2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	11 日(火) 午後 1 時半締切 面・溶ける・さりげない	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
あかつき 川 柳 会	14 日(金) 午後 2 時締切 努力・山・喜び・時事吟	ねむかホール (新谷町第2ビル3階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から南へ2分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 塔 さ か い	15 日(土) 午後 1 時から ひと先ず・加減 「ふじた(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑

柳界展望

佳作

親並の成績なのに叱られる
福田好文

何着ても脱いでも気にも
せぬ夫 江見清

其の内に長寿税など取られそう
藤本直

○第19回播磨文芸祭は2月21日姫路文芸館にて開催された。同人の秀句。

油断してゆるめた縄に縛られる
岩崎公誠

○毎年恒例の「身近な怒りの川柳コンクール2009」は3月14日に赤穂大石神社で入賞作を発表。同人の入賞は次の通り。

優秀賞
思いやり予算が欲しい私にも
山口光久

時の川柳作家賞
捨石になるか法話を聞きながら(他8句)
安平次弘道

時の川柳俗雅賞
世を拗ねた子の背にやさしい赤蜻蛉(他5句)
林瑞枝

佳作
親並の成績なのに叱られる
福田好文

何着ても脱いでも気にも
せぬ夫 江見清

其の内に長寿税など取られそう
藤本直

○時の川柳3月号で平成21年度時の川柳社の各賞が発表された。同人の受賞は次の通り。

時の川柳作家賞
捨石になるか法話を聞きながら(他8句)
安平次弘道

時の川柳俗雅賞
世を拗ねた子の背にやさしい赤蜻蛉(他5句)
林瑞枝

○豊中もくせい川柳会の平成21年度(4月〜3月)年間成績は次の通り。
一位上嶋幸雀。二位上村隆。三位山田葉子。四位藤井則彦。五位穴吹尚士。次点早泉早人。

▽柳界動向△
○西宮北口川柳会(兵庫県)では四月に役員を選出した。会長奥田みつ子。副会長山本義子、亀岡哲子。相談役西口いわる。

討報

(社)全日本川柳協会会長 今川乱魚氏が四月十五日に逝去された。享年七十六歳。故人の希望により葬儀は近親者のみで執り行われた。

後日お別れ会が開かれる予定。

○第41回北日本川柳大会は5月16日(日)に富山県民会館で開催される。会費五千五百円。投句料千円。兼題は「支持率」「エコ」「はらはら」「見本」「長寿」「エコ」の共選者。同人の鳥ひかるさん。投句先〒930-0362富山県中新川郡上市町神田6柳瀬あき緒方北日本川柳大会係。締切は5月8日。

▽ご芳志御礼△
○コキ封筒(株)様から塔誌送付用封筒五千枚、その他封筒三千枚のご寄贈を頂いた。

第46回 雀郎まつり誌上川柳大会

「前田雀郎没50年祭・川柳下野誌創刊1700号記念」

課題 「踊る」2句詠 新作に限る

課 題 守(札幌) 雫石 降子(仙台)

選 者 伊藤 正紀(東京) 大野 風柳(新津)

鈴木 如仙(豊橋) 中田たつお(堺)

塩見 草映(松山) 平田 朝子(熊本)

投句料 1組1,000円(作品に現金同封)

用 紙 B5サイズ便箋 タテ書き

受 付 6月30日まで(消印有効)

賞 15位まで入賞句入盾贈呈

投句先 〒321-0942 宇都宮市2-13-12

刑部仙太 方

雀郎まつり誌上大会 係

倉吉市 堀 和子

米子市 紹介者右3人 鈴木 公弘

富山市 紹介者 有沢 嘉晃

大和郡山市 鳥 隆之

紹介者 渡辺 富子

常任理事会 4月7日(水)出席23名。①1000号記念大会関連。②大阪川柳大会の題③同人5名承認④定例確認事項⑤各部報告事項次回 5月7日(金)13時半。

▽新誌友紹介△
豊中市 池田 純子
紹介者 西出 楓楽
米子市 後藤美恵子

第25回 国民文化祭・おかやま2010 川柳作品募集要項(概要)

いつてもだれても5・7・5 —くらしの中に川柳を—

- 1、応募受付期間 平成22年4月1日(木)～6月30日(水)(当日消印有効)
- 2、応募規定

(1) 作品 一人各題二句詠(未発表作品に限る)

- (2) 応募料 一人につき1,000円(但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。)
- (3) 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。
- (4) 応募先 第25回国民文化祭久米南町実行委員会事務局 文芸祭「川柳」係
〒709・3614 岡山県久米郡久米南町下弓削502-1

- 3、宿題・選者(事前投句) 高校生・一般の部

「畳」|| 佐藤 美文(埼玉) 「団 子」|| 天根 夢草(大阪)

「バランス」|| 西潟賢 一郎(東京) 「山 脈」|| 長谷川 紫光(岡山)

「事前投句」小・中学生の部

「弁 当」|| 太田紀伊子(茨城) 「伝える」|| 薬師神ひろみ(愛媛)

「当日投句」

「誕 生」|| 宮村 典子(三重) 「桃」|| あきたじゅん(宮城) 「自由吟」|| 岩田 笑醉(静岡)

「第二次選者」

本田 智彦(大阪) 津田 暹(千葉) 久保田半蔵門(大阪) 渡辺 貞勇(神奈川) 岡田 千茶(岡山)

- 4、賞(予定) 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・岡山県知事賞・第25回国民文化祭岡山県実行委員会会長賞

(社)全日本川柳協会教育長賞・久米南町長賞・第25回国民文化祭久米南町実行委員会会長賞・久米南町教育委員会教育長賞

(社)全日本川柳協会会長賞・岡山県川柳協会会長賞

- 5、発表会場 川柳大会(当日投句受付、入選発表、選評、表彰式)

平成22年10月31日(日) 11時00分～16時00分 久米南町立久米南中学校体育館

入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方(小・中・高校生は入選者)に無料で配布。

- 6、問い合わせ先と募集要項の依頼先

〒709・3614 岡山県久米郡久米南町下弓削502-1

第25回国民文化祭久米南町実行委員会事務局宛 TEL 0867(28)3831 FAX 0867(28)3832

- 7、主催者

文化庁・岡山県・岡山県教育委員会・久米南町・久米南町教育委員会・(社)全日本川柳協会・岡山県川柳協会

第25回国民文化祭岡山県実行委員会・第25回国民文化祭久米南町実行委員会

編集後記

電話番号の変更がそのままだった、実情に沿わない広告が散見されました。

☆顔はもう思い出せない年賀状—今年の初めの拙吟です。共に語り共に飲んだ在学時の友、社会人としてお世話になった先輩や上司、そして同輩や部下後輩から、幾星霜を隔てながら、年賀や暑中見舞をいただき差し上げています。エピソードは覚えていても、顔はおぼろげにしか覚えていない方が何人も居られます。そんな方の暑中見舞や年賀状は、まだ生きてるよ、元気に働いているよと、懐かしき語りかけてくれます。

☆今月号で団体や個人の暑中見舞広告を募集しています。今回からは、原稿を専用台紙に貼り付けて申し込んで頂くことにしました。これまでの「阿吽の呼吸」での掲載では、川柳会会員の入退会や役員の交代が反映されなかったり、住所・

電話番号の変更がそのままだった、実情に沿わない広告が散見されました。

☆間違いない「暑中見舞」とするために、団体様には原稿貼付用台紙を付けて案内状を差し上げました。個人用には5月号の巻末に原稿用台紙を綴じこんでいます。皆様にはお手数をかけますが、この台紙を必ずご使用願ひ、正しい原稿を貼り付けて（または書き込んで）お申込下さい。（尚）

★五月の雨 尾道生駒似たるあり 薫風

★一月は往ぬ、二月は逃げる、三月は去る。日の光りはすでに五月。日替りメニューの諸事雑事をこなしながら、月に最低でも五回大阪へ行く。ひどい場合は編集、句会、カルチャーと連続三日間大阪通いになる。

★他の日々も、編集やカルチャーの資料作成準備など時間に追われているのが実情。そんなこんなの日々、

ひとこと

酒と川柳

一月号の長井善純さんのひとこと欄の「未知の扉」に、全くその通りと共感している。

「句会終了後の懇親会において、諸先輩方の人間味溢れる会話に触れ、本当に有意義な」と述べているが、私はこれこそが川柳することの喜びであり、句会の意義だと思っている。しかしながら、全ての川柳会が

息抜きになにげなく手にした有栖川有栖のミステリーに嵌まってしまった。仕事に手がつかぬ。災難である。★有栖川有栖、通称アリス れっきとした男性である。昭和三十四年大阪生れの大阪育ち、上宮高校から同志社へ。現住所は著書から推測するに天王寺区夕陽ヶ丘。作品には天王寺駅や四天王寺、近鉄など、本社事務所周辺が出てくる。大阪弁のつつこみなど、アリス

ワールドは謎に満ちた万華鏡である。〔朱〕
〔今月は投句締め切り日厳守という悩ましい問題について再度お願いしたいと思います。〕
〔2月号49頁の社告で協力をお願いした結果、速達が増え事務所までお持ち頂く方も多くなりました。〕
〔ただ3月も、16日に選者の先生方に投句原稿を送付した後に十数名の方の投句が届き、それを追加分として項目毎に仕分けして、記載しカウントを変更、速達で9箇所の先生方に送るのに一時間強を要したと聞きました。事務所も効率化、経費削減を迫られているのは事業所等と変わりありません。とはいえ、一人でも多くの方にご投句頂きたいのも切なる願いであります。〕
〔このあたりをもう一度ご理解頂き、15日着のご投句を宜しくお願い申し上げます。〕

そのようではないのも一面の事実ではある。懇親会の席上で、酒の力を借りて人様の入選句を批判して得意がる、酒癖の悪い輩が居なくもない。私はそのような雰囲気の良い懇親会は、原則として出席を遠慮することになっている。川柳の会は、人間味溢れる和気藹々の雰囲気でありたいし、酒は楽しく朗らかに嗜みたいものである。川柳も酒も、結局は人であるとなつくと思ふ。（原 煩悩児）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)

地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「距離」 (5月15日締切)

7月号発表

高田美代子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B

A

B

A

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁

1/6頁

1/3頁

2/3頁

1/2頁

1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		
—		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社



作品募集

7月号発表(5月15日締切)

川柳塔(8句)
水煙抄(8句)
愛染帖(3句)
檸檬抄(2句)
一路集(3句)
初歩教室(チャンス)(3句)

河内天笑選
川上大輪選
新家完司選
三宅保州共選
高田美代子選
丹後屋肇選
源田八千代選
細田裕花選
鈴木公弘担当

8月号
檸檬抄「痛い」
一路集「貢ぐ」「割引」
「テンポ」
初歩教室「必ず」

本社5月句会

とき 5月7日(金) 午後5時開場・6時20分締切り
開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06-6772-1441
おはなし「川柳あらかると」

兼席題「福の神」「頃」「バック」「無理」「芳う」

会費 1000円 投句料 500円(切手可)

河内天笑選 坊農柳弘選 水野黒兎選 米田恭昌選 堀正和選 井伊東吉選 三宅保州選

本社6月句会
7日(月) 午後5時から
兼題「遊園地」「螢」「ふいに」「保険」「湿る」

第28年度 夜市川柳募集

第12回「勇気」小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌読み込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までお願いいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一〇年(平成二十二年)五月一日発行

発行人 河内権治
編集人 穴吹尚士
印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(06)六七九一三四九〇番
振替〇〇九八四一四二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50余年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)